

---

## 日本本土在沖縄県人の出稼と定住生活の研究

### 〔生活記録編－２〕

石原昌家

#### 〔生活記録編－２〕にあたって

本紀要第18巻第2号（1992年3月）では、事例1. から事例8. まで掲載した。

本号も前号と同様、沖縄県人の日本本土での出稼生活とそこに定住していったもののその過程と生活の記録を収録したものである。また、これら個々人の生活記録をとおして日本本土における沖縄県人の郷友会・村人会・県人会についてその機能と役割を明らかにすることも前号に引き続き本号の目的である。

本号〔生活記録編－２〕では、事例9. から事例20. まで掲載した。沖縄県人が密集する関西地域を始め関東地域における出稼、定住生活を営んでいる多数の沖縄出身者から聴き取り調査を行っているため、生活記録編は今後も継続されることになる。それは前号でも既述したように、後に論述編でこれらの生活記録を通しての分析・考察をおこなうにあたり、その中で可能な限り沖縄県人の行為・行動様式を通してその県民性を解明していくためであり、そのためには多くの事例を記録していくことに意味がある。

沖縄県人一世が中心となっていた前号と多少異なり、本号では、戦後生まれの二世がたどった生活史も含まれている。その中からは一世達とはまた違った形で、日本本土での生活を通し、沖縄県人意識の変容やアイデンティティーの形成を行っていく二世達の姿を見ることができる。また、これらの要素から、一

世の時代に見られる日本本土と沖縄間の相違のみでなく、日本本土に居住している沖縄県人の中でも多岐にわたる生活形態の中でさまざまな相違が見られると同時に他方では共通性をも見ることができる。

次に挙げられる本号の特徴は、全国的にもその名が知られていた沖縄県人の生活を記録していることである。沖縄県人の中にも、単に出稼という用語ではもはや括れないスケールの大ききで仕事や政治にコミットしていた人物がいたことがわかる。その点、前号とはまた違った側面で沖縄県人の出稼と定住生活を見ることができるであろう。

前号の〔生活記録編－１〕では、聴き取り調査した生活記録を、一人称で記述してあるが、記述の仕方は、「です／ます」調ではないので、その人の語り口が生かされていない。つまり、「だ／である／だった」調を採ったため、その人の心情などが伝わりにくい記述方法になっている。生活史記録は紙幅の制約を課しないと常に長文になる傾向がある。

「論述編」のためには、それぞれの生活史歴の内容をより多く記録しておくことが必要なため、文体を「だ／である／だった」調によって文の節約をはかった。

#### 事例9.

砂川常方氏（大正11年生・平良市東仲宗根出身・1980年兵庫県尼崎市大物で聴取）

## 出稼前の生活

父は、私が5歳の時に亡くなり、母は7歳の時に他家に嫁いでしまった。弟は、3歳だったので、母がその弟を連れて嫁いだ。私は、父のキョウダイが3人いたので、そのなかの伯母に引き取られて、いとこ達の間で育てられてきた。

いとは6人おり、私を入れて子供だけでも7人もいた。だから伯母夫婦を合わせると9人家族の生活だった。13歳までは、芋堀り、馬の草刈りなどをしていた。

やはり、他家での生活は、辛い思い出がいっぱいあり、その時の反抗心が今日の自分を築く上でバネになっている。勿論、いま辛かった時代を恨んだりはしていない。13歳の時に平良の北尋常高等小学校を卒業後、家が貧しかったので、野村が酒屋（現在は、レストラン経営）を経営している時、そこへ奉公に出たら、そこではわが子のように扱ってくれたので、こんな良いところは無いと思った。酒屋の朝は早かったので、朝3時～4時に起きて一生懸命に働いた。しかし、15歳の頃になると、ワイシャツを着けたいと思っても、給料は前借りしているので、なんにも買えなかった。それで、子供心にもこのままここには、なんにも出来ないと思い、それが動機で一人本土に飛び出してきた。

## 家出同然で大阪へ

宮古で初めて働き始めたときの月給は、7円だったが、翌月には15円まで引きあげてくれた。そして、月給15円の半分は貯金して、40円以上の貯金ができたら、昭和13（1938）年11月16歳の時、本土へ出稼ぎに来た。知人が那覇にいたので、その人には大阪に行くと話したら、あてもないのに行くのかと怒られた。しかし、絶対に行くと言って段取りをつけ、大阪築港の天保山にたどり着いた。船便

は5日位かかり、食事は船賃に含まれていた。船内では、話し相手を見つけたが、みんなわが身だけのことしか考えていない様子だった。乗り合わせた乗客は、学生が多かった。

野村酒屋は、映画館の経営もしていたので、晩は新世界という映画館で映写機を回したりしていた。それで映画を通して都会のイメージが出来上がっていたので、不安はなかった。この天保山から市電が走っていたので、それに乗車して乗りつづけていたら、始発地点に戻っていることに気づき、また、別の乗り場に行き、結構乗ったなと思ったとき、夕風橋という停留所で下車した。そこで3～4階建ての建物を初めてみた。荷物は、風呂敷包みひとつで、着替えだけ持参して、履物は下駄履きだった。夕風橋では、ちっぽけな旅館を見つけたので、朝はゆっくりしようと思っていたが、緊張していたので、あまり寝ることはできなかった。すると、旅館の主が「ぼん、何しにきた」と尋ねるので、働きにきたと返答して、どこか紹介して欲しいと依頼した。すると、吉井というカレンダー会社を紹介してくれた。会社名はカレンダーだが、仕事の内容は、上海などに写真台紙を梱包し、箱詰めしたうえで送っていた。給料は、三食付き15円で、勤務時間は、朝7時半から晩の8時頃までだったが、配達先の場所を見つけられない場合、夜10時頃までかかったりした。そこへ落ち着いたので、伯母さんたちと相談せずに家出同然に出てきていたから、手紙を出して大阪市港区の市岡に居ることを知らせた。

職場では、言葉がハキハキしていない沖縄生まれということで、馬鹿にされている感じがあった。それで、同僚に階段を上がりながら、雪を見たことがあるかと言われたとき、馬鹿にされていると思って、肘でつついたら階段下まで落下してしまい、工場長にまで呼ばれて暴力はいかんと説教された。物の弾み

で落下したのだが、それでも謝らされ、一時間半ほど座らされた。今でこそ、沖縄県を良く知られているが、当時はあまり知られていなかった。私はいつも映画をみていたおかげで、言葉は不自由しなかった。60名ほどの従業員のうちに、県人はひとつ年下で国吉というひとがいただけだった。

### 転職と環境への同化

一年後には家の近辺の久保田鉄工所の貼り紙で見習工を募集しているのをみたので、技術を覚え鋳物師になろうと思って、応募した。勤務先の会社は、なんで辞めるのかと引き止めようとしていた。子供だから、相談相手はいないし、こうと思ったら気の向くままに突き進んでいった。

実母に、初給料貰ったとき、5円送金したら、喜んで吹聴して回ったらしく、伯母らからは、お前を置いていった母になんで送金するのかと、非難の手紙が届いた。

それで、親戚2～3人から私の財産はどこそこと聞いていたので、母には財産がないが、伯母はその畑を耕しているのではないかと手紙を送ったら、あんたには財産はない、ときつい返事が届いたりした。

港区市岡二丁目には、県人が沢山住んでいて、そこで宮古人がいたら一生懸命話しかけた。

一息ついた1ヵ月位たったころから、沖縄なまりの人を見つけると、何処の人ですかと尋ねたり、また、同じ年頃の男や女の子の話し相手を見つけようとしたりした。会話の弾んだ人の所には、再度尋ねていき、友人知人を増やそうとした。そこでの話の内容はどんなことをすれば、落ち着いて大阪で住んでいけるか、どこかに給料の高い仕事はないかというようなことばかりだった。

久保田鉄工では奥村さんという人の弟子に

なった。拳骨を貰いながらも、歯を食いしばって頑張ろうと思った。給料は、月20円だった。寮生活は嫌だったので、飯屋の二階で三食付き6円で下宿させてもらった。月30円ほどに給料はあがっていたが、19歳の時には親方から離れて、自分で仕事をするようにいわれた。「請負制にしてください」といわれ、心のなかでは嬉しかったが、怖いので「まだ出来ません」と断ったが、「お前だったら可能だ」と言われ、そうすることにしたので月給120円も貰うことがあった。それは、時間的に午前3時から午後5～6時まで仕事をした上での給料だが、これまでの4倍もあった。鋳物師の仕事は、熱いうえに暇無しの力仕事で重労働だった。しかし、高給取りになったので、蓄音機など当時欲しいものは、全部入手できた。当時は、蓄音機、レコードを持っているひとは少なかった。親方には、「だれにもこれだけの給料を貰っていると言え」と言われても、金を持つと喫茶店に友人を連れていったりして、大判振る舞いをしていた。飯屋の二階の下宿先では、友人を奢ったりしていたので、飯代は30円位払っていた。それが楽しかったようだ。飯屋のオヤジも、久保田鉄工所の雑役夫をしていたので、私の仕事振りを知っていて、それだけの給料を貰って当たり前だと言っていた。昭和17年、20歳の頃である。スーパーマン的な労働は、朝鮮人の方が多かった。力仕事は誰にも負けないという自信があった。

私は、小さいころから農業していたので、力仕事は慣れていた。月夜の晩には午前3時頃から草刈りにでていた。一緒に仕事をする近所の良い兄貴が、一緒に寝泊まりしてくれたりした。7～8歳でも叔父・伯母のご機嫌をとらんといけないという気持ちはあった。それで、朝早く、草を持っていくと、褒められたりするのが嬉しかったようである。

久保田鉄工所にいるとき、勤務時間を終え

てからでも午後8時から11時まで映写技師として働いたこともある。また、沖仲仕の仕事も一度やったが、請負制で、仲間内の配当を増やすためにわざとへばらして、途中で辞めてしまうような仕掛けをされたこともあった。当時私の臨時収入は、多かった。経験者を求むという港区の役務町でサンサ倶楽部という名前の映画館の募集をみて応募したり、夕凧パラダイスでも2〜3ヵ月働いた。技師とまではいかない、助手的仕事だったが、月20円にもなり、1年余も働いた。また、大入り満員の時は、50銭の大入り袋がでた。50銭では、一日中遊べる時代だったので良い実入りだった。

### 兵役と終戦

昭和18(1943)年、22歳の時に召集された。大阪市港区区市岡で兵隊検査を受け、甲種合格したので、宮崎で航空兵の戦闘員として訓練をうけた。訓練内容は、通信、爆弾、積み込み、機関砲取り付け、弾倉綴りなどであった。少年飛行兵の練習隊だったから普通の兵隊とは違って、安全な場所へ移動して行った。そこでは、一人の「落ち度」のために連帯責任ということで、2〜3日飯も食えないほど叩かれたこともあった。私の部隊は昭和19年夏、シンガポールまで移動させられた。2千人以上の兵員の内、輸送船団などがやられて、200〜300人しか生存していない。私が移動したころは、戦闘は落ち着いており、航空兵は待遇がよかったが、終戦後が大変だった。武装解除されたうえに、放り出された感じでエライ目にあった。しかし、雨が降っても大丈夫なように茅葺き小屋をたて、生活体験を生かしていった。

沖縄とは植物が良く似ていて、沖縄で雑草生活の体験があり、雑草ではどんなものが食べられるか否かの判断ができたので、内務班は

塩だけを確保すればなんとかなるということだった。内地にもう帰れるということで欲張って衣類を沢山持っている兵隊が多かったが、上等兵の私は、衣類は着替えだけあればよい、塩だけ持っていけと周りにすすめた。それで岩塩を雑嚢や飯盒に入れ、持ち物は塩だけだった。その塩で雑草が食べられ、餓死を免れることができた。これは、田舎生まれの知恵だった。私の周辺の沖縄県人には、栄養失調が見あたらなかった。はっきりその点は他県人たちがっていた。学問的には、将校など上であっても、生活の知恵で私らが上だった。

また、内務班の4〜5人で、米を入手して、ローソクで飯盒の米が5合炊けた。時間はかかるが、消灯後、一斗缶を三角に穴開けて、上官にばれないように米を炊いてこっそり食べていた。米は、倉庫の山積みしてある内部にトンネルを掘るようにして、見えない部分の俵から靴下に詰めて、身体に巻き付けて入手してきた。靴下を禪代わりの形でイチカバチかと考えていた。また、私自身は、収容所内で敵兵に呼ばれて出ていったものがどこでどうなったのか、二度と戻ってこない例を知っていたので、手榴弾を禪の中に絶えず持っていた。いつ非常呼び出しがあり、どうなるかわからんから何時も禪内にそれをぶら下げていた。軍曹以上は集合といって連れて行く場合があった。引き連れて行かれたのは、まったく消息不明になっていた。殺されたのか、どこへ連れて行かれたのか分からなかった。もし、自分もそういう目に合ったら、かれらにやられるよりは敵兵の真ん中で自爆しよう、決意していた。そういう度胸もあったし、死ぬときは相手も巻き添えにしようと思っていた。人間というのは、とことん生きていけると思える所までは、あれこれやるが、また、袋の鼠でどうにもならんと思ったらその覚悟はできる。

日本への引き揚げは、シンガポールからだった。夕方5時までには到着しないと船に乗り遅れるということで、寝ずに一日中歩きどおしだった。

### 戦後の買い出しと食用油の発掘

昭和21(1946)年8月に舞鶴港へ引き揚げてきた。戦後の第一歩は、日本本土でなんとか生活しようと決意した。沖縄には小さいころから両親はいないし、帰ってもしかたないと思っていたので、昔のような生活状態になってはいけなさと考えていた。砂川泰寛、砂川友見さんら親族が関西にいたので、少し心強く思えた。それで、兵隊から帰っても、ヤレヤレと思った。

親族の砂川さんらが大阪市内に住んでいることがわかり、しばらくそこで世話になった。生活の第一歩は、友人があっちこっちにいて、その友人らにいろいろ教えてもらって、物々交換の買い出しからスタートした。芋一貫目買ったらいくら儲かるとか聞いたりなんかして、私もそれだったらできると思い、力では負けないという自信があった。それで20貫とか30貫とか買い出ししてきた。宇治山田まで電車に乗って、百姓屋に寄り、毛布など衣類と交換してきた。「こんなに沢山もって捕まるぞ」と友人らにいわれていたが、それで資金を作り、一貫目15円の芋とかを買ったら、大阪で20円位で売り、一貫から5円ほどの利益をあげていった。昭和21年9月頃から一年ほどその商売をやった。

軍隊時代、シンガポールで現地住民が椰子の油を搾っているのをみたことがあった。ある日、山中に自動車で遊びに行ったとき、そこに住んでいる住民が油を搾っていた。トラックをUターンしたとき、油を入れてあるドラム缶を引っかけ、引っ繰り返してしまった。それで土の中に油がしみ込んでいった。故意

にしたわけではないので、ゴメンゴメンと謝ったら、むこうは「なんでもない」というジェスチャーを示し、急いでみんながスコップを持ち出してきて、泥まじりの油を土ごとすくって、また、ドラム缶に入れていた。それを見て、我々はびっくりして、何をするのか、だが、どうにもならんだろうと思った。すると、かれらは、水を沸かしてそれに入れると油が浮いてくるので、それを掬うのだと言うので、なるほどと思った。

復員後、甲子園の海岸方面には豊年製油など多数の製油所があり、それらが米軍の爆弾でやられているので、そこらの土地は油がしみこんでいたのがわかった。私は、この軍隊時代の体験をヒントに油を採ることを思いついたのである。それで、日産石鹼という会社が、まだ関西にあったが、その油タンクが爆撃され跡形もなくなっていたので、その浜のほうを掘ったら、油が採れて一日4千円も儲かった。私は、その時もっと早く気づけばよかったのにと考えた。

私は最初にこの仕事を思いついて、やりだしたのは、沖縄人だと思う。私の場合、親戚の泰寛さんが、油商売しており、それは椰子の油だということを聞き、それで自分の軍隊時代の体験を思い出して、それを話しているうちに、「食用油会社がなかったか」と尋ねたら、そこらはタンクだらけで、空襲を受けて製油タンクが爆発したという話を聞いた。それでは油が流れ出ているはずだからと、その場所へ急いで行ったら、すでにそこにたくさんの人達が次から次へと入りこんで、油採りをしていた。空襲跡だから、焼き跡には薪がたくさんあるので、それを拾いながら、水を沸かして沸騰したら油のしみ込んだ砂をスコップで掬って入れ、油を分離させて、それを掬ってはまた砂を入れるという作業を繰り返して続いていた。どこの出身かは知らなかつ

たが、何千人という人が相次いで入り込んでいた。私は、沖縄人に金儲けがあるぞと呼びかけていった。それは、買い出し生活の後だった。

### 沖縄人連盟の支部と食油発掘

沖縄人連盟が豊年油脂の土地全部の発掘権を入手してあったので、私らは日本油脂の権利を入手して、そこでこの作業をやりだした。狩俣寛行さん（事例10. 参照）が沖縄人連盟の仕事はやっていた。私と泰寛さんが沖縄人連盟が豊年油脂から搾った油を購入して、それを販売する仕事もした。製油所跡から発掘した油をブローカー（仲買人）が、石鹸会社などに斡旋して売りさばいていった。日本油脂の広さは、1万坪位で、1メートル掘って出るところもあれば、2メートルほど掘らないと出ないところもあった。基礎部分がないと思える所を掘り起こしていけば、跡は砂地に行き当たった。下は全部砂地であり、下には水があり、水より下には油は絶対に下がないということが分かっていた。つまり、油の層が出来上がっていたので、石油を掘ると同じだった。水に押し上げられて油が溜まっている所もあり、そこに当たったらボロイ儲けになった。ヤマトウンチュ（他府県人）にもそれをやっている人もいた。しかし、体力のいる仕事だったので、沖縄人が向いていた。それを、県人会単位で事業としてやったのは、沖縄県人だけだった。

発掘した跡の埋め戻しはきちんとやるという約束で掘っていき、地ならしまでしていった。沖縄人連盟には、責任者がいるので、会社も安心して許可した。掘りっぱなしだったら許可するはずはなかった。だが、日本油脂の場合は、責任者がいなかったのが掘りっぱなしだった。しかし、後からは厳しくなり、そこまでは掘り進むなどかかれるようになって

たが、その時は、もう掘り進んでも出なくなると諦めかけている時分だった。立て札をたてて、ここから掘るなど規制してきたので、もう掘るのは止めようと思った。豊年油脂の場合は、そういう規制がなかった。そこには、ヤマトウンチュは加わっていない。山口県の岩国でもヤマトウンチュがその採油をやっていたようである。

私は、豊年油脂、日産石鹸、日本油脂の会社跡の発掘しか知らない。そのうちでは、日本油脂が一番広がった。私は、日本油脂が出なくなった後、豊年油脂と昭和電極との地面にしみこんだ油脂があったので、昭和電極に個人的に頼んで、私一人でそれだけ掘らしてもらった。そこだけでも15日位で10万円分くらいの稼ぎをしたので、もっと出ればいいなと思ったがもうそれ以上は出なかった。しかし、ダイヤモンド鉋脈を掘り当てた気分だった。豊年油脂は、製油タンク一杯に入っていたのが空爆で流れだして、おまけに砂地だったから油が滞留していた。豊年油脂はその敷地内に沈んだので、ドラム缶の何百杯分も出た。面積は少なくとも、効率よくたくさん出た。穴を掘ると、ため池みたいに油が溜まりだし、それを杓でくみ上げ、それが出なくなると、油のしみ込んだ砂を炊いていった。それはドラム缶の何百という数だった。油を炊くのは、女性も行ってた。

当時は日給、150円位しかないときに、一日で4千円、5千円分の油一斗缶分掘り出した。私は一人で油炊きをやっていた。それが楽しみだったし、昭和電極の守衛さんにはパンや寿司の差し入れをしたりして、愛想良くしたものである。会社の幹部に頼んでやりだしたので、他人がおしかけてくるという不安はなかった。「会社の幹部には、ここではなんぼも出ないはずよ、後はちゃんとしてよ」と言われただけだった。

その食油掘り出し仕事で底をついた後、その次は闇タバコに手をだした。手巻きで煙草を作っていた。昭和25年結婚した家内と二人でやったものである。油採りが済んでからは、ウイスキー密造、ドブクロ作りなどいろんな仕事をした。

### 県人会との付き合い

出稼ぎに来た当初、生活に追われ、とても同郷のものとの付き合いは考えられなかった。しかし、生活に落ち着きが出てくると、冠婚葬祭などどうも同郷のものとして見すばらしいものであると感じたので、関西宮古会を結成してみんなで力を合わせて頑張ることにした。沖縄人連盟のみなさんにもどこそこに宮古出身がいたら教えて欲しいと頼んで、宮古出身者の動向を知るようになった。

その呼びかけを始めたのは、戦時中から校長をやっていた同郷者がいたので、その人に頼んで、「先生ひとつよびかけて貰えませんか」と頼み込んだ。「君らも動かないといかんよ」と言われ、「はいやります」という約束で会長を引受させた。関西宮古会を結成したのは、昭和33（1958）年3月31日だったが、その前の昭和30年頃からその結成の動きがあった。生活が落ち着きだすと、周辺が見えはじめる。それまでは、自分のことしか見えないで無我夢中だった。

### 沖縄帰郷意識

関西宮古会（郷友会）の役職については、出身地で祭りがあると参加するように言われるので、ちょいちょい帰郷するようになった。私は、昭和51（1976）年から会長職になっている。それまで、西宮地区幹事を長年やってきた。会の主な行事は、敬老会、運動会、新年会、故郷会、冠婚葬祭が多い。しかし、私の持論

は、酒飲んでただおしゃべりする位なら集まん方がよい。後継者が自然に郷友会に集ってくるような会にしたいと思っている。会の案内状、招待状をこの会に興味がないという者に対して、逆にしつこく出していくことにしている。そして、ときたま、いきなり方言で話してみると、「アレッ田舎を忘れていないんだね」と、それでは一度出掛けてみようかと会合に顔を見せるようになる。いろいろ工夫してできるだけ避けようとする人も引っ張り込んで来るようにしている。

今でも関西宮古会は、事務所もないので、誰も会長のなり手が無い。400何十所帯に案内状を出しても、やっぱり来る人しか来ない。そして、敬老会では、年会費を納めでない人にも記念品を贈ってきたので、怒る人もいたが、しかし、その人の親戚・友人・知人らが必ず出席して、寄付もするので、私はこのようなやりかたでも、4年間一度も赤字を出さずにやってきた。

### 戦後の職業歴

終戦直後履歴書を30か40通程書いて久保田鉄工を初め、職探しをしたが見つからず、それでは、担ぎ屋でもなんどもやってやれと思った。煙草巻き仕事しながら、昭和24（1949）年から撰津板紙で仕事をすることにした。これは、私の先輩で宮古・伊良部出身の平良さんの紹介で見つけたものである。

そこで撰津板紙の飯田組に採用され、飯田マサゾウの所で8年程働いた。紙屋といっても担ぎ屋みたいなもんだった。重さ30～40貫の紙の入った箱を一日中機械の前に配置しないとイケなかった。飯田組は40名ほどいたが、給料はあまり良くなかった。そういう力仕事できるのが7～8名いた。それを担げるひとは力仕事に自信があった沖縄県人だけだった。難儀仕事していても、日給200円位だった。

製品の紙類はいくらでも売れて、買い手がどんどんやってきたので、まだ湯気がたっているのに、売り出していった。

会社から、生産を向上させるために、もっと何か方法はないかと言われ、飯田組に夜食位は出してほしいと依頼した。「社長に聞かないと分らん」と係にいわれたので、それで摂津板紙会社と直接交渉した。すると、「君達は夜食は出ていると思っていたが、出ていなかったのか」ということだったので、「いままで、パンひとつ出ずに頑張ってきた」というと、「必要な分だけとって帳面に記入しておくように」と言われた。夜食が出るとみんな元気がでて、午後11時ころまででも一生懸命仕事に励んだものである。それで、生産を10トンプラスしようと会社が言えば、そうすることもできた。ワイヤーを巻くプリー・ウィンチを軍隊時代に経験していた。現場内にシャフトが回る機械があったので、その経験をもとにウィンチとして使えるのではないかと試してみたら、原料を持ち上げることが出来た。それで沖縄県人7~8名で砂川グループを結成し、原料係として自分らに請負制にさせてくれと会社に頼み込んだらそれが実現した。一日何トンまでは、間に合わしますという約束をしていた。すると、日給にしたら、500円~600円も上昇していった。

これは、飯田組がうけて、そのなかに砂川グループが原料関係の仕事をするという方法だった。我々田舎者でも、根性があることを会社に浸透させていった。そして能率をあげるようにしていき、生活もましになったなど、仲間と一緒にドブロクを飲むようになった。それは朝鮮人が主に作っていたが、沖縄県人は、ドブロクから蒸留酒を作っていた。

創意工夫の一例として、紙の原料を長期保存するために、藁だけで作った米俵の廃品を入手することにした。その藁を屋根代わりに

して原料に被せていくと、1年でも持つので、原料確保の良い考えを思いついた。それは、少年時代や軍隊時代の知恵だった。

一日に何百トンも米俵を入手でき、会社は、馬糞紙で大きく営業実績を伸ばしていった。いわば、藁で多くなった会社である。私は、業者が藁を持ってくるのを確保する仕事だった。それは、飯田組内でその仕事をしていたが、昭和32年にはその組を辞めた。そして、1965年、昭和40年、8年目に自分自身独立していった。

資本は、摂津板紙会社内での一番大きい工場で売店を経営して作っていった。私の妻が5、6年ほど売店を営み、うどんも牛乳も売ることにした。当時はうどん一杯15円から始めた。残業のとき、ひもじかったら精出して仕事できないという自分の経験からそういう仕事を考えた。働いている若者の気持ちは全部わかるつもりだった。摂津板紙は、本社だけで300名ほども従業員がいたので、売店の売上は一日3千円もあり、私の賃金の3倍もある日もあった。最初は給料払いのツケで給料日に会社の事務所に伝票を回して天引きさせていた。資本はなかったが、知人から借金してこわごわやりだした商売だったが、堅い商売だったので2年後には30万円ほどの纏まった金が出来た。当時、7~8万円ほど友人らから借りたがほとんど手を付けずに済んだ。電気も場所代も会社持ちだった。それで会社の上司には、サービスするようにした。その売店経営を5年ほどやった頃、衛生法だと認可証が必要だとかと、総務の方にいわれて辞めてしまった。後で調べたらそう問題ではなかった。

その後私自身砂川商会として、スタートした。砂川商会は、県人だけの従業員18名抱え、そのうち所帯を持って生活を守っている先輩が多い。若い者は誘惑されて落ちつかず、運



賃稼ぎのために一週間ほど稼いで帰るものがある。戦前からの出稼ぎ者は、4～5名ほどで、残りは戦後来ているが、伊良部島などあちこちから入れかわりたちかわり来ている。私は、出身地で区別することはない。甘えてしまって仕事にならないから、区別しないようにしている。給料は、田舎のものに待遇を良くしているつもりでいる。

妻も宮古人で、7歳から関西にきている。私に、「もう少ししたら宮古に帰ってもいいよ」といっている。家内の弟が、岡山で県会議員をやっている。子供らは、小さいときから何べんも宮古島に連れて帰っている。また、長男嫁は、大和人なので、沖縄と宮古を知ってもらうために、正月に連れて帰った。そして、沖縄の生活はレベルが高いと思ったみたい。自分の親から受け継いできた財産を親戚に譲ってきたが、ちょっとでも買い戻したいという気持ちになっている。

#### 事例10.

狩俣寛行氏（大正13年生・宮古島平良市東仲宗根出身・1980年兵庫県尼崎市大物で聴取）

#### 宮古島を後にして

私は、大正元（1912）年生の長男とは13歳も年下の6男だった。父は私の誕生31日目に亡くなってしまい、その時兄3人もバタバタと赤痢で病没してしまったという。平良第二尋常高等小学校に入学して、高等科2年の中期に大阪にきた。長男兄が大阪にきていたので、それを頼ってきた。そのきっかけは、母親が兄を頼って何かの技術を身につけて来るようにと言ったからである。兄は、大阪市港区市岡に狩俣という親戚がいて、そこに住んでいた。兄は発明家で、棟上げ機械を作り、特許も取っていたので、暮らしは良かった。

宮古でも線香を作る機械を発明して、専売特許を那覇で取ってから出てきていた。

私はその兄のもとにしばらくいて、その後早稲田大学に進学するつもりで、昭和17年に東京へでた。神田神保町の予備校に通い、一年半東京にいたが、昭和18年9月に志を変えて、航空隊に受験して志願入隊した。南宮崎の赤江という飛行場で、血を吐くほどの訓練をうけた。地球儀に入ってグルグル回された。私は砲術の方だったが、機銃班に回された。場合によっては、陸戦隊に回られることもありえた。以前は、1年練習期間があったようだが、私らの時には半年練習だった。毎晩試験があり、90点とらなかつたら駄目だった。モールス信号、手旗信号を覚えるのはもとより、弾倉の中に360発も入っている射撃の訓練がきつかった。照明弾を撃ち、一つの弾が当たると赤くなるので、それをめがけて鉄鋼弾を撃つと、9ミリ砲まではよいが21ミリ砲まで撃つとガクガクする。

また、弾は真っ赤になるので、二、三、二、三で撃っていく。そうでないと焼けてしまう。それから鹿児島出水に移動して、さらに鹿屋、鴨池、再び南宮崎にきた。そのとき、沖縄戦の特攻隊員として、くじ引きで出撃することになった。それぞれの飛行場から何機ずつと決めて、それから夜中3時にどこそこで編隊を組むという約束ごとをしていた。そういう指示の下に動いていた。私はくじが外れたというだけだった。出撃する前にどこそこで編隊を組むというのを、敵は知っていた。沖縄に出撃するとき、暁黎明の作戦といっており、午前4時から4時半の攻撃と、熟睡時の攻撃という計画だった。しかし、米軍は、沖縄を乗り越して、宮崎まで艦砲射撃を飛ばしてきたし、宮崎沖合でも艦砲射撃をやっていた。

仲間たちは相次いで特攻隊に加わっているなかで、私達は訓練中の時に、終戦を迎えた。

正直なところ、終戦となり良かったな、本当かな、戦争は終わったというが、ひょっとしたら、銃殺されるのではないかと思った。それで、古参兵なんかは、敵兵の手でやられるよりはと、自害していった。腹切ったりして5名以上は死んでいる。少尉、准尉クラスが自害していった。敗戦ということに疑心暗鬼だったが、母親も本土に疎開させていたが空襲などで亡くなっていたら身の振り方を考えようと思った。

当時は、兵舎を作る余裕はなかったので、民家で下宿していた。一軒に4人が宿泊する形で分散下宿していた。それで分宿先のおばさんに母の生死を確認してくると言い残して、大阪へ向かった。すると、健在だということがわかり、宮崎には缶詰などをおいていたので、それを取りに戻ってきた。しかし、航空隊には、缶詰類が沢山あったので、残務整理をしながらしばらくそこに滞在して、12月にまた大阪へ戻った。

#### 戦後の闇商売の始まりと食油発掘

宮古出身の知人に、その友人が女子挺身隊として長野県に来ているので、一緒に迎えに行ってくれと頼まれた。そこには、梨が沢山あったので、土産のつもりで一個10円で買ってきたら、大阪駅で買い手があらわれ、10倍もの値段で売れた。それでびっくりして、また、長野県に引返して、梨を買ってきて大阪で売るという商売の道に入った。汽車は駅構内に入ると、10キロ程度のスピードだったから、無賃乗車で行き来していた。鈴なりだったので、切符を所持している者所持していない者の区別がつかなかった。買い出し資金を1000円持って、梨を三回買い出しにかけた。その次は、こっちで入手した衣類と宮崎の米と交換しにいった。古パンツと米一升と交換できた。それを何回も重ねている内に、その

まま大阪に定着していった。

それから間もなく、戦後沖縄県人会の前身の沖縄人連盟の浜田支部と東大島支部とが合併して大浜支部となり、そこで、連盟は強力な組織になっていた。その時、私はその青年部長をやっていた。西宮市鳴尾の豊年食油が、太平洋戦争で米軍の爆撃でやられ、その食油タンクの横が砂地なので、そこに油がしみ込んでいた。それでちょっと掘ると油がしみ出た。周辺には、吉原食油などたくさんの食油工場があった。青年部長時代にある沖縄県人の3人組が食油砂を発見して、かれらは大金持ちになった。その3人組に支部にもその仕事をさせてくれと頼み込んだ。それで県人がみなここ掘れワンワンという形になった。なにしろ、広大な敷地だったから、あるグループはここ、あるグループはここという具合に権利を分け合った。それを統括しようという形で、大浜支部が事業としてやろうということになり、それで、その権利を買うために東京まで行くことにした。

油のしみ込んだ砂から、油を採る方法は、まず砂を掘り起こして、釜の中に水を入れ、次に油のしみ込んだ砂を入れて、どんどん炊いていくと、水と油がどんどん分離していき、砂を棒でかき回していき、浮いた油を網ですくっていく。油はしつっこいので3センチほどの層になっていて、網でも掬えた。つまり、網の目が詰まってしまうので、穴があるのかわからない状態になり、密着してスコップみたいになっていった。

こうして、精製した油をさらにドラム缶に詰めて石鹼会社に卸していった。得た金は、支部が、個々人に日当を出していった。日当は、女性が1500円で、男性が2000円だったと思う。いわば沖縄県人の組織が職場を確保したわけである。余った金は、支部の資金にしていった。食油発掘の仕事は、昭和22～23年

から3年ほど続いた。豊年食油の本社まで行き、きれいに埋め戻すという条件で、本社から無料で、掘る権利を貰った。

しかしながら、湯たんぽに貴重な油を入れてこっそり持ちかえる者もいて、支部内の県人同士で喧嘩になったこともある。組織で金ができると、いろいろ悶着が起きる。喧嘩して、目玉が飛び出した男がいて、その血が私の大島紬に付いてしまい、そこを虫が食って穴があいたままの紬を今も持っている。

また、大浜支部としては、資金ができたので、土地を購入して、稲嶺支部長が芝居小屋を建てて、芝居をやったが、うまく行かなかった。支部長が管理するといって、バラックを建てて囲い込んで、そのままになっている。

後は、もう油も少なくなっていたので支部の事業としてではなく、個人的に食油発掘の仕事をさせていった。

豊年食油が次第に採油できなくなった頃、支部とは別に石鹼作りを自分でやっていた。石鹼不足だったので飛ぶように売れた。しかし、注文は相次いでも、原料の油がなくなったので、なんとはなしに髪の毛からも油が出るということを考えついた。散髪屋から髪の毛を買ってきてそれを石鹼の原料にしようとした。炊いて油が浮いてきたら、それをすくっていった。普通の油は、固まらないが水分を含んでいるとカステラみたいになる。水分が抜けないので、腕が痛くなるまでかき回していった。しかし、油はちょっとしか出てこないもんだから、引き合わなくて、髪の毛油は止めてしまった。

そこで、原料不足に悩んでいた時、椰子の油の良いものがあると聞いて、自分の軍資金を全部はたいてドラム缶6本も買ったのに、傘に塗るパラピンをつかまされた。失敗というのは、こんなもんである。繁盛するとそれに付け込んでくる者がいる。当時の金で3万

円という大金を損した。東大島で家だけが3千円で買えた時期だった。

### 様々な闇商売

職業安定所で日雇い人に一束10円で煙草を売りさばいたり、ウイスキーを調合して、天王寺の西大門でサントリーのレットルを幾らでも売っていたので、それを貼ると闇市では飛ぶように売れた。私はレットルを6つ貼って10 YEARS OLDすなわち10年製として米子の進駐軍に1200円でうっていた。和歌山県から船が次々出ていたので、別府あたりまで沖縄県人は行動半径を広げていた。民間では、和歌山方面で安物ウイスキーが一本で20円位だった。ブルーリボンとか、アルク、アイデアル、サントリーなど、6種類もあった。サントリーは当時1200円もして、儲けが600円だった。一日6000円も儲けがでる時もあった。ウイスキーは、ただし殺人ウイスキーがあり、100cc中メチルが5cc含まれていたらいけない。規定は4cc以下でなくてはならない。メチルアルコールを含まないと酒にはならない。それで4%以下入れないといけない。そういう制限がある。メチルは必要で、限度以上になると、目をやられたり、死んだりする人もでた。

会社勤務では生活できなかった。真面目人間は餓死する状態で、物価が上昇して、バランスが全く取れてなかった。

闇市時代に棚ぼた式に儲かったものは大体駄目になっている。物おじせずにこれと思ったことを思い切って実行していったものが成功している。金をもっていたら、周囲が丁重に扱うものだから、自分は偉いものだと思って、結局は駄目になってしまう。ウイスキーで儲かったら、周囲がそれと物真似するもんだから共食いして、「俺の得意を取った、取ってない」とか、といったことで喧嘩して

駄目になってしまう。

尼崎市のタケヤ通りというところで、沖縄県人が酒屋を経営していたが、終戦直後は「朝鮮人が一等国民になった」ということで、無銭飲食したりするので、私らも若いもんだから、喧嘩になるという時代もあった。身体を張って生きていた。尼崎に井上組というやくざ組織があり、それと沖縄県人が対立していた。商売している沖縄県人に対してショバ代をまきあげようと暴力を働いたので、彼らと格闘となり、県人の組織の必要性を痛感した。それで組織的にヤクザと対決することになった。県人にも兵隊流れが多く、命知らずがたくさんいた。私も特攻隊あがりだから、怖いということはまったくなかった。杭瀬の寺本組という地元暴力団とのトラブルも発生した。それも県人会（沖縄人連盟）が2回わたりあったが話し合いですんだ。とくに長洲支部には県人の有力者が多かった。内地にきたら郷土の者には互譲の精神があり、わけのわからん者に県出身の他人がやられると、自分がやられているという感じで、お互い助け合おうという気持ちが必然的に沸いてきた。

しかし、自分らだけでは手に負えないということになると（宝塚の沖縄県人密集地域の）「よんこうば」まで応援を頼みにいった。そこにも有力者が一杯いた。今でも長洲、守部、神崎支部などには県人がガッチリ固まっている。

私らは、戦後兵隊から帰ってきた時、沖縄人連盟が組織されていたが、朝鮮には、民主促進同盟と建国同盟というのがあり、お互いにらみ合いしている時期があった。終戦直後の12月頃からそういう時期があった。

#### 飲み屋業と闇タバコ製造

石鹼で失敗したので、ウイスキーに切り換えて、それから煙草にまた商売替えしていっ

た。煙草は、半分国の税金だから、それはぼろい商売だった。しかし、それも専売局に罰金を払わされてしまった。

それで家内が、女性を雇って飲み屋を営しはじめ、私はドブロクの仕事をしていた。東大島に土地があり、結婚前の妻がそこに住んでいたのので、その土地を私が買い取るとともに結婚して一緒になった。その頃、紙幣があまりにも出回り過ぎて、紙幣に証紙を貼って、その分だけを紙幣としての価値を持たそうとした。しかし、一人頭で1500円しか証紙を渡さないのので、後はいくら紙幣を持っていても反故紙になるということがわかったので、私は、あわてて物資の買い込みをした上に、その時に土地も購入したのである。封印される前にどんどん品物を買って込んで宮崎に置いていた。それで、一所帯割当の金を持った上に、品物をどんどん売って、証紙付きの金を入手していった。

私は紙幣をトランクに詰めて持っていたが、残りは反故紙になってしまった。紙幣が封印された後に家を3千円で購入した。表の方に空き地があったので、そこに家を建てて、ドブロク作りを開始して、飲み屋を始めた。そのきっかけは、渡真利さんという宮古の友人が掘って建て小屋で飲み屋をやったらエラク繁盛したので、お前もやれというもんだから、その商売を始めた。飲み屋は3人の女性を雇っていた。私は私なりのやり方で商売をしていった。すると、あまりにも繁盛するもんだから、商売敵の朝鮮人と喧嘩になった。

しかし、物資不足になったら、飲み屋よりも煙草が良いと考えて、煙草に切り換えた。最初は、煙草代を前金でくれたので、家の裏でそれをやるようになった。葉っぱもちゃんと仕入れる場所があった。煙草の巻き紙は、それを仕入れてくる専門家がおおり、切り屋もいたので本式に機械で煙草作りをやっていた。

闇タバコ作りをやっていた人たちがその後、専売局に追われて沖縄へ逃げた。

その葉っぱは、ダルマ葉（どす黒い、土色をしている）と米葉（光沢があり黄色く細長い）があり、米葉は色が良いもんだから、これをダルマ葉と米葉を調合したら立派なものができる。そしてエッセンスをいれる。バニラとかバナナなどの香料をふっかけて、アルコールなどで浸すと香料がついて、吸ったらとても良い味がする。手製のエッセンスが旨かった。それで5人程雇って製造したが、良く売れたものである。沖縄での煙草製造も、ここでノウハウを身につけた人たちが切断機もここから持っていき、沖縄で儲けたとみている。私も、ここで女の人を使用しながら、手巻きで煙草を沢山作って売ったもんだからよくその辺の事情がわかる。

### 終戦直後の闇市時代

梅田で芋粉を粉末にして、あんこにしてサッカーで練って、皮をメリケン粉で被せて、ふかし饅頭を作り、どれほど売って、儲かったかわからない。

これは、主人を無くした県人の未亡人らが考えついた生活の知恵だろうと思う。誰が教えるでもなく、自然に考えついていった。人間というのは、食うことにすごい執着心がある。宮古人で下地千代さんらがそれで儲けていた。

大阪駅に遊びに行っても、着物一着2500円でおばさんが売っていた。それを買って、阪神裏の闇市に持っていった。どんな衣類でも売れたので、それが3500円で売れたから、遊びに行ってもすぐに1000円儲けた。終戦直後というのは、そういう意味では、面白かった。当時、1千万円ほど手に入れた人はざらにいたが、泡銭だったので、まったく身につかなかった。沖縄県人は金を手に入れたら、すぐ

に女性がくっついてきて、パーになっていった。財産が3代も続かないというのは当たり前である。金というのは、自分が汗水流して得た金が本当のお金である。ほんまにそれが現実である。見聞きしているから、説得力がある。だから、実際、子供の時に苦労したものが成功している。なまじっか、田舎で財産を持っていたものは、今でも借家住まいである。

### 関西宮古会と帰郷意識

関西宮古会は、最初10名位の人数でスタートしていった。実際は、5～6年前（1974～5年）から本格的な活動は始まった。それまでは宮古平良市の出身者を中心に数名の者があつまっていた。今では、それぞれ出身地別の郷友会がある。

関西宮古会は、23年目で私が6代目会長となっている。会の規約などもちゃんとあり、記録は、書記がとっている。多良間郷友会は戦前から結成されており、結成して43年になる。それも5～6名のグループから始まった。5月13日（1980年）で結成43周年の祝いを行った。

私には、女1人、男4人の子供がおり、上は27歳、下は高校3年生である。一度宮古に帰郷したとたんに、宮古で住みたいという情がわいてきた。家内にも、子供は子供の人生があるから、私らは将来、宮古に帰ろうと、土地を探しに帰ったこともある。35年振りに帰省するまでは、そのように一度も思ったことがなかった。一度帰郷したときに、そのような気持ちわいてきた。としのせいか知らないが、故郷は生活できない場所だということで、捨ててきたつもりだった。しかし、妻とは現在の家は子供らに譲って、宮古で住もうかとちょいちょい話しようになった。それで、今年の家内も初めてだが、

宮古祭りをみにいこうと思っている。どんな感想を持つのか楽しみにしている。家内がどんな感想を持つことになるのか、チェックしてみようと思っている。友人2～3人は本格的に引き揚げようかと計画している。

今更ながら、郷里を持っているということに誇りを持つようになった。宮古があんなに発展するとは夢にも思わなかった。人間努力だと思った。それで、地元の宮古祭にうわべだけではなく、心からの参加ができるようになった。

#### 事例11.

山川キヨさん（大正5年生・本部町崎本部出身・1980年尼崎市戸の内で聴取）

#### 出稼ぎ動機

私のキョウダイは、男2人、女6人の8人で上から5番目だったので、生活が苦しく、金持ちの家で子守して小遣いを稼ぎながら崎本部尋常高等小学校を出た。卒業後、16歳の時に出稼ぎにでることになったが、紡績帰りの人のセルの着物を借りて上阪し、その後送り返した。だから文字通り裸一貫で故郷を出てきた。私は出稼ぎ前に親同士が決めた結婚相手がいたが、私はそのひとをどうしても好きになれなかったので、親に嫌だと言って御破算にさせた。両親は私が出稼ぎに行くのを直ぐ了承したので、旅支度は親がやってくれた。

姉、兄がすでに和歌山の本社紡績に来ていたので、友人二人で彼らを頼ってそこへいった。住まいは、紡績工場の寮だった。沖縄県人同士は、和歌山にきてても方言を使用していたので、寮内でも方言だった。だが、内地の人の言葉は、すぐ慣れていった。小さな箒で頭をはくほど綿屑で白くなるような作業だっ

たが、仕事内容は、しんどくなかったので、その紡績工場に3年間もいた。兄は、力仕事の荒い仕事をしていて、布を染めたりする仕事や、川から一杯幾らという実入りが大きい砂利取りをしていた。私の給料は、兄に渡していた。両親は、私が来て一年後に揃って大阪に引っ越してきた。両親は、兄と一緒に生活して、私は寮生活を送っていた。

#### 尼崎市戸の内生活

大阪へ来て間もなく、尼崎の戸の内に移ってきた。そこは堤防沿いにあり、それにくっついた形でバラック家を建てて、沖縄県人がだいぶ住んでいた。

私がこの「戸の内」にきたのは、昭和8（1933）年、17歳のときだった。19歳で結婚したが、沖縄の政治家山川泰邦さんの従兄弟が私の夫である。

主人は三国紡績で働いていた。私を見初めた夫が手紙で求婚してきたので、半年ほど手紙のやりとりをしたのち、家族の同意を得て結婚することになった。

私が尼崎市の「戸の内」にきた頃、神崎川の堤防の横に家が建ち、このあたりは田圃と無花果畑が広がっていた。内地の村の人が経営していた。この川は澄みきって魚が泳いでいるのも見えるほど綺麗な水だったので、白砂がたくさんあり、朝鮮の方が機械で砂を集めていた。

モスリン橋から堤防西側にかけては、最初民家は14、5軒しかなかった。

生活は、豚を密殺するひと、その豚肉を売ったりしている人、会社勤めなどさまざまだった。その後現在の新幹線の堤防から下の砂地で炭焼きをしているひとが20軒位、固まって住んでいた。

豚を密殺した場合は、骨をこの周辺に埋めたが、戦後この骨を買い集める人がいたので、

みんなこの骨を掘り出して売った。肉を腹に巻いて闇商売するひとも多かったが、私はその商売が好きでなかったのもまったくそれはやっていない。

近所でそれを売っていたので、それを買って食べることはしたが、しかし、それも警察から手入れされて、近所の人達全員警察に呼び出された。そして、いったいどれだけみんなが買ったかと問い詰めていき、私は200gと返答したら、それだけか、あんたは血色がよいぞ、それだけか、と怒られた。ねんねこ着て、肉を赤ちゃんみたいにして、帽子まで被せて、売りにいこうとして、モスリン橋の上で警察に捕まってしまう人もいた。刑事が橋の両端で見張っていた。

その頃、夫は、三津屋の澱粉会社に勤務していた。夫は、結婚当初は紡績会社で、その後澱粉会社に勤めていたが、他人は、密殺肉でとても儲けていた。それでみんな遊んで暮らせるようになっていたので、「人並みだから、あんたもやりなさい」と何度も夫にその闇商売を勧めた。すると、とうとう会社を辞めて自転車で肉の闇商売を始めた。会社勤めで真面目にやっても、みんな闇商売をしているものとして、刑事が夫を逮捕して手錠はめて連行したことがあった。兄弟二人とも密殺をしていないのに勘違いされて捕まったことがあった。私は「夫は密殺したこともないし、軍需工場に勤めているのですよ、弁当も詰めている所ですし、会社に遅れたら大変だから調べれば分かることだから、早く調べて釈放してください、弁当を持って警察の玄関で待っているから早く帰してください」と話したらその通りにすぐに帰してあった。その日、夫は胸糞悪いと仕事を休んだ。「こんな真面目な人に手錠を嵌めて、あんたがたは調べたらきっと後悔するよ、手錠を外してください」と頼んだら、兄貴だけ嵌めて連れて

いった。兄はちょっと出てくるのは遅かった。そういうこともあったので、みんながちょっとの時間であんなに稼いで楽しいているではないかと私から夫に勧めて、夫にその商売をさせた。その間、一回も捕まることなく何度か成功して儲かったが、その仕事をやめるのも早かった。

#### 廃船などによる炭焼き生活―火事のニュース探しが日課―

私の家族は、見よう見真似で「戸の内」で炭焼きをしていた。兄と姉らもそれをやり、両親らは年だったので、隠居の身だった。炭焼きの材木は、まず大阪市内の川をまわって、廃船にちかい船を購入したり、当時は、板材の空き箱など川に投げ捨てていたので流れているそれらを拾い集めて、それを材料にしていた。だから、大阪の川を掃除していた形にもなる。この川にも材木がよく流れてきた。当時、川はチリ捨場みたいで柱とか下駄とかいろいろ流れ込んできた。廃船を購入したらボートで引っ張ってきた。当時はダンベ―舟などがたくさんあったが、戦争で随分沈められた。ダンベ―というのは、底に丸太が5～6本わたして、それに床板を敷いた形だった。当時は、馬力も少なく輸送車も少ないから、舟で荷物を運んでいた。そのために舟がたくさんあった。戦争で廃船になったので、そのダンベ―を管理している河川管理者から、二束三文でそれを購入してきた。船でそれを引っ張ってきて、人を雇ってそれを解体させ、岸辺に材木を山積みにした。すると、薪を購入する人らがまたやってきたりした。それは鋳物工場の燃料になったので、近在の百姓から馬力（荷馬車）を5～6台借りて、その工場に搬入した。それは、夫の仕事だった。たまには米、野菜も百姓が持ってきてくれた。鋳物工場には、食油もあったので使って欲しい

と持たせてくれた。だから、配給制のなかでも他人よりは恵まれていた。

当時の炭焼きの方法は、鉄板をドラム缶状に丸くして、上下を開けて、その中に材木をいれて火をつけ、鉄板で閉めて焼けた頃にまた材木を入れるという形式だった。製品は、消し炭だった。何百という袋に炭を詰めて、それを市内の炭屋に運んでいた。私たちは、顔中真っ黒で目だけギョロギョロさせて袋につめる仕事をしていた。袋は、米袋などを張り替えて使っていた。

その後、炭焼きの方法をかえ、きちんとした炭焼き小屋をこしらえた。もう、消し炭ではなく、ごはんなどなんでも炊けるカラケシが作れた。材料は、廃船を購入してきて、それをばらしたり、火事で焼けた後の民家を買って、焼け残りの材木を購入してきた。毎朝、新聞で火事のニュースを調べて、競争でそこへ駆けつけていった。だから、いつもどこで火が発生したかを知ることが自分たちの生活に直結していた。結婚後もずっと炭焼き生活だった。そして炭入れの袋もだんだん大きくなった。

今でも、炭焼き仕事が身体に染みついで、古木をみるとすぐに炭にしたいと思う。男女とも上半身真っ黒にして炭を焼いていた。炭が売れなくなったのは、戦後ガスが普及してからである。戦後数十年はその仕事が続いた。しまいには、火事で家屋の半焼の場合、新築の材木に使用できるものもあったので、それをきれいにして売ったほうが儲けは多かった。安いので買い手はいくらでもついた。建築資材に使用できないものを炭に回したのである。私らが所有しているアパートも、製材所が火事になったのでまとめ買いして、新品同様の材木が大量に残っていたから、それで建てた。それは、15年前（1965年）の話である。豚も飼育していて、アパートを建てた頃

には、伊丹飛行場近くで炭を焼いていた。以前は、この神崎川は土の堤防だったので、大雨で堤防が崩れたら、10分では水浸しになった。何回そんな目にあったか分からない。沖縄県人で水害で亡くなったひともある。大きな船を購入して、船上生活をしていた座安という人が、ロープが切れて流され出したので、余所の子供をおんぶして川に飛び込んで死んだ。その妹も水害で亡くなるという悲惨な事故も起きている。

### 終戦直後の家族と養豚生活

昭和24（1949）年頃宝塚市高松町の「沖繩ムラ」で小豚増産が流行したところ、現在この「戸の内」にある私達の山川倉庫の方で豚を飼育していた。多いときには、200頭も飼育していたので、武田製菓の食堂からご飯だけでもドラム缶の2～3杯分も集めていた。また、病院や学校などを息子たちが1日10軒ほど回って残飯を集め、全部でドラム缶4～5杯分にもなった。養豚は最初、4～5頭から始めた。朝鮮人がドブコク作りをやっていたので、そこへ行って豚の飼料として米粕を購入した。それをエサとしてやると豚も酒飲んで酔った感じになった。それは栄養価がたかく、太るのが早かった。最初のうち朝鮮人は、酒粕をたどくれたが、そのうちに金を取るようになり、また、彼らもみな豚を飼育するようになったので、沖縄県人は余所で飼料集めをするようになった。

子供は、昭和13（1938）年長女、16年長男、19年次男、22年3男、23年4男、25年5男の5人が生まれた。しかし、昭和20年前後は物資がなくて大変だったうえに、乳飲み子を抱えており、乳の出を検査して配給を受けるとい有り様だった。だから子供は栄養失調でガリガリだった。役場の人が目の前で乳の出を検査したが、私は乳の出は悪いほうだった。



私の子供たちは、外で遊ばさないでどんだん家の手伝いをさせていたので、養豚も炭焼きも同時にやっていけた。

そのうち養豚場の周辺から苦情が増えたので、10数年前に有馬のほうへ立ち退きました。しかし、一年も経たないうちにそのムラからも追い出された。それで、500頭飼育の小屋を建てたが、豚の病気が流行って経営が思わしく行かなかったので、それをやめて現在の倉庫業を始めた。その経営は10年位になるが、養豚生活よりは楽であった。

## 事例12.

伊礼愛太郎（明治36年生・越来村字越来出身）  
カメ（明治36年生・1980年宝塚市高松町で聴取）

## 出稼前の生活

私の子供時代の家族は10人余の家族だった。祖父母と曾祖母がいて、その息子も一緒にアシャギ（家の離れ）に住んでいた。両親とキョウダイが男3人と女2人の5人で、私が長男だった。子供の頃、粟麦に線香みたいな髯芋（ヒジイモ）をまぜてボロボロジュウシー（雑炊）を食べさせられた。芋が大きくなるまで待つことができないほど切迫していた。芋の切れ端がちょっとだけでも入っていたら非常に喜んだものである。畑は痩せ地で、1200～1300坪位だった。明治43（1910）年から越来尋常高等小学校へ通った。叔父は学校校長していたが、両親、祖父母が相当苦労していたので、高等科1年で中退して、農業を続けてきた。

そして、大正12年12月12日に結婚したが、妻のカメとは隣近所の仲だった。

20歳すぎには、他人のキビ収穫を終えた荒れ地を耕す作業の請負仕事をしていた。それ

をやらないと飯が食べれないし、日給25銭とか30銭とかで端金だったが、請負の場合は猛烈に働いてその倍儲けるようにした。しかし、私が上阪した時の賃金は1日1円だった。1反歩位のサトウキビの根を1日で切り倒した。弁当といっても2～3個の芋に塩をまぶして食べ、ほとんど休む暇もなかった。そうしないと間に合わなかった。

夏は夜明け前の4時頃から畑へでかけ、夜8～9時まで命懸けで働いていた。ずっとそれで通さないと、一家の生計がたたなかった。各ウェーキ家（資産家）で人手の無い家を転々として、田んぼを耕した後は、田草取ったり、年中いくらかでも仕事はあった。毛遊び（野遊び）も日中は精根つきはてしていたので、楽しめなかった。夜中まで他人のように遊べなかった。ただ、若いもんだからサンシン（沖縄三味線）の音色につられて出て行くけど、すぐ眠くなった。

田畑が少なく、親戚で田畑を沢山持っているひとからちょっと手伝って欲しいと言われてたら、嫌とはいえない。それで義理で手伝いに行っても、1日の賃金を払って貰えるのではなく、ただ3食を提供して貰うだけだった。1カ月のうち自分の仕事は10日ほどで後の20日は余所でただ働きしていた。結婚していても、このような状態では、伊礼家は成り立たないということで、サター組（サトウキビの植付け収穫から黒糖製造まで共同労働で営む14～15戸単位の運命共同体的組織体）から借金して出稼ぎにでた。そこで、毎月積み立てた資金（グムチ）から30円借金してきた。組頭と書記との関係だったので、なんなく借金できた。期限は翌年の3月と決めてあった。ところが、周辺では組の金を借りて旅に逃げたと言われていたらしい。それで妻の母が、そんな金は直ぐに返すと返したようである。後に義母から、借金は返済してあるか

ら心配するな、いつでも儲けた時に返せばよいからという手紙を貰ったときは、涙がでた。

### 出稼ぎ生活の始まり

大阪には、私を幼少の頃子守したことのあつた人の夫が大阪市港区八幡屋町に住んでいたのので、そのひとに仕事探しを頼んであつた。そのひとから仕事を見つけたという葉書が届いたので大阪に向かつた。

玉造の製菓会社をあてにしていたが、私がそこへ行くまでには、他人が就職してしまつてあつた。それで、姉が、職業安定所を通して、大阪の和泉でうどん屋の出前の仕事を見つけてくれた。月給18円だったが、散髪賃やら風呂賃などを合せて20円くれた。日給60銭だつた。当時の沖縄よりは倍高かつた。言葉はしばらくの間は困つたが、まもなく慣れたので、不自由はしなかつた。しかし、出前先を探しきれずに時間がかかつて冷たくなつたりしたら売れないので、近所に散髪屋があり客がたむろしていたから、5人前を3人前の代金で売って、2人前分は自分が弁償することもあつた。大正14～15年、うどん3銭だつた頃のことである。

うどん屋には、3か月勤めた。2ヵ月目にはよく働くからということ、45円も出してくれた。それで、義母が立て替えた40円の借金を利子も付けて45円送って、返済した。

当時、男同士でも2～3人、4～5人グループで自炊しながら働きに出ている。1ヵ月6円で3食分賄えた。だから20円あれば3ヶ月は食べれた。なにせ、5銭あれば夕食と朝食の準備はできた。

私は大正14（1925）年4月15日に出稼ぎで出てきたが、妻は1年後の大正15年4月、大正13年生の長男が2歳の時、沖縄の姑に子供を預けて大阪にきた。（その長男が6歳の時、就学させる年齢だからと連れに戻つたら姑が

手放さなかつた。それで12歳の時に連れてきて、進学させようとしたが沖縄の学校では、それほど学力はつけられなかつたので旋盤学校に通い、その技術を身に付けて旋盤工になつた。その長男も終戦間近に徴兵検査を受けて満州に行き、それから沖縄守備軍に編入することになつたが、船便がなく宮崎で終戦を迎えた。育ての親とも言うべき祖母の事が気になつて戦後沖縄へ戻つたが、すでに亡くなつてあつた。）

しかし、妻は昭和2（1927）年に次男が誕生したので、働きにでることができず、小さな玄関が付いてあつた間借り先で駄菓子屋の1文菓子屋をやつた。

それは沖縄出身者も多い西淀川区大和田での体験だつた。借家は瓦屋根だつたが、平屋で瓦は滑り落ちたりもしたが、畳敷だつたので、沖縄から出てきた甲斐があつた。逆に、食事は米だけだつたので、芋が欲しくなり、それを買って食べたりもした。

〔妻カメ——文菓子屋は、思わしくなかつたので、借家をちょっと改造して、最初は酒屋をやつた。その後、女給2～3人を雇つてカフェーをはじめた。コーヒーやらお酒をだして営業をはじめたら、警察が誰の許可を得て営業しているかといわれたので、逆に、仕事するのになんで警察の許可が必要なのかと尋ねるほどの素人商売から始まつた。〕

女給は、全員沖縄女性で、使つてほしいと勝手にやつてきた。今では、みんな一人前の奥さんになつて金持ちになつている。女給は、お酒のカンをして、付だし程度しか出してないので客は長居をしなかつた。コーヒー、酒は1合で15銭だつた。〕

### 超人的仕事ぶり

私は東亜亜鉛工業に勤めてあつたが、月給30円を目標にしていたので、36時間ぶつ通して

昼夜勤をすることもあり、月5回しか家に帰らなかった。ずっと夜勤もしたうえで昼も勤めてきた。15年間よくも風邪ひとつ引かずに身体が持ったものだといまでも感心している。

私は、ずっと日記をつけていたのではっきりしていることだが、大正14年7月29日に入社して昭和14年7月28日、採用時に15年間真面目に働くとい人事部長に大見得切ったとおりに辞めた。それまで、朝7時から勤務して12時間働き、夜に欠勤者がいたら、晩の7時から朝の7時まで勤務して、直ちに、朝7時から晩7時まで勤務した。それが36時間ぶっ通しの場合もあった。身体はびくともしなかった。

仕事の内容は、トタンの波板を洗場で洗って、そこから引き上げて水タンクに浸し、さらに引き出してロールにかけて、メッキを溶かした釜の中に沈めた。そこから浮き上げて製品にし、波板などにしていく。当時は、タンクが2尺8寸の幅位、長さが2間、深さが約6尺あり、板によっては硫酸一斗ずつを4本入れたり、良く落ちる板だったら3本を水と混ぜて入れた。温度は35°から40°にあげてそれに鉄板を入れ、そして3名で3尺に6尺の鉄板をバールで隙間を作り、万遍なく硫酸水が行き渡るようにした。それに、メッキをしたら亜鉛板になる。

その仕事は楽ではなかった。硫酸水につけてメッキがちゃんと付着するようにむらなく一様に洗うのが、大変だった。いつも風呂場にいるような状態だったし、後に会社を辞めてもなにぶん15年間も勤務していたから硫酸が身体にしみ込んでいて、2～3年は汗かいたら白いシャツが茶色に変色するほどだった。メッキがきょうは1万枚分しかないという場合は、夜勤でも1～2時間仮眠が取れた。また、むらなく洗濯しやすい鉄板の場合も仮眠を取れたが、そうでない場合は昼夜立ちどお

しの場合もあった。小休止はとれても、食事でも交代して取る場合もあった。このような作業状態でも、疲れるということを知らなかった。小さいころから身体が鍛えられていたのでこの年になるまで、医者通いしたことがなかった。（最近交通事故にあってはじめて病院に通った。）

### 退職金で事業開始

普通500～600円で家が建った当時、退職金は2200円だったが、1日3円程度稼いでいた妻のほうが収入は多かった。

その退職金を元手に王冠工場を経営しはじめたが、まもなく、統制経済で鉄は割当制になり、大きな会社にしか行き渡らなくなった。それで会社は潰れてしまった。その退職金を機械購入に注いでいたので全部すっからかんになった。

〔妻カメーそれで夫は昭和16年6月にバスケットひとつ持って沖縄に逃げた。この人はひとの口車に乗せられて、その事業を始めた。王冠工場は、機械2台を入れて1200円かかった。建物は借家で王冠を抜く職人一人を雇った。私が原料の鉄は小さい会社には回ってこないと言って、反対すると分かっているのに、私に相談しないでそとでゴチャゴチャ話し込んで決めてしまった。なにしろ、毎月10円しか家に入れないで15年間貯金してあった金と退職金2200円のほとんどがスッテンテンになったので、夫婦喧嘩になった。私は喧嘩したら、子供をおっぼりだして映画をみにいった。私のカフェーの稼ぎはよかったが、全部子供の扶養にあてたのでどれだけ儲けたのかわからない。産めよ増やせの時代だったから、大正13年生の長男を筆頭に子供が11人もできた。しかし、未亡人とか戦死者の奥さんだけが、カフェーの仕事の権利を与えられ、私らは商売ができなくなった。それが、「よんこうば」

(宝塚市高松町)へ来るきっかけの一つとなった。ここは、青や赤のトタンブキでこんな所で過ごさんといけないかと思うと泣けてきたが、住めば都で慣れてしまった。闇肉は、飛ぶように売れたのであの時代にあっても、この闇商売ではすぐに金持ちになれた。]

私は王冠製作の事業を失敗したので、昭和16年に沖縄に帰郷した。そこでは、芋で生活できるので、養豚してなんとか生活の建て直しができると思った。

昭和7(1932)年に大和田にいるとき沖縄に瓦葺きチャーギ(イヌマキ材で資産家のシンボルだった)家を建築してあった。当時は、私と妻のカメが2760円もの大金を貯金してあったので、父親の借金は返したうえで家を建て、なお1000円残ったら、故郷に錦を飾るつもりだった。(この家は、一昨年《1978年》まで残っており、鉄筋コンクリート建てに建て替えた時に壊してしまった。)

しかし、沖縄では農業して豚を飼育していたが生活が成り立たなかった。当時私達には、6人の子供がいたので、3人の子供を沖縄の祖父母の元へ残してきた。

#### 四工場(よんこうば・宝塚市高松町)における戦中の養豚生活

昭和18(1943)年にまた関西に戻ってきた私は、仲程という友人が「よんこうば」で養豚していたので、その友人の誘いでまずそこで間借りをして、養豚経営や周辺の様子を窺っていた。そのとき、島袋キシンという人が沖縄に帰郷するので牛2頭も含めて、豚ごと買ってほしいという話を持ちかけた。それで豚40頭と一緒に家屋敷を1万円で購入した。トタンブキのバラック屋だったが、6畳、8畳、4畳半に風呂場付きというここでは一番大きい家で、風呂付き家はそこだけだった。川西航空の残飯の払い下げも契約していたので、

その権利も引き継いだ。それで1万円という大金がかかったのである。妻は反対だったがあっちこっちから借金して購入したので、また失敗したら子供たちを学校も辞めさせないといけないと思った。しばらく、妻は西淀川区大和田に住まわせて、私だけが「よんこうば」で養豚生活を送っていた。そして豚を密殺して闇肉を卸していた。豚の前足の脇腹から心臓を包丁でひとつきすると、声一つ立てずに即死するので、豚小屋内で密殺していた。

[妻カメー西淀川区大和田に住んでいた頃、私も子供をおんぶして「よんこうば」に通って闇肉を仕入れてきた。肉を闇で買って腹に巻いて、橋を渡ったところで、刑事に捕まったことがある。「何持っているんや」と聞くので、「肉持っています」と答えたら、「どこで買ったか言え」というので、「どこかで買ったではありません、家から持ってきました」と、答えた。夫がここで間借り生活している時だった。それで、間借り先に調べにきていた。私は、「うちはどこそこだから行ってみなはれ」、と言い残して大和田に向かった。子供は泣くし、おんぶしたり手をつないでいる子供を連れていたので、「早く行きなさい。売るんじゃないか」というので、「売るもんがありますか、子供らがたくさんいるから食べさせるんだ」と言い張った。夫の所に調べにきてても、実際は余所から買ったものだから、見つかるはずはなかった。それで没収されずにすんだ。しかし、その後刑事がよく調査にきたらしい。肉を包んであげたら黙って貰って帰ったらしい。あの時、肉はこの辺一帯でしか入手出来なかったので、馬力(荷馬車)を持って買いにきた。包んだ肉の上に堆肥を積んで、堆肥運搬に見せかけたりした。よく考えたものである。統制下の時代の胃袋だった。それで、「四工場(高松町)は、密殺部落」とも呼ばれていた。]

子豚10頭を知人が、名古屋で仕入れてきて私に買わないかというもんだから、一頭20円で購入した。当時は公定価格で17円だったので、それを3円オーバーしていた。公定価格以上で売ったということで知人が警察の取り調べを受けたとき、私の名前を出したので、なんと私は公定価格違反ということで、一ヶ月も豚箱に入れられる羽目になった。売った人は叩かれたが、私は叩かれていない。もっと売っているはずだと叩かれたらしい。それは私がこっちに来て間もない頃で、しかも、この部落での養豚組合長になっているときだった。

豚は、戦中も戦後もずっと飼育していた。空襲時代は、遠くて安全な場所だった中山寺の後方に掘って建て小屋を建てて避難していた。なにぶん高松町（四工場）は川西航空会社の間近に位置しているので、空襲を受けるだろうと、予想できた。それで1キロほど離れた地点に避難準備はしていた。また、武庫川の川向こうに山があったので、そこにも避難していた。防空壕に入っていて亡くなったひともある。各人は思い思いに避難していた。私は空襲時にも30～40頭の豚を飼育しており、避難しながらも餌をやっていた。高松には焼夷弾ひとつ落ちなかったが、避難先の川向こうで爆死者も出た。豚は空襲の時も助かって、なにひとつ被害はなかった。しかし、子供は小さかったので、いざというときに備えて覚悟は決めていたが、全員無傷で助かった。

### 事例13.

上原蒲助（大正5年生・摩文仁村〔現糸満市〕伊原出身）

上原幸子（大正7年生・今帰仁村上運天出身・1980年宝塚市美幸町で聴取）

### 出稼ぎ時期

〔妻幸子―私は、今帰仁村天底尋常高等小学校卒業3年後の昭和8（1933）年、姉を頼って大阪へ出稼ぎにきた。まず、堺の福島紡績工場へ勤め、昭和12年に一度帰省して、それから妹らを連れて大阪泉南郡の吉見紡績工場（後に東洋紡と合併した）に勤めた。妹らの友人4～5人も一緒だった。その紡績工場には女学校のような工場付設の学校もあり、沖縄県人が数百人も勤めていた。月給は三食付きで7円程度から始まった。毎月5円ずつ送金して、残りを貯めてチリ紙を買ったりするのが楽しみだった。毎月、寮の先生が給料日にはいくら送金するかと聞いて回っていた。貯金はいくら、送金はいくらという具合にしていた。毎月送金しながらも貯金していて、2～3カ年で100円もの大金を一度に送金したもんだから、田舎では大騒ぎになり、いい評判になった。条件はみな同じだったが、大抵の人は映画見たりして結構小遣いを使っていくが、私はコツコツと貯金していた。給料は、養成工の時だけ7円で、その後は12円とか昇給していき、吉見紡績の時には役も付いていたので、月給が40円余になっていた。女工は、見回りが一番上の役だが、リングという糸紡ぎで糸作りなどからスタートした。

その後、戦時下の中で紡績工場は閉鎖になり、軍需工場になった。それで東洋紡と合併することになり、本社に移動するひとと退職するひとに分かれていった。私は会社が閉鎖するまで残っていた。その後、伊丹の糧秣軍需工場へ勤務することになった。私は大東亜戦争が始まって間もない昭和17年に結婚した。〕

私は、摩文仁尋常高等小学校を出た当時、父母と姉2人、兄1人に弟2人がいた。私は上から4番目の次男で小学校卒業後、農業をしていたが、父の兄に、子供がいなかったのので、そこへ養子に行かされた。生家は千坪そ

こそこしか農地がなかったので、生活が苦しかった。

〔妻幸子—私の小学校の恩師には、浦添在住の親富祖英吉先生もいた。家族は、両親、姉1人、私、弟2人、妹2人と長男兄が内地にいた。7人きょうだいの上から3番目で、家は農業を営んでいた。家事手伝いが出来るようになったら、小さいうちから子守り、薪取りをさせられた。学校から帰ってきたらすぐ松葉集めなどの仕事が待っていた。〕

私の場合、山羊の草刈りが主で、馬なんかも飼育していたのでその飼料集めも大変だった。摩文仁村伊原は馬の生産地だった。島尻方面は馬の生産農家が多く、砂糖生産にも馬を利用していた。

〔妻幸子—当時今帰仁村上運天部落では、一軒に一頭の割りで牛を飼育していた。女子は薪拾いと決まっていた。それをしないと、芋を食べさせて貰えなかった。家の手伝いは当たり前だった。ザルなど子供でも個人用にちゃんと、作ってあった〕

雨が降ったら、学校では授業を中断して、家に手伝いのために帰宅させる程だった。芋の植えつけができるからと、全員帰宅させた。〔妻幸子—山原でも同じだった。子供の遊びというのは、学校の行き帰りに頭さわりとか手鞠したり、木の下で遊んだりしていた。〕

夕飯前の一時間ほどのひととき、遊ぶ時間をみつけていた。小学校を卒業したら青年会などに入会した。摩文仁では、毛遊び（野遊び）に、月夜の晩など多いときには50人ほど真壁村（現糸満市）あたりから寄ってくる場合もあった。そういう時、踊りのカチャーシー（乱舞）など輪を作って、三線（沖縄三味線）を3棹ほど持ち寄り、夜12時頃まで遊んでいた。フシドーという部落外れの場所が有名な毛遊び場所だった。

## サイパン移民の契機

昭和11（1936）年に徴兵検査を受け、翌年には「支那事変」が始まり、どんどん召集され、第一乙種の補充兵まで召集されてきた。すると、私は伯父の家の継承者として養子に入っていたので、戦死しないため戦争が止むまでは出稼ぎに行っておけといわれ、沖縄を出ることになり、昭和12年にサイパンに行った。

当時、サイパンでは、徴兵検査も、現地徴集もなかった。戦争が相当悪化してから、現地徴集するようになった。私は半年から1年ほどで、戦争が止むと思っていたが、周囲がうるさくいうので、止むなく出ていくことにしたのである。当時はまだ移民として、いくらでも出ていった。同級生だけでも、7～8人も出ていったが、しかし、不景気で儲けることはできなかった。沖縄にいた伯父が病気になったので、昭和14年に沖縄へ戻り、1年7ヵ月摩文仁で生活していた。昭和15年、従兄弟に荷物などを預けて、まだサイパンでの整理をやっていなかったもので、再度渡航することにした。そこにいくために上京したが、横浜市にいた兄が戦争が激化しているから行くのはよせととめるので、そのまま横浜で仕事を見つけることにした。

## 沖仲仕と半旅（季節労働者）

横浜では、兄や友人らがたくさんいたので、かれらの紹介で沖仲仕をした。サイパンでの日給は、1日1円50銭だったが、横浜では、1日に6～7円稼げることもできた。石炭仲仕だから、朝3時頃から起き出して、労働者相手の飯屋で8銭の食事をして、夜が明けた時分の5時頃から仕事に取りかかった。忙しい時は、問題ないが仕事が少ないときは、仕事の取り合いになるので、朝早くから押しかけていった。

仕事は、朝7時頃からとりかかったら、正午まで休みなしだった。また、15分の食事時間しかなかったので、大急ぎでかけこまなければならなかった。弁当は、会社から支給された。また、朝10時頃、忙しくない時はソバやら果物、饅頭類売りが港に来るので、各人が自由に腹ごしらえしていた。船は、沖付けしているので、ポンポン舟で食べ物売りが沖合までやってきた。

鉄砲といって、数人がワッと寄ってくるので、3つ食べても、2つしか食べていないと誤魔化したりする者もいた。舟では陸上の3倍位の値段で売っていた。腹を空かしているし、金は持っているのでアンパンなどが飛ぶように売れていた。

戦時景気になっていたもので、島尻のひと達は、「半旅」といって、今で言えば季節労務者のことであるが、キビの手入れを終えたら、出稼ぎに出て、12月になると戻ってきた。山形、新潟、四国方面からも良く来ていたが、沖縄県人もだいたいた。

今でも同じことだが、沖仲仕はやくざ系統のひとが仕切っていたので、季節労務者は彼らに使われていた。昔のやくざは親切だったようだ。17、8から20歳位の青年らが多数出稼ぎにきているので、彼らがやくざの世界に興味を持ったら、「ここはあんたらが来るところではない」と、帰しよったらしく今とは全く違う。

仕事振りは、朝出ると、オールナイトで一晩中仕事した後、さらにその翌日もやるので、3日分で20円余り手に入れて帰宅する時もあったが、そのかわり随分きつかった。伊原に住んでいる、上原コウエイという人と2人しかそのような仕事はできなかった。その人は、私よりも上に行く仕事量だった。

月に1回か2回しかそのようなことはしていない。1日の仕事で1週間は食えるので、

ずぼらの人は、そんなに働かなかった。だが、毎日仕事があるわけではなく、大雨や強い風があると、ウインチが揺れるので、仕事にならなかった。月25日も働けたらよかった。出稼ぎで稼いだ金は、送金する人もおれば、貯金している人もいた。私は、養子先の家が困っていなかったの、貯金しており、宝塚の高松に来るときは500円も貯めてあった。それを銀行で引き出した時、初めてみた100円札3枚に10円札20枚でその500円を受け取った。

### 「よんこうば＝四工場（高松町）」での生活風景

高松には姉が住んでいたし、そろそろ嫁さんを探さないといけないと思い、100円余の高給取りの仕事を辞めて昭和16年12月6日に宝塚市の高松へきた。

ここには、沖縄女性がたくさんいたので、嫁さんを貰ったら、また横浜に戻ろうと思っていたが、結婚してそのままここに住み着いた。最初は姉の納屋の3畳間をちょびちょび長くしていき、改造して、住んでいた。カネがあっても材料がないので、どうにもならなかった。鍋・釜もないもんだから、「寄せ屋」にいて古釜を20円で買って来た。それは最近まで残っていた。実兄が阿倍野で荒物屋の店員をしていたので、そこからシャモジやお櫃などを入手して、新居生活を営んでいった。

そこでは、すでに嫁いでいた姉が豚を沢山飼育していたので、残飯運びを手伝ったりした。当時「よんこうば」と呼ばれていた高松は、松林でその間に点々とバラック屋が並んでいた。カマジー（カマス）をあてがったりしたボロ屋で、アヒルを飼ったり、鶏を飼ったりしていた。姉は豚を20～30頭も飼っており、リヤカーに自転車の輪を付けて、尼崎方面の食堂を20軒ほども回って豚の餌になる残

飯を集めてきた。キャバレーとか会社の食堂を回っていた。高松付近も舗装道路になっていたが、両脇が松林だったので、昼でも薄暗いほどだった。朝8時頃高松をでると、昼の2時頃にしか戻れなかった。片道1時間余で行けたが、20軒まわるのは大変だった。残飯にはゴミも一緒にたにして捨ててあるので、それをより分けねばならなかった。

ここ「よんこうば」は、ハワイグワとも呼ばれていて、ハワイみたいに暮らしが良かった。(筆者注：沖縄からのハワイ移民は成功者が多かったので、ハワイというのはパラダイスの意味合いが込められていた)。

「よんこうば」では、昭和17(1942)年位からポチポチ豚などの密殺が始まり、闇商売をやりはじめ、18年位から盛んになった。密殺したら、酒飲んで、踊ったりして、いろいろな物もある気楽な生活だったので、勤め人よりは良かった。しかし、見知らぬ人が来たらすぐに刑事ではないかと戦々恐々ではあった。ここでは、会社勤めは1割もいなくて、土方が多かった。

住まいは、寄せ集めのバラック屋で、古いトタン屋根も集めていたので、暴風対策のために屋根に石を乗せていた。そのような建物は戦後も残っていた。台風の時、屋根が吹き飛ぶので大変だった。大雨の時、畳をおこして、鍋をおいて雨漏り対策をしていた。柱を埋めていたので、倒壊することはなかったし、高台なので浸水もなかった。居住地には雑草が生えて、鳥は放し飼いのうえ、道らしい道や下水もなく、垂れ流しだったので、糞尿があふれて、ベチャベチャして本当に汚かった。トイレは汲み取り式で、自分の畑に運んだ。また、豚の糞尿も肥溜に貯めていた。

#### 川西航空への徴用志願

戦時中、豚の密殺は罰金で済んだが、牛の

場合は一年以上の懲役を科せられた。ここらでも懲役を科せられた人はいるが、それはひとりふたりである。戦時中の食料については、街では困っていたが、ここでは不自由しなかった。農作物でも、肉と交換して入手できた。私は、肉を毎日食べている時期もあった。昭和18年から20年まで、特にみんなが物資不足で困っているとき、ここではあまり困った人がいなかった。だから、ハワイグワといわれた。会社では、月給30円位だったが、ここでは、密殺したらその分が1時間で稼げた。私は昭和19年7月に、川西航空の徴用工となった。サイパンが陥落する直前のことだった。徴用は、どこに行かされるか分からないから、川西航空は近所だったので、志願したのである。仕事は、午前8時から午後6時までだった。給料は、31円前後だった。

[妻幸子-私は、子供が昭和18年、20年生まれという赤子を二人抱えていたので、家にいた。とはいっても、あかちゃんをおんぶして、警察の目を逃れるために背中に肉を入れて、姉のいた大阪の今宮方面で闇商売していた。本当に遊んでいる人はいなかった。]

#### 四工場付近での戦争体験と沖縄玉砕の報

川西航空には、沖縄から徴用工が100名以上もやってきていた。私は弁当を持参して出掛けていたので、アスパラ混じりのご飯なんかを子供らに分けてあげた。昭和20年6月頃まで、空襲でそっくりやられるまで通っていた。それまでは高松には破片程度しか落ちていなかった。だが大空襲で大根を抜いた跡みために、爆弾の穴が空いていた。警戒空襲がたびたびかかっていたので、慣れてしまって逃げなかった沖縄の徴用工もいて、実際の空襲をうけたときに若い者がそれで死んでしまった例がある。空襲の情報は入ってきたので無数の敵機が押し寄せてきていることは分かっ



た。ある朝8時過ぎ会社の門に入ったとたんに、警報がかかったので、友人と今日は山へ避難しようと話して現在のゴルフ場になっている所へ避難した。その時のB29は千機も来襲したのではないかと思うくらい無数だった。避難所は、暗渠の下に板を敷いた程度で、20～30人しか入れなかったから、沢山の人が付近を右往左往していた。シューシュー、ドーンという音が絶え間なかった。敵機は西のほうから飛来してきて、真っ白のトンボみたいにししか見えなかった。爆弾と焼夷弾を落としたり見えなくなったが、その日の空襲は、3時間位だった。朝鮮の女性が怖がってワーワー泣いていたので、空襲警報が解除になっているのに、聞こえなかったほどである。工場には、もう戻らないで田んぼ道を1時間位かかって帰宅しようとしたら、その途中で泥まみれのひとが沢山いた。自宅まで、自転車を引っ張って疎開者でごった返しになっている中を通り抜けていくと、家は無事だった。5月2日生まれの二番目の子が乳飲み子だったので、大変だった。

沖縄からの徴用工の戦死者が40～50人はいったようで、死体を焼いていった。生き残った徴用工は、寮にいたが、会社は焼失して無くなったので、困っていた。ここに呼んできて部落で食事もあげたこともあったが、親戚の所へ預けられていった子もいる。一人は、川に飛び込んで自殺した子もいる。行く当てがなく、死んだのかもしれない。ドサクサだから身元を聞いていない。うちらにも2～3人よくきたので、そのたびにご飯をたべさせた。戦中は、寮から一步も出さなかった。空襲から終戦までは、会社に2回ほど行ったが、責任者も誰もいなかったの、こんな会社は辞めたかった。食べ物は、終戦まで心配することはなかった。

天皇のお言葉があるという日（昭和20年8

月15日）、私は伊丹市に防空壕作りのための材料を仕入れるためにでかけていたが、その重大放送を聞いて、「もうこんなもんいらんわ」といって、手ぶらで帰った記憶がある。しかし、後で材料は持ちかえた。金を出して防空壕掘りを依頼してあったが、それも勿論取り止めた。

敗戦は、寂しいものであった。会社で、その日に限って残業しているとき、沖縄が玉砕したと大本営が発表をしていた。すぐに帰宅したかったが、残業の申込みをしてあったので、2～3時間やってから帰宅した。だから、終戦になってもただ沖縄が玉砕したということが寂しかった。負けて悔しいという気持ちもなかった。

沖縄へ米軍が上陸したということを知った時、みんな諦めていた。この高松まで、米兵が押し寄せてくるということしか考えていないし、毎日空襲だったので、追われている気分だからヤケクソだった。とにかく、武庫川の橋もないし向こう岸は山だったので、子供連れで逃げるのが大変だった。川は、流れ放しにしているとえぐられていき、海みたいになっていくので、上流から仕切りを入れて堰堤をいくつも作っていくので、浅瀬になっていて、歩いて渡れる。川は、流れ放しにしていると、ここらあたりだったら舟も通せるようになる。そういう堰堤工事は昔からやっている。

〔妻幸子－防空壕は、家にも作ってあった。伊丹市に植木の山があったので、その中に避難小屋を作ったので、この川を渡るのがたいへんだった。東洋ベアリングもあり、空襲警報が鳴ったら命懸けでわたっていき、川に落ちたこともあった。夫が、会社に行っている時に空襲警報が鳴ったら、一人で赤子連れて避難させるのが大変だった。一度、飛行機が墜落したことがあり、みんなが喜んで

おったら、友軍機だった。

川には、流れ弾が3発落ちた。破片でだいぶ死んだのもう怖くてしかたなかった。沖縄県人も朝鮮人も亡くなったが、どこの誰かわからなかった。街から疎開にきた県人が亡くなった。]

川西航空空襲後家内と子供は、避難していた。米軍は、何月何日、どこそこを空襲すると事前にビラをばら蒔いており、その通りに実行されたので、東洋ベアリングの空襲事前ビラが蒔かれた時は、みんな避難した。私はそのビラをみたことはなかったが、情報としてみんなはしっかり持っていた。東洋ベアリングを空襲するまでもなく、終戦になった。この川西航空は部分品だけ扱い、武庫川下流方向の本社の方で組み立てをしており、トラックでそれを運んでいた。

#### 戦後の密殺生活

戦後は、食料が極端に不足してヌカパンとかメリケン粉だけだった。金は持っても価値がなくなり、銀行は封鎖された。新円切替えの前にこれまでのお札には証紙を張っていったので、隠して持っていたら、新円との切替えが出来なくなり捨ててしまった。隠し持っていた紙幣を襖に一杯張っている家庭もあり、街でもそのような光景を良く見かけた。私らもちょっと旧円が残っていた。物はないし、商売はできなかった。空襲後は豚の世話をすることもなくなった。

豚は産地から汽車やトラックで仕入れてくるが、それも警察の目をくぐってやるので、夜中など運び込んでいた。昭和19年あたりからここらでも豚の飼育をやめて、名古屋方面から仕入れてきたのを密殺していた。しかし警察への密告は、沖縄人同士でもやっていた。警察は、飲食させたりしたら、捕まえることはしなかったが、知人に密告されて逮捕され

たりしていた。私は、密殺仕事が上手だったので、他人に依頼されたら背に腹はかえられないのでそれを引き受けていたが、密殺中に刑事が入り込んできて逃げたことはある。捕まっていないのは、私と後一人だけで、各家庭みな逮捕者が出た。

岐阜から兄、従兄弟と私の3人で豚を仕入れたことがあるが、暗くなってから豚を一杯積んで、岐阜から晩の9時頃出たが、2人は汽車に乗り、私1人自動車で尼崎の玉出に着いたころには、木炭車だから10時間程もかかり、朝7時頃になっていた。今だったら3時間ほどの距離である。木炭車だから木炭を途中で積んだり、木を補給したり、何度も補給せんといかんからその間ヒヤヒヤした。そして、やっと家について豚を下ろし処分した。誰が密告したのか知らないが、呼び出しを受けて、兄貴らは豚箱入りした。もう処分していたので助かったが、危うく15~16頭も没収されるところだった。買い手は一杯いたので、トラックから下ろさない前から取り合いの状況だった。当時は油がないから、油の乗った太った豚は特に引手あまただった。売り買いは、みんなウチナンチュ同士だった。買い出しに出て豚箱入りしたり、密殺した後に豚箱入りした者もいる。

#### 戦後の混沌生活

戦後の昭和23~24年頃まで、特に生活が苦しかった。行き場を失った沖縄から元の徴用工を初め周辺の住民は川西航空の休閑地を、勝手に開拓したり、工場跡地に芋、ジャガイモ、米、豆などを作っていた。収穫できるようになったら、食べる物はなんとかつないでいけた。ご飯は1日1回位で、芋なども作った。しかし、それは後になって、「あんたがたは豚にも芋を食わしていたが、こっちは人間が食べれることが出来なくて、とてもうら

やましかった」といわれ、「言ってくれたら分けてあげられたのになんて言わなかったの」などと、話したもんである。沖縄への引揚者はその耕作の権利を他人に譲っていった。街の人は、芋の葉も食べたし、主食にカボチャ、米の代わりに砂糖を何日分と配給したり、こうりゃんを配給したりしていた。月に一回、魚の一切れ、3ヵ月に一度は、牛肉の一切れの配給もあった。

終戦直後、阪神裏に闇市が出来たので、芋がボチボチ収穫できるよになったら、それをふかして神戸の街角で売っていると、警察に追われたりしたこともある。それは、昭和21年頃だった。三の宮から電車に乗って出掛けた。それも一時的で、捕まったら元も子もなくなった。夫婦でいろいろな買いだしに出掛けたりしたが、誰かがやるとそれとばかりに、みんなやりだすという形であれこれやって、食いつないでいった。

昭和24年頃からボチボチ豚の買い出しを始めた。どこも豚不足だったので、繁殖させるのがはやりだした。私らも豚の繁殖をやった。子豚が生まれる頃には、練炭を前にして夜通し寝ずの番でみていた。豚の飼料には、宝塚歌劇場の食堂の残飯を仕入れてきた。朝鮮人のドブロック作りの酒粕は飼料に上等だった。尼崎の守部部落がドブロック作りの中心地だった。尼崎の「戸の内」同様にそこにも沖縄県人が沢山住んでいた。朝鮮人は、最初は、酒粕をただでくれていたが、その内に売ようになった。しまいには、自分らがそれを飼料に豚を飼育していった。当初は、戦勝国民ということで日本人や沖縄人を馬鹿にしていた。家族が1~2人でも幽霊人口で20~30人分の配給を貰っていた。それを売って金持ちになっていた。

繁殖用の養豚業は、しばらく続き、1頭が1万5千円まで値上がったが、一人が儲かる

とということがわかると、みなが真似していくので、たちまち下落して2~3千円になり、儲けがなくなった。しかも、豚の病気も流行り2年も続かなかったが、しまいには5~6百円まで下落して、飼料代にもならなかった。

それで、私は八百屋をはじめたが、養豚はその後、妻一人にまかせた。妻は飼料を集めて、正月もなしに豚を飼育していた。年始まわりの途中でもまた餌をやりに行くといった具合で、身体を悪くするほどだった。昭和40(1965)年まで養豚して、子供5人を高校までは進学させようと決意していたので、大学、高校、中学、小学校と全員が就学する時期もあり、毎日の生活が大変だった。

#### 事例14.

玉城仙一氏(明治38年生・今帰仁村今泊出身・1980年京都で聴取)

#### 出稼前の生活と精神史

私は今帰仁唯一の高等科を設置してある今帰仁尋常高等小学校へ、明治44(1911)年に入学し、そこの最後の卒業生である。家族は、事情があって母と子2人で生活していた。小学校時代、台風のために農作物がすっかりやられてしまい、干ばつには芋が取れず、蘇鉄地獄という言葉も生まれた。蘇鉄の実を腐らして食べるのだが、それで食中毒を起こしたりしていた。非常に困窮の時代で、その頃母は大豆を1升、2升と買ってきて、それを臼でひいて豆腐を作り、それを庭に出して、1丁、2丁と売りながら小銭を稼ぎ、それで生活している状態だった。だから私は、小学校2年頃から家の手伝いとして、母と一緒に燃料用の蘇鉄の枯れ枝を取りに行くなどしながら、小学校を出た。しかし、友人との付き合いは結構あったので、遊び仲間はたくさんい

て高等科時代の竹馬の友は今でも東京にいる。(仲宗根出身の大城伝盛というひとだが、二人で戦前・戦後の話しをするのが楽しみである。いま〔1980年現在〕75歳でもう5～6人しか同級生は生存していない。)

当時の娯楽といえば、学校の運動会、村の対抗運動会、角力見物などで、それをお互いに楽しみながら生活していた。

高等科卒業後は、進学を希望していたが、生活困窮のため無理だった。叔父に玉城幸五郎という後に村長になった人物がいた。そんなに勉強しなかったら、教員養成所の講習所で一年間勉強したら準教員の免状が取れるから、一年は面倒をみるからそこへ行くように勧めてくれた。だが、毎晩、ムラの先生の下で一生懸命勉強して準備してきたのに、いざ受験しようとしたとき、県は財政が窮迫していたようで、その制度が廃止になってしまった。しかたなく、ムラの給仕を3年間も従事することになった。そこで中学講義録を(小学校の分教場の水汲み番をやる小遣いをくれるので、そのカネで取っていた)、東京から取り寄せて勉強していた。ムラでは給仕のことをクペシといい、その上に書記・世話係がいてさらに区長がいた。

ムラの給仕は、同年生が一生懸命仕事している時、こっちは暇になり、祭りごとなどの時は、友達とは遊んでいて、私はバタバタと多忙をきわめるので、その矛盾が非常に抵抗を感じた。また、その3年の間にムラの各家庭の事情がよくわかるようになった。戸主のひととなりがよく分かった。私の人生の指針というのは、この3年間にこういうときは、こういう生き方をしないといけないなどと、教えてもらった。たくさんのこまごまとした善悪のモデルが実生活にあるので、その中から良いものを自分の生活に取り入れていくといった形をとった。18歳の時までにムラの何百と

いう家庭の長老のかたがたの生活態度、および常識の問題がこまごまと展開していたので、非常に勉強になった。

仕事の内容としては、晩、ムラヤー(現在の公民館に相当)に集まって酒を酌み交わしたりするので、晩の11時、12時になるとそれぞれの家庭にお年寄りを送ってあげた。ある人は、送ってもらったということが妻に知られたら怒られるので、角まできたらすぐ帰れとか、ある人は、奥さんを起こして、夕飯を食べていなかったら食べていきなさいとかいって、家に上げるひともいて、生活の縮図がみられた。家の財産を売って遊興にあけくれるひともおり、家を建て直そうと一生懸命の人もいた。親が病気のために娘を辻(那覇の遊廓)に売りにださないといけない家もあった。また、私が渴望していた中学へ、息子の進学のために親が八方手を尽くしているひともいた。家が貧しいために他家の牛の草刈りのために行かされている友達もいた。こうして、悲喜こもごもの人生の状況をみることで、今でも中学に進学しなくてもよかったと思っている。

母は娘時代の未婚の時に私を生んで、オバ(生母の従姉妹)に私を預けて、自分は別の男性のもとへ嫁いだ。今なら私は墮ろされていたはずである。幼少の頃、自分の家には父はいないのだと自覚しながら成長してきたが、小学5～6年生位になると、ムラのひとに道で出会うと、「あれがお前の父だ、あれがお前の本当の母だよ」教えてくれるが、最初は半信半疑だった。そして親戚などに問いつけていくと、そうだという確証が得られて、いわゆる父母というのは、他人の子の親となっているので、実にやる瀬ない思いをさせられ、生きる気持ちが削がれたものである。それで、耐えられない思いをして、父母を恨んだりしたものである。しかしそれは、3年

間の給仕生活で発奮していき、克服していった。とはいうものの、小学6年の頃、実父が酒呑んで道で酔いつぶれたりしているのを見かけると、恨んでいる気持ちを持ちながらも肩を貸して、父の家まで送っていったりしていた。情けないような幼年時代だったが、育ての親は貰い乳しながら一生懸命に育ててくれたので、その愛情はいまでも忘れられない。当初は生母や父を恨んだが、生母が恥を忍んで自分を生んだから今の自分の存在があるわけだから、人生を歩いていく中で、有り難いことだったとまでは思わなくても、恨みだけはしなくなった。そこはいわくいいがたい神秘的な気持ちだった。それで生母を慕う思慕の情が澎湃として湧いてきた。その気持ちは義父がいるので表すことはなかった。父に対する思慕の情というのは母に対するそれよりは薄かった。顔を合わせて話すこともあった。そういう不幸な状態をバネにして、世間に対して普通の少年とは違った見方をするようになった。

#### 出稼と職業遍歴

私が大阪に出てきたのは大正12（1923）年4月だった。その年の9月に関東大震災が発生した。私のムラからはその2～3年前からどんどん出稼ぎに出ていた。それで先輩友人を頼って大阪へきた。今帰仁村今泊からは、九州の大牟田炭鉱や沖仲士の仕事のためにでてきたようである。長女の主人の父で上間整精というひとが今泊から出た初めての出稼ぎ者である。その先輩らが九州へきて、それから大阪市西成区西天下茶屋あたりに、最初に間借りしたと言われている。大正区の恩加島で沖仲士をやったり、石炭担ぎをやっていたようで、大正8年から相次いでやってきたという。

当時の人々は2～3年の間に牛の一头が買

える金ができるとか、100坪の畑でも買える金が出来たらいいという気持ちで、みんな出稼ぎに出てきた。稼いだ金を持ちかえって郷里で農業をやる気構えだった。

日本本土は、言語・風俗・習慣がみんな沖縄と異なるわけだから、定住しようという気持ちは持っていなかった。言葉の問題では、例えば、工具をヤットコとかいい、アンジョウセイ（上手にやれ）などというのは通じなかった。また、生活環境は違い、例えば、チンバ下駄を、一方は布切れで、他方は縄で修繕して履いても沖縄では平気で、当たり前のように思っているが、ここへ来てそういう物を履いていたら、笑い者にされた。しかし、それも笑われるというのは、慣れないと気づかないものである。それで琉球人といって蔑視されることになった。当時は、私は工場の門に「職工募集、ただし琉球人はおことわり」という貼り紙を実際にみた。そういう中で先輩に頼んで、工場に入れてもらったりしていた。

私の出稼の直接の動機は、沖縄では猫の額ほどの土地で農業では食えないし、友人、先輩がどんどん出稼ぎに行くので、母は反対ではあったが止めはしなかった。生母や父にも出稼ぎに行くという挨拶はした。ちょっとずつ現金を蓄えていたので、自分で旅費は準備できた。

ムラを出たときの持ち物は、籐で出来た柳行李や柳行李の手提げ鞆を2つ持ち、それに手拭い、石鹸、歯ブラシ、歯磨きを入れ、紺の着物をつけ、履物は下駄履きだった。

大阪へ初めて来たとき、一軒家を先輩が借りていたら、そこへ14～15人が転がり込むのが普通の形だったので、私も三食付き月12～13円出して共同生活を送ることにした。

そこで先輩に頼んで、西成区玉出の製薬会社へ紹介された。しかし、ここでいろいろ仕

事の説明を受けたが、言葉がさっぱり分からなかった。言葉が通じないのなら、お前はそこの草抜きでもせい、と言われた。炎天下だったが、それを実行していたが、薬品臭いし性にも合わないと思った。学校で習った共通語をみんなは使用しないし、言葉が通じにくいから馬鹿にされてきたが、そのうち言葉も通じるようになり、仕事もポツポツ覚えていった（言葉を習得するには2カ年ほどかかった）。賃金は、日給80銭か1円位だった。それで冬の防寒用マントを買う準備のために、貯金もしていた。

そこを1年ほど勤めて、玉出でピンとかクシなどを作っているセルロイド会社にかわった。賃金は、日給1円20銭だった。しかし、セルロイドは一步間違うと爆発するので怖いし、技術（湯加減、火加減など）の習得がみんなより遅かったから、劣等感を持つのが嫌でそこも辞めることにした。従業員に沖縄の人が2～3人いた。そこも前からいた先輩に依頼して就職したが、2年間勤めただけだった。

次に、先輩達が沢山働いていた西成区津守の東洋耐火石工業株式会社に職場をかえた。そこは、従業員50人中20人ほどが沖縄県人で、しかも今帰仁、本部村（現在本部町）出身が多かった。そこで働いている間に、親同士で結婚話しがすすみ、大正15年に田舎から嫁を迎えたので、新居を構えた。

その石細工屋では、朝6時から晩6時まで働いて日給1円20銭だった。前の会社でも労働時間は同じだった。しばらくしてから、朝7時勤務にかわった。朝10時、午後3時には10分ずつの休憩があり、昼食時間は1時間あった。朝6時からの仕事はきつかった。現在は機械化されているが人力で石を切ったり、磨いたりするのが仕事の内容だった。

4年間そこで働いたが、会社が閉鎖してしま

い、大阪市港区市岡の大理石工業に入社した。その時には技術を身につけていたので、紹介なしに問題なく入社できた。

私は、この仕事を天職と思っていたので一生懸命打ち込み、社長がそれぞれの部署での仕事をいいつけていくと、全部こなしてきたので、信用を得るようになった。

4～5年の間に工場長に抜擢されたり、仕入れ部で全国の山を回って、石の仕入れの仕事を任されたりした。次は、工場の人事の仕事を任されていた。四国、九州、山陽から茨城方面まで原石の石切場をまわった。その頃には、日給2円30銭ほどになっていた。

昭和13年にはそこでの給料が、月給80円位になり、借家住まいだったが、後にその家を買取った。（その建物は現在も残っている。）

「支那事変」が始まり、軍需産業が盛んになってきたが、大理石は平和産業だったので、衰退して仕事がなくなっていた。それで、従業員は軍需工場にどんどん移っていった。しかし、私は身体が丈夫ではなかったので、一生この石屋をやろうと決心がついてそのまま私一人だけが残った。

その大理石工業には、従業員50～60名中沖縄県人が15～16名いて、その時私の兄弟も残っていたがその会社はとうとう潰れてしまった。それで、私は社長から残務整理してくれと言われた。その頃に、私は石屋としてはどこいってもみなさんと肩を並べてやっていけるという自信がついていた。社長には随分信用され、経理担当者と残務整理するように頼まれた。

残務整理期間の3年間に、残っている原石や機械を売却し、未収金分を回収していった。借金を返したうえに50万円の残金があると持っていったら、社長は随分喜んでいて。私は当時30歳位だった。京都に井上という電気会社があり、そこでは大理石で電気絶縁体の配電盤を作っていた。私の社長がその社長とは

京大で同期生だといひ、向日町で会社経営していたので、25万円は自分が貰ひ、後の25万円でその配電盤を納入する会社を作ってあげるから、娘婿と一緒に行って仕事してきなさいといひた。

それで昭和16年から玉城大理石という名称で4～5人の従業員を雇って会社の経営を始めた。軍需工場に卸す大小の絶縁体をどんどん作っていき、軌道に乗って月100円ほどの収入になった。私を中心にして工場を作ったのだが、娘婿がしだいに（社長は上田長之助）私を敬遠するようになった。それで、義理の弟の軒下を借りて、機械もないのに、腕に覚えがあるからクズ石を買ってきて工場を開始した。これまで、昭和2年、長女、昭和3年、長男、昭和5年、次男、昭和8年、次女、昭和11年、3女、昭和14年、4女と子供が6人も生まれて生活が苦しかったので、市岡時代の不況期に妻子を一時沖縄に帰省させていた。3年位別居したり、2年位別居したりといった形で生活していた。だから私が仕送りしながら、長男は今帰仁村の兼次小学校に就学したし、長女は名護の第三高等女学校にも就学させていた。昭和16年にはその子供たち全員を呼び寄せた。

## 村人会

今帰仁村今泊出身者が昭和初期までには、何百人も大阪界隈で出稼ぎ生活を送っていた。私が沖縄が出て来る直前、木津川の十三軒堀川で酒によって川を渡ろうとして溺死する事件が発生した。ところが、葬式をどのようにして出したらよいか誰もわからないで困ってしまったようだ。

その時、今泊出身で沖縄第一中学校を出た仲本吉三郎という人が近鉄沿線に住んでいることがわかった。その兄は東京で中学の教師をしていた旧家の出だった。私が少年の頃、

南洋から一時帰国して今泊で家建て、南洋の鷺鳥をたくさん飼育していた。そして馬2頭も買ってそれに乗って遊んでいた。吉三郎氏は南洋でも仕事をした後、大阪に来て鈴木商店という大会社の貿易部に勤めていて、その重役さんになっているという大成功者だった。私らの生活とはかけ離れている大先輩だったが、その人に教を請いにいき、それでやっと野辺送りができたという話をきいた。

大正10（1921）年にその人を頼って葬式をやったのがきっかけになり、それで、翌年、喜びの時、不幸の時にお互い助け合いをしようという目的で今泊共済会を結成した。その後同郷のひと同士で喜びにつけ悲しみにつけ寄り合っている。そして、異境の地ですべての生活の改善をしながら、今日まで続いている。

## 戦後生活

昭和20（1945）年の終戦と同時に私を頼って、親戚のかたがたが各地からやってきた。昭和16年から京都市上京区堀川丸太町吉村石材の納屋を借りて石細工を営んでいた経験をいかして、見通しはなんにもなかったがなんとかなるだろうと、工場を再開した。昭和22年から京都の壬生で、300坪の家と土地を借りて経営をはじめたのである。そこで従業員として、今泊出身者が20名ほどもいた。その時は金儲けではなく、いかにその日を暮らすかが問題であり、どうして生き延びていくかが、事業の出発だった。京阪神地方で事業を営んでいるウチナーンチュ（沖縄県人）はほとんど私と同じ経過を辿っている。

ところが、戦後アメリカから工業製品がどんどん入ってくるようになってから、その中に電気絶縁塗料が入ってきて、鉄にその塗料を塗れば絶縁体になるということで、私らの仕事がいっぺんに無くなってしまった。そこ

で技術があるので、昭和23年頃に建築関係にすぐに切り換えた。京都は空襲はなかったが、食糧事情が悪くなったから食生活は極端に逼迫したので、昭和25年位までとても苦しかった。買い出しは、持っている着物を売り払って、物々交換して「竹の子生活」を送っていた。預金しても第一封鎖、第二封鎖されて金があってもどうにもならなかった。限られた金しか使えない時代があった。戦後の日本の復興期を迎えて建築ブームになった時、50人ほどの従業員を抱える時期もあったが、今は20名ほどを雇っている。

昭和29年に現在地へ移転してきたが、いま所有地は2千坪だが、坪単価が50万~60万円もするという。ただ同様に購入してあるので、土地の急上昇は大変なものである。事業所は、昭和23年に法人組織にした。

#### 子供の教育と沖縄人意識

食料難の時代に相当苦労した。長男は今の京都大学農学部にあたる京都高等農林学校を出て私の後を継いでいる。長女は、京都女子大を出ている。次男は大阪外国語大学を出た後、同志社大学の経済学部をでて運輸省の羽田空港の管制官をしていた。それから本庁に戻って教官になり、現在は成田の空港公団にいつている。隣に住んでいる次女は京都女子大をでて主人も勤めている西山高校の先生をしていたが、退職した。3女は、天理大をでて資料館の学芸員をやっている。4女は奈良女子大を出た後、大阪医科大を出て四国の今治市で医者をしている。5女は同志社大の音楽科を出て、今泊出身で三菱信託銀行勤務の人と結婚して子供が2人いる。3男は、同志社大の工学部を出て西山高校で教師をしている。父の向学心は子供が全部受け継いで、子供8人全員が大学をでていく。

いま、やはりウチナンチュだから故郷に

帰りたい気持ちはある。そうかといって帰えられるわけではない。京都にも沖縄県人は居住しているがその数は少なく、交流はほとんどない。

玉城仙一氏長男の玉城恒治氏（昭和3年生）

#### 沖縄二世の沖縄意識

私は、昭和3（1928）年に生まれたが数回沖縄と関西を行ったり来たりした。まず、小学校への入学は沖縄、小学校2年は大阪だったし、3年の初めには沖縄へ来て、小学校卒業するまで父だけが大阪にいた。それは港区市岡の大理石時代だった。そして、父が京都で独立して会社経営するからという時に家族一緒に生活しようといわれてきたのが、昭和16（1941）年のことである。

私は農業が好きで、小学校を卒業した後ずっと沖縄で農業するつもりでいた。それで今でも沖縄に対する思いは強い。母は身体が弱かったので、田んぼや畑仕事を手伝ってきたので、小学校の頃、祖母としょっちゅう畑にでていた。そして、祖母が一坪を「ワタクシ田」にきなさいと与えてくれた。それはその土地に自分が何植えてもよく、収穫したものは自分のものになるという習慣があった。それで、豆など自分で植えたらそこから芽が出てくるのが不思議で、強烈な印象を受けた。そういうことから自分は農業をやるんだという意識が芽生えた。だから、京都に来てからも農林学校へ進学した。

都会に出てきて、農業をやるというのは間違っていたが、あくまでも沖縄へ戻って農業するつもりだった。

私は、今（昭和55年）50歳だが、昭和38（1963）年から三線（サンシン・沖縄三味線）を習いはじめた。沖縄の歴史に興味を持って



いたし、京都でも演奏会がある時は必ず行くようにしていた。そして、仲村源栄先生（生活記録編－1の事例3.参照）にお会いして習いはじめたので、生涯の恩人である。なにかしら自分の故郷は良いというイメージがサンシンを習っているうちに沖縄の良さが具体的に分かってきた。いまでも、事情が許せば、沖縄で農業したい気持ちはまだ持っている。

京都の古本屋で沖縄関係の本を漁っており、音楽をやることによって伊波普猷（沖縄学の父）先生の本の意味が分かってきた。また、沖縄の本を読むことによって音楽も深められて行くように思う。私の生涯でサンシンを習ったことが一番良いことだった。しかも、7～8年も仲村先生に出張講義して貰って有り難いと思っている。沖縄の歴史実情がその音楽習得活動を通して理解できる。

〔以下は、沖縄の古典音楽の師匠である仲村源栄氏とのその弟子である二世の玉城恒治氏、その父の玉城仙一氏の鼎談形式によって、沖縄の古典音楽という沖縄文化が、異境の地でどのように普及して、それが沖縄人意識形成にどのように機能しているかということを取り上げたものである。〕

**仲村**－沖縄の古典音楽や古典舞踊について沖縄県人はみんなが関心を持っている。

**恒治**－私の場合は、沖縄二世といっても肌で沖縄を知っていて、沖縄で小学校を出ているので、一世の父よりも沖縄への意識が非常に高い。サンシンを習っている内にさらに沖縄への関心度が深まっている。したがって、サンシンを教えている人の役割は非常に大きい。単なる技術を教えているだけの話ではない。

**仲村**－関西に古典音楽の師範は32～33名いて、教師が37名もいる。しかし、実際に指導している人は15名しかいない。そして、約100人

を指導している。確実な人数を言えないのは、今日習っていても、明日は辞めるひとがいるから。

**恒治**－二世の私でも10数名を教えるようになっていて。この付近でも沖縄の高校を卒業して集団就職している者がいて、私のもとで一緒に練習している。

**仲村**－他人を指導していくことによって、学ぶことにもなる。関西の沖縄県人の古典音楽の流派は、野村流ひとつだが、協会と保存会と守礼会の3つの組織がある。

**恒治**－サンシンが沖縄への郷愁を駆り立てる。月見、花見を会社でやる場合でも、サンシンが必ず出てくる。

**仲村**－私の教習所の仲村会は菊の花見をしながら復習会を持っている。宝塚の会員も京都へ来る。新年宴会は京都で実施して、忘年会は、宝塚でおこなう。仲村会のメンバーはみんなそれぞれが集まってくるので100人ほどになる。一生懸命練習していて、会員同士の交流も会費を集めてお膳を囲みながらやっている。

関西在住のウチナンチュの生活をこうして記録して貰えるのはありがたく、一般庶民の記録がない。それをやってくれるひとには敬意を表したい。

生まれ故郷の文化を残すということは、大事だと思っている。

**玉城**－サンシンを弾いているといつも故郷の風景が目の前に現れてくる。

**恒治**－だから、私も「現実には故郷に戻らなくても、いつでもサンシンを弾いて故郷に帰れる」と常々言っている。

田舎の山や海の風景がいつでも現れてくるので、故郷の友人達ともいつも話しているようなものである。晩9時過ぎからサンシンを弾きはじめると2時間位たつのはアッという間である。その時は、仕事のことすべて忘

れている。もっと時間があつたらよいなと思う。仕事にも良い面がはねかえってくる。

仲村—京都への古典音楽の出張授業は週2回、雨の日も雪の日も電車に通っていた。その頃は自宅が大阪市東淀川だったから、阪急電車の相川駅で下車してからも大分歩きよった。今考えるとよく通ったなと思う。京都へは阪急の西向日町駅で下車して歩いてきた。

恒治—雪の日、夜10時過ぎにオーバーに身を包んで帰られる姿は一生忘れられない。

仕事が忙しく、遅くなるともう先生が待っておられた。当時、13名の会員がいて、そのうち6名に減ったが、さらに2名が落伍した。いま、4名でやっている。1名は亡くなった。7名は関西本部沖縄協会から教師の免状を貰っている。

仲村—当時は関西で会員は80名しかいなかったが、いまや200名を突破している。

大正区の恩加島や堺市方面からも澎湃として会員が増えてきた。私の会長時代に160名だった。

玉城—師範のレベルまで達した会員は少ない。

仲村—二世は、沖縄の情緒が表せない。私は、16歳から21歳までエイサーの囃子をやってきた。

恒治—沖縄の芸能は演じるものと観衆との間に仕切りがなんにもない。そこが内地と違うところではないか。

玉城—古典音楽は、上流階級のものだし、一般庶民には楽しい民謡がある。

恒治—私らは、沖縄音楽をやっているのに、多少沖縄の心に触れているが、三世からは沖縄的雰囲気や溶け込むということはまったくない。ただ、両親の故郷が沖縄だという位なものである。本人たちがどういう気持ちを持っているか、話したことはない。3名の子供がいるが、上が大学を卒業し、2番目は短大を出て、下が大学1回生。妻は兵庫県出身であ

る。いまではすっかり、ウチナーグチ（沖縄語）を忘れてしまった。ウチナーグチで話したい。話しは聞けるので、田舎に帰って1年2年でも生活してもういっぺんウチナーグチを覚えたい。

二世の私は、郷友会の集まりに行っているが、三世にそういうことは全く無い。

#### 事例15.

宮里政蒲氏（明治34年生・北谷村〔現在は嘉手納町〕屋良出身）

宮里ハルさん（大正元年生・旧姓伊波姓・浦添市城間出身・1980年宝塚市美幸町で聴取）

#### 出稼前の生活

私の家族は、両親とキョウダイが男5人、女3人の10人家族で、私は上から2番目の長男だった。屋良尋常高等小学校に就学したが、小学校3～4年の時から学校には行かず、家計を助けるために小作人（方言ではカネー）として農業に従事してきた。金儲け仕事が全然なく、食事は芋ばかりで、それで弟達は学校の弁当もタオルの先に芋一個を括って持っていくような有り様だった。だからいつもひもじい思いをしていた。銀飯は、元日と正月2日位まで食べるだけだった。

大阪に出稼ぎで出てくるまではずっと農業をしており、出生地の字屋良近辺で農業の手が足りないウェーキ家（資産家）をあっち1日、こっち2日という風に日給35銭から50銭で日雇い（ヒーヨー）していた。朝食は家で食べたら、昼・晩食は出先が準備してくれた。朝8時頃から日暮れまで働いたら、泡盛一杯つける家もあった。ヒーヨーで稼いだ金は一銭も残らずに家に入れた。散髪代を貰うぐらいだった。作物は、サトウキビとイモが主体だった。

その頃の楽しみとしては、友人と飲んだりするということはなく、毛遊びとは別に2〜3か月に一度位男子のみ、ないしは男女で寄り合い、ソーメンやジュウシーヌチャーシ（雑炊持ち寄り）とかするのが唯一の楽しみだった。毛遊びは、時間があつたら一緒にでかけたりした。8歳か9歳頃からサンシン（三線・沖縄三味線）も習っていたし、7月エイサー（念仏踊り）もやっていたので旧暦7月15日から17日の晩までぶっ通して一軒一軒回って歌って踊ったりした。サーターヤ毛（製糖小屋のある丘）で1週間か10日前からみんな集まって、それを習ったものである。エイサーは青年団が主体でやり、とくに指導者はいなかった。男女併せて、15〜20人程度だった。厳しい親が女子を絶対に出さなかったから、女子は少なかった。その頃の楽しみというのはその程度だった。比謝橋付近で芝居が上演されても、めったに見物に行くことも出来なかった。

### 出稼ぎと「欠割」体験

大正11年頃、本土出稼ぎ帰りの義兄が当時の船賃10円10銭も出してくれたので大阪に出てきた。その時の恰好は、着物を着け、履物は地下足袋だった。出稼ぎ先の大阪大正区では義兄の紹介で三軒屋のキモト下宿屋で宿泊することにした。寝具類も全部準備されていた。仕事は港で材木、石炭荷揚げの担ぎ屋だった。新米も古参もみな同じ扱いで、仲仕は重労働だったから、日当が2円50銭から3円50銭だった。

請負師に雇われ、ひと船何人でいくらかという形で請け負っていた。私が雇われた請負グループは、34〜35名で、沖縄県人がそのうちに義兄と屋良さんと私にあと一人位で、4人しかいなくて、朝鮮人が多かった。そこでは新米にきつい仕事をさせて、途中で落伍する

ように仕向けて、落伍したら一銭も支給しないで、残ったベテラン連中が分け前を多く取れるようにしていた。ベテランが新米の担ぎ屋に50キロのセメントを上からわざとボンと投げ下ろすので、腰くだけになって立てなくなる時もあった。

落伍することを「欠割」といい、何度かそのような目に遇ってきた。その日は、儲けなしで帰るけど、下宿代15円はなんとか稼がねばならなかったの、元気を取戻したらまた出向いていった。この船には、どれだけの荷物が積まれているかが分かるから、その日で片づきそうになったらわざと人数減らしのために「欠割」を仕掛けてきた。

仕掛け人に対して怒ったら、逆に、仕事ができなかったら帰ってしまえと怒鳴られた。「欠割」は、月に数回しかなかった。

私の場合は、義兄が初めてだからあまりきつい仕事に回さないで欲しいと親方に頼んでくれた。それで慣れるまでは、ちょっと軽い仕事に回してくれた。請負仕事が見つかった。軽作業は、1円40〜50銭だった。

その後、キモト下宿屋から徳島県に出稼ぎに出たが、半年ほどで大阪に戻ってきた。徳島県の山奥でトンネル工事があり、沖縄県人が募集されてだいぶきていたが、それでも人夫が不足したので、私らも沖縄の斡旋人に連れられてそこへいったのである。飯場暮らしで、賃金は、1円あまりだったと思う。

比嘉下宿屋に移った時、そこからの紹介で土佐練炭会社に転職したが、豆炭工場では日給が1円30銭だった。向井月屋練炭会社に仕事をかえた時、同じ職場内で妻のハルと知り合って昭和7年に結婚した。

〔妻ハルー私は浦添村城間出身で、屋富祖の近くに住んでいた。7名家族で両親とキョウダイが男3名、女2名いて、一番上の長女だった。父は墓造りや漁に出たり、いろいろやっ

ていた。私は芋掘って炊いたり、子守したりしていた。農業しながら、私は20歳まで沖縄にいたが、近所の仲里さんが、大阪で一軒家を借りて、そこで下宿屋を開業していた。その人が一時帰省したときに一緒に行こうかと誘われた。沖縄では、いつも苦しい目にあったので、一度は内地に行ってみたいと思っていたから、すぐにその話に乗って昭和6(1931)年20歳の時に大阪へでた。最初は、仲里下宿屋で飯炊きをしていた。

しかし、大阪に来た当初は、ホームシックにかかって、道を歩いていて沖縄人らしいひとを見かけたら、あのひとはきっと沖縄人だろうから私に話しかけてきたらよいのと思っていた。

翌年結婚したが、親は反対して連れ戻すとなんども手紙をよこして、連れ戻しにきたがその時もう妊娠6か月だったので、あきらめてしまった。

母はいつも帰ってこい、帰ってこいと言いつつ続けたが親に会ったのは、昭和46(1971)年のことであり、実に30年振りだった。そういう意味で親孝行をしてない。]

結婚してからは、間借り生活を始めたが、当時の相場は、3畳一間で4円、3畳と4畳半で、8円だった。

その後、久保田鉄工に転職した。昭和9年最初の子供が生まれた年の9月21日に室戸台風が発生した。大正区三軒屋3丁目あたりの沖縄県人の間にも犠牲者がでた。5分間で大水が出るという鉄砲水だった。水が引いた後、何十人も溺死者を並べていた。電車道に大きな船が浮かんでいた。水が引くのも早く相当の人間が海に流されたはずだ。私らは久保田鉄工所の鉄筋コンクリートの屋上に逃げて助かった。

結婚後の生活は、食べるのには不自由はしなかったが、貯金は難しかった。県人との付

き合いをする余裕はまったくなかった。会社内での付き合いとか、隣近所の県人との付き合いの範囲だった。5円位の模合(頼母子講)を県人14~15名で行っていた。生活が苦しいからみんながみんなはやっていない。

生活が落ちついた頃大正区鶴町1丁目で一軒屋を月15円で借りて、下宿屋を始めた。敷金は2カ月分30円位だった。沖縄県人を5~6人下宿させて、妻がもっぱら賄いをやり、3食付きで一人18円とっていた。

生活がやっと楽になった頃、大きな借家が、昭和20(1945)年6月1日に米軍機の空襲で焼かれてしまった。

#### 疎開と「よんこうば」(四工場・高松)での生活

私達は、「大東亜戦争」がはじまって空襲が激しくなったので、友人らを頼って島根県や徳島県に疎開していた。長男が小学校3年生で現在同居している政徳が2歳の時だった。昭和20年12月10日に大阪に戻ってきた。知人の仲里ゼンコウさんらが宝塚市高松にいたので、そのひとをあてにして高松へきたが、その知人は1ヵ月後には大阪へ出ていった。大阪へ来ないかと誘われたが、高松は沖縄部落だから身なりもかまわないので、ここが住みやすいからここを離れないと断った。終戦直後は、川べりで、蓬を摘んできたり、百姓が収穫を終えたあとの落ちこぼれを拾ったりして飢えを凌いだ。

昭和21年頃、米が1升で90円の時に、日当20円だったので、弁当を持って仕事に出ても割りが合わない状況だった。それで、片引き車を買って、焚き物を集めて、ここから大阪まで売りに行ったものである。30束を3~4日かかって集めたのに、それだけでも1束15円で、450円にしかならなかった。大阪まで

片引きで薪を売りに行くとき、帰りは真っ暗だった。

闇肉売りも梅田の闇市（阪神デパート裏）でちょっとの間、やってみた。最初のうちは、巡査が目光らすことがなかった。巡査も一緒に肉を食べたものである。大阪駅前の梅田では、巡査がちょっとでも取り締まろうとしたら、みんながよってたかって袋叩きにしたものである。その後、警備が強化されていった。

〔妻ハル―疎開先の島根県から着の身着のまままで戻って来たので、仕事も食べるものもなく、困っていたら、仲里さんが豆腐作りでもしないかと忠告してくれた。豆腐作りは素人だったので、臼も鍋も借りてやりだした。豆腐を作れば、オカラ（豆腐の搾りかす）とクンスー（豆腐として固めてない段階）で家族の一食分はあるからというので、他人に習いながらやりだした豆腐造りが本職になっていった。疎開している間に蓄えも使ってしまって、豆腐造りを始めるまではとても苦労して、草の葉摘みにまでいった。〕

昭和21年8月から豆腐造りを始めたが、闇で豆も買っていた。米買い出しにいくひとにちょっとずつ買ってもらっていたので、豆が入手出来ない時は豆腐作りも中断した。豆腐1丁、沖縄式で35円だった。沖縄式に1軒1軒歩いてまわった。5升で20丁作れた。最初は、なにしろ、素人だったので、煙の匂いがするというで売れなかった。松山があったので、松葉を集めて燃料にしていたので、その煙でキブシカジャー（煙の匂い）がするといわれた。経験をつんだから1日20丁も売れるようになった。燃料が石炭、重油、ガスとどんどん変わっていった。美幸町での豆腐作りは、私らが最初だった。高松では、平安さんとか石嶺さんがたまに作っていた。

その原料仕入れのために、昼から大阪市生

野区鶴橋の闇市まで大豆を求めて行ったものである。ここらでは、川西の休閒地に大豆を植えて、それが収穫できたら豆腐を作っていた。私らは、農業をやっていなかったので購入しなければならなかった。当時の生活状態を示す家族の逸話がある。現在豆腐業を継いでいる政徳が昭和22年、4歳の時だった。代用食の麦をどうしても食べないで水道水を飲んで腹を満たすのでこれでは栄養失調で死なすと思って心配した。それで麦の中に米をガーゼで包んで真ん中に1合分いれて炊いて食べさせていた。この子だけの分として10日分1升の米を購入していた。米を増やそうと大根を混ぜたら、藁のご飯はいらんといって絶対に食べなかった。アメリカ進駐軍のコッペパンは食べた。隣のおじさんが進駐軍に勤めていたので、コッペパンをもってきたらそれだったら口にした。子供が病気の時に西宮まで田んぼ道を歩いていったことがある。〕

### 美幸町での豆腐作りと望郷意識

最初のうちは、現在の美幸会館（宝塚市美幸町）の所の借家に住んでいた。帰郷した沖縄県人から権利を買って入居した。豆腐造りは、大豆2升から5升分になり、次第に豆腐の量を増やしていった。軌道に乗ったので、現在の場所に借金して土地を購入して、暇を見つけては増築していった。材木は、次第に買い集めていき、だんだん店を広げていき、道路に面した表にできた。美幸町に移住してきたころは、高松町は全部トタンバラック屋で豚を飼育していたので、ハエが一杯飛んでいた。車も通れない狭い道で、ジープ位がたまに通る程度だった。現在の美幸町には、住宅も今のように密集していなかった。そこには川西航空の寮が立ち並んでいた。そこから野球して遊んだり、夏の夜などそこに寝ころがって夕涼みしていた。

隣接している未解放部落の蔵人とは、沖縄県人で付き合いのあるひとは14軒位しかなかった。

以前は、大豆1俵分の豆腐を作っていたが、スーパーダイエーとイズミヤに押されて、八百屋とか給食用に納める位で3斗位に激減している。個人が購入するのでは知れている。この美幸町付近でも大通りに沖縄県人経営の豆腐屋が3軒あり、宝南市場内にも1軒ある。

親戚・兄弟姉妹が沖縄にいるから、沖縄に引き揚げて余生を送りたいと思ったりもする。こうして、落ちついても年取るに連れて気も弱くなり、いろんなことを考えて、沖縄が恋しくなるときもある。しかし、二世にとっては、沖縄に家があるわけでないし子供たちがついてこないからどうしようもないと思う。

#### 事例16.

小渡良吉氏（大正3年生・美里村〔現沖縄市〕  
泡瀬出身・1980年尼崎市戸の内にて聴取）

#### 出稼ぎ動機と「戸の内」移住

沖縄では、泡瀬尋常高等小学校を卒業後、月給20円で製塩組合事務所の書記を勤めていた。私の家は、祖父母や曾祖父兄弟らも同居していたので、18人という大家族だったが、屋敷だけでも320坪で、泡瀬では4～5番目の金持ちだった。

昭和17（1942）年7月頃、28歳の時、ハワイ行きの叔父を見送るために、那覇港まで来たときに、そのままその船に乗って大阪まで来た。その年まで泡瀬の財産家の実家にいて遊びすぎたので、本土でも行こうかと思っていたから、そのまま大阪が良いだろうと思った。そこで、大阪市港区市岡の川口郵便局に叔父が勤務していたので、その紹介で川口郵便局の採用試験を受けた。すると合格したの

で、同年さっそくそこに就職した。

郵便局では、月給30円位だった。集配人だけでも300人から400人ほどいた。だが、川口郵便局でも、その時期、どんどん職場から戦場へ送りだされていった。

〔妻－昭和10年、沖縄から和歌山県の紡績工場へ平安座からも多数きていたので、友人に世話して貰い、和歌山城内で見合いをして、夫と結婚することになった。その時、寮には友人みんな一緒に入っていた。当時、寮費は3食付き10円ほどで紡績には7年ほど勤め、結婚は私が満24歳の昭和17年で、長男は昭和18年、次男が20年に誕生した。〕

門真市大和田の親戚の家に住んでいたが、泡瀬出身者の紹介で尼崎市の「戸の内」に引っ越ししてきた。トタン葺きの鶏小屋みたいな場所にみな住んでいた。そこから川口郵便局まで自転車で一時間ほどかけて通った。

#### 牧歌的「戸の内」生活

「戸の内」で最初に住み着いた場所は、神崎川の堤防の下だった。朝鮮人の家が一軒くらいしかなく、沖縄県人がほとんどで、バラック家を各人が建てていた。家の材料は、船を解体してきて、それを利用していった。当時は廃船や沈没船が何隻でも入手でき、それらの船の水を抜いて、解体したものである。船体からは丸太物から、良い材料が相当入手できた。現場で適当な長さに切って、肩引きリヤカーで引っ張って、堤防から近所の製材所へ運搬していき、建築用資材として利用していった。ここでは、いろいろな品物を間に合わせることができた。この一帯のウチナーンチュは、この河川敷で生活していた。洗濯も飲料水も川の水を使用していた。その後、井戸水を利用するようになった。

河川敷の生活は、大水害で大人や子供たちも流されて、死者が出てからみんな川上にあ

がってきた。ここでは、戦前からカラケシ焼きをしており、製炭組合も結成されていて、約30人ほどがその組合員だった。

郵便局は、給料が安いので、子供が出来たら生活困難だということで、友人が消し炭（薪の火を消して作った炭で火つきがよい）造りをしたらどうかということで、消し炭造りの友人の所で人夫仕事をしていた。職場に行かなかったら郵便局から呼び出しを受けた。当時、みんな召集されて職員数が少なく、なかなか辞めにくかったので、実家に手紙を書いて、沖縄へどうしても引き揚げなければならない事情が生じたということで、郵便局に手紙を送らすようにして、2カ年でそこを辞めた。子供2人ができたら生活できなかった。人夫仕事は、月40円位にはなったが、いま公務員の給料や年金などを考えたら後悔している。

戦時中この「戸の内」で牛、馬、豚などを沖縄県人が飼育していた。屠殺したら闇肉として販売していった。炭焼き仕事の下火になると、それらの密殺業者が沢山うまれてきた。田舎から生牛などを購入してきて、ここで密殺していた。私は、密殺はできないので、見張り役をして、肉を謝礼にもらった。密殺場所は、決まった場所で行われ、余所からもその現場を貸して欲しいと来るほどだった。毎日毎晩密殺は実行されていた。当時、ここは竹藪で家も立て混んでいなかった。密殺については、巡查と懇意の沖縄人の友人がいて、2人に酒食の接待をしていたので、安心だったが、闇肉を売りに行くときが問題だった。それで、捕まってしまう者もいた。

そこで自転車や女性がネンネコで赤ちゃんをおんぶしている恰好にしたり、妊婦を装ったりして闇肉を持ち出したものである。闇肉を買いに来る人もそのような恰好をした。そういう風に戦中の生活を築いていった。私は

炭焼きや密殺仕事が出来なくなる程戦争が迫ってきたとき、大工仕事をやるようになった。

私らが「戸の内」に来た当初は、この一帯は広っぱで、月見したり毛遊び（野遊び）もしていた。旧暦の7月エイサー（沖縄の念仏踊り）もサンシン（三線・沖縄三味線）や御馳走をを持ち寄って、酒・踊りなどで楽しく遊んでいた。その光景は、まるで清明祭（シーミー）みたいだった。あの当時は、「戸の内」の「浜西」は、隣組が7～8軒しかなく、エイサーはもそれだけでやっていた。隣組だけでも楽しく過ごしていた。牛屠殺から豚屠殺や炭焼きをするために、みんなゾロゾロいるので、常にだれかが酒を飲んだりしていた。昼だか夜だかわからない状態で堤防の上で遊んでいて、夜2時3時にしか、帰宅しなかった。こうして、財を成した沖縄県人の中には、「戸の内」周辺だけでも、新地で女郎屋を営んでいるひとが10名余もいた。しかし、今では当時の仲間は一人もいない。この1～2年でみんな亡くなってしまった。この「浜西」で当時の人は私らだけしか残っていない。

#### 都市周辺での炭焼き方法

「戸の内」の製炭組合は、統制経済下の農林省の許可を得たもので、炭を各支部に送るという形をとっていた。これはすべて農林省のハンコをもらっており、政府へ供出として10俵ほど出した後、各支部に下ろして行くのだが、実際は闇に流れていくのも多かった。消し炭を作るために自分自身で炭焼き小屋を建てた。適当な大きさに木材を切って、それを立てて、山積みして蒸すようにして焼く。赤レンガや鉄筋も買ってきて、ちょうど沖縄のお墓みたいに、出入口も作って、人間が立っても、頭がつかない程の高さで、それぞれの家毎に材料の仕入れができる程度に広さを決めていた。自分の家の事情に応じて作ってい

た。ここで炭焼き小屋が30か所はあった。

消し炭の材料は、廃船を買ってきて解体して乾燥させた物が主なものだった。

〔妻―私が結婚して、ここへ引っ越ししてきたとき、ここらのおじいさん、おばあさんらは裸足で、上半身裸で仕事をしており、真っ黒になっているので、びっくりした。みんな消し炭を水汲みみたいな恰好で担いで運んでおり、沖縄でもこんな光景をみたことがないのに、内地でこんな仕事が、なんであるんだろうと思った。〕

これまでの炭焼き小屋では、カラケシ(＝消し炭)みたいにパッパッと燃えてしまうのを、私が設計して作った炭焼き小屋で試験してみたら、良質の炭ができた。それで、各所から窯作りを依頼されて、その後に炭が販売されるようになった。それまでは、マッチでもパッとつくカラケシだった。

内地の人でカラケシを買いに来た人が、珍しいなと窯の内部まで覗き込んで沖縄の人は頭がいいなと感心していた。煙突もちゃんと作り、設計までして土も練って、ブロック建てみたいにこしらえてあった。

朝に火を付けたら24時間程度で炭が出来上がったが、空気が沢山入らないようにするなど、火加減が難しかった。生木だったら30時間位かかり、焼きすぎてもいけないし、点火した後、途中で穴を塞いでいく。これは、山原の人達が自分らの炭焼き体験をいかして行っており、中頭(沖縄本島中部地方)の人は私らだけであったが、私は泡瀬での製塩業を見てきたのでそれと同じ方法だったので、それをいかして炭焼き小屋を設計していった。すると私の設計が評判になり、ひっぱりだこになったのである。

### 「戸の内」での戦後生活模様

戦後も炭焼きはやったが、堤防とか河川敷

の整備が進むにつれて、炭焼きも次第に下火になった。また、コンロとか電気製品が普及するにつれて、炭の需要も伸びなくなっていった。

また、「戸の内」では昭和21～22年頃から、豚飼育が始まったが、私は大工仕事をずっとやっていた。その経験はなかったが、炊事場作りなどの経験から設計図面まで引いて、不思議がられながら、やっていった。

〔妻―私は多忙なときにはうどん屋などに手伝いに行っていたこともある。当時は、川におりたらシジミが一杯採れたので、それでだし汁をとるなどしていた。川が汚れ出したのは、戦後のことで、潮が引いたらシジミを採り、集めておいたら内地の人が買いにきた。魚は釣れるし、生活はしやすかった。〕

昭和26(1951)年の頃、堤防内の河川敷に住んでいる時台風で一度流されたことがある。現在地に家が立ち並びはじめたのは、昭和24年くらいから始まり最近になって密集地帯になった。この家を新築した15年前昭和40(1965)年頃には、まだまばらだった。10年前、1970年の新築を最後にして、その後は新築ができないほど密集している。

戦後、沖縄関係の大事件としては、メチルアルコール事件がある。戦後間もない頃、現在那覇で布団屋を経営している沖縄県人の結婚式の時に、招待客が闇焼酎を飲んでメチルアルコール中毒にかかり6人もの死者が出た。付近には病院もなく、悶え苦しんでいるのに、見殺し状態のなかで相次いで死んでいった。

酒売った人は、独り者のおばさんだった。マヤー(猫)ばかり潰して売り歩いていたので、マヤーおばさんとあだながついていた。22歳ほどの青年も死んだし、仲村源栄さん(「生活記録編1」事例3.)の弟も死んだ。私は酒が飲めなかったので、酒座に出なかつ



たので被害にあわなかった。

「戸の内」では、戦後家畜を屠殺して埋めてあった骨が良く出てきた。そこは今では、堤防となったり、川にもなっている。その骨は、トラックの15～16台ほども運び出したということだったが、大正区の恩加島の方がずっと多かった。

「戸の内」に恩加島からよく沖縄県人の物売りがきた。犬、猫、山羊、羊の肉を混ぜて、山羊肉と偽って売りにくる人もいたようである。私らは、嫌いだからということで買ったことはないが、山羊肉は高いのでそれを買った人が騙されたということで文句を言うものがいた。お産が遅くなった時に、それを煎じて飲ます習慣があった。犬や猫の尻尾や内蔵が一杯入っていて、臭かったらしい。そういうことまで、周辺の世話役をしていた私らの方へ文句を言いに来た。

### 「戸の内」での土地の入手経過

浜崎ヤスケという人がこの周辺の大地主で、沖縄県人は最初、その土地を借りていたが、戦後昭和24（1949）年、地主からその土地を購入して欲しいと言われた。購入者は、最初10人の委員で組合を結成して、その名義で浜崎さんから購入することになった。組合名は、「沖縄県人部落」という名称で10人の連名で土地を購入したが、私は代表の一人であった。

土地は、8200坪で買い手は100名以上いたが、その土地の分配は、居住年月が長い人を優先的に扱った。住宅地に適している部分を区画していき、50坪が最小単位で、150、200坪と段階を作った。家はまったく建ってなかった。区画は、昭和24年から1年かかった。登記料も含めて坪単価108円だったので、50坪では、5040円だった。ところが、いざ売却の時点では、私は身体を悪くしていたうえに、交渉人の数名も土地を買わないということで、

こっちは困ってしまい、全面積の土地を売却するには、1年もかかった。一括払いではなく、2回に分割させて支払いをさせて欲しいという交渉もした。金はないし、土地は欲しいというお年寄りも、鉄くず拾いして、それを売ってはまた支払いにきたり、また鉄くず集めをしてそれを売った金を持ってくるということの繰り返しをする人もいた。いまでは、そういう人も金持ちになっている。

しかし、当時は登記もしなければいけないし、土地代金の工面も必要だったし、最後の人は結局金の工面がつかずに辞退してしまった。私もその当時金がなかったので、自分の割当土地をそのままそっくり売却して、他人への土地斡旋にボランティアで奔走した挙げ句、自分自身は土地を所有することができなかった。

ところで、浜崎さんの土地の一部がさまざまな経緯で、「県人部落」に寄付して貰い、今ではその土地が、「園田会館」として県人の共有財産になっている。ボランティアで3年近くかかってその土地を売却して、園田会館を建てることができた。その間の事情を分かる人はいろいろ私に差し入れしてくれた。だから、会館建設の時に、園田支部会長が小渡良吉の名前を記念碑に記入してある。

その後、会館の土地を売却して、金を分配しようという話が出てきた。さらにそれから各個人の土地の売買の時に、実際と登記上の面積に食い違いがあるということで、その登記面積より少ない人たちが苦情を持ち込んできたので、何度も大変な思いをした。

### 帰郷意識

昭和18年生を頭に一番下が昭和32年生で子供5人を成人させたら、なんだか沖縄へ帰りたくなった。それまでは夢中で生活していたのでそのようなことは考えなかったが、最近

から沖縄に財産さえあれば、いつでも飛んで帰りたい。故郷の平安座島でも柱を建てる土地さえあれば、自分で家を建てて住みたい。毎週木曜日午後1時から1週間に1度年配者が会館で集まっているが、みなそんな話をしている。

#### 事例17.

下地玄信氏（明治27生・宮古島平良市出身・1980年大阪府豊中市で聴取）

#### 田舎者扱いをバネに奮起

体格の大きい私は、小学校時代に「今西郷」の異名をつけられ、勉強や運動に抜きんでいたので、宮古島の平良尋常小学校を卒業したら、学校の先生に進学を勧められた。それで、明治41（1908）年首里市（現那覇市）に設立されていた沖縄県立中学校（沖縄県立第一中学校・略称＝一中）に進学して、大正2（1913）年にそこを卒業した。宮古から首里の中学に入学したら、首里那覇の人達になにかにつけて、ナークンチュ（宮古人）と軽蔑していた。首里那覇は都人でその他はみんな田舎者と軽蔑していた。それで私は諦めが早いものだから、どうせ田舎者だからと、しかし、そのままではいかん、首里那覇の都会人になんとか見返す方法はないものかと宜野湾出身でやはり田舎者と苛められている佐喜真興英という後に東大に進学して、裁判官となりまた民俗学者として著名になった学友がいたので、彼と私は2人で彼らを見返すための密約を交わした。それは、まず学業成績で1、2番を争い、次に囲碁にも強くなり、3番目に学校では英語以外の言葉は使用しない、それに違反したら5厘の罰金を科すということにした。そうする以外に首里那覇の人達に勝つ方法はないと思った。それで2人で一生懸

命勉強して、卒業するまで1、2番を2人で争った。当時中学には当間重剛という後に琉球政府の主席（現在の県知事相当）になった人がいて、かれが首里那覇の大将だった。かれが後にこの田舎者になんとか勝とうとしたがどうしても2人に勝てなかったと笑って述懐していた。絶対に3番以下にならないようにしようと夜遅くまで随分勉強した。各科目の平均点が98点以上であとにも先にも2人の成績を抜く者はいないという評判になった。一中卒業後、優秀な同級生が大学専門学校へ進学していくなか、学費を出す余裕のない私の実家の実情を知った恩師が、上海にある東亜同文書院に進学することを勧めてくれた。県当局が学資の面倒をみてくれるので、成績さえ優秀であれば、進学可能だった。それで難なく大正2（1913）年に中国へ渡ることになった。そして、上海の東亜同文書院を大正5年に卒業した。

東亜同文書院は、官費だから各県の貧乏だが優秀な学生達が集まってきた。そしたら入学式のその日、同級生に「君は琉球人か」といわれた。自己紹介の時出身地を紹介するので、沖縄から来たと話たらすぐに琉球人という言葉がでてきたので、また、成績で負かしてやらんといかんと思った。それで「そうだよ琉球人だよ」と返事すると同時にまた成績で勝負しようと決心がついた。一中同様にまた一生懸命に勉強して、ずっと首席で通した。2番目が長野県出身、3番目が広島県出身で、どちらも勉強県だった。どうしても下地君には勝てなかったとその2人が述懐していたと、後にその家族の方からきいた。両方で田舎者扱いされ、それを克服しようと努力してきたので、その意味では軽蔑されたのがよかった。

東亜同文書院には、同郷人もいたが、一緒に遊ぶことはあっても、成績を張り合うという関係はなかった。また、学業成績をトップ

で維持した理由はもうひとつあった。

### 政友会の実力者森格との出会い

当時、中国人の孫文と日本人の渋沢栄一さんとで作った中日実業公司という会社があった。それは東京に本社があり、そこの専務をしている森格という人物がいて、その人に泣きついて弟子にしてもらった。森さんは、三井物産天津支店長として中国に派遣され、将来の三井物産を背負って立つと有望視されている人物だった。だが、その人は一企業の重役なんかはあまり気に食わんといって、三井を飛び出して、孫文さんと渋沢さんに見込まれて、その会社の総支配人をやっていた。(この森格さんは、後年犬養毅総裁の政友会という政党を発展させた実力者として有名になった。)

当時この学校は、国家危急の時東亜の経営の先駆者になるということをもットーとして、出来た学校だった。だから、われわれの同文の学生からは当時、中日実業会社の森格さんは、神様みたいに尊敬されていた人物で、直接その人に弟子にして欲しいと頼み込んでいった。その中日実業公司是、実業と政治を兼ね、要するに日中親善から東亜を考るという意味合いで作られていた。孫文が渋沢さんと一緒に中日は仲良くやらんといけないと中日実業公司を作り、そこへ人材を集めていくという狙いがあった。だから、そこは東亜同文書院の学生にとっては大変な憧れの職場であった。それで森さんには在学中に会いにいき、弟子にしてほしいと頼み込んだら、それではまず自分の命じることを実行したらその願いを聞こうということになった。そして、まず同文書院を首席で卒業することを命じた。成績が一番になった原因には、琉球人ということと森格さんに認められたいという二つの要因があった。

大正5年に、邦字新聞で、「琉球出身留学生同文書院を首席で卒業」、と大きく報じられた。それで森さんとの約束通り中日実業公司に入れてもらえた。当時、中国大陸には、中国経営に乗り出した大小の企業が東京から進出してひしめきあっていた。当然、東亜同文書院の卒業生の就職口は引く手あまただった。会社はいろいろ手を尽くして私を就職させようとしたが、私には一般会社の事務員というのは理想に程遠かった。

### 森格の紹介による就職一坑夫から出発

私はいろいろな就職口を断って大正5(1916)年、中日実業公司へ飛び込んでいき、そこから私は出発した。ところが、同文を首席で卒業して中国大陸で羽ばたこうとしていた私に対して、森さんは添書を持って東京へ行けと命じた。三井本社の牧田常務という重役宛の添書を持たされたら、なんと明日から三池炭鉱の石炭掘りにいけと言われ、そして明日から作業服に着替えて石炭掘りせよと言われた。三井の業務を5年ですっかり覚えてこいと言われて来たが、これには泣くに泣けない状態だったが、尊敬する森さんの命令だからいやとも言えず、1年間も炭鉱坑夫として働くことになった。三井には業務見習いということで、三井の組織からなにからなにまで全部覚えてこいと言われた。ところが、私はいい気になって行ったら、なんと直ぐに坑夫にさせられた。最初は泣けて泣けてしかたなかった。

同窓生からもなんでこんな馬鹿なことをしているんだとひやかされた。あれだけ優遇するという会社の誘いを全部断ってここへ飛び込んだもんだから、なんで炭鉱の坑夫なんかをやるんだと散々腐された。だが、尊敬するひとの勧めだから嫌とは言えなかった。沖繩の人も坑夫として働いていたかもしれないが、

私は坑夫として働く傍ら三井の組織を勉強せんといけないもんだからとても他人と付き合い時間はなかった。森さんが期待しているのが分かっていたから辛抱できた。しかし、両親をはじめ周囲からお前は馬鹿な野郎だと言われた。同窓生は、綺麗な背広を来ているのに坑夫姿だから呆れられていた。また、炭鉱の落盤事故にもあって危うく一命を落とすところだった。

その採炭仕事すすむと、その年に結婚したが、それは三池炭鉱で仕事をしていた同僚の妹との縁で結婚することになった。うちの妹を貰ってくれと言われて結婚したので、私の妻は、熊本県の出身のヤマトウんチュ（他府県出身）で「炭鉱土産」である。

新婚生活もつかのま、徴兵令状が舞い込み、大正6（1917）年、宮崎県の都城歩兵64連隊に一年志願入隊した。私はつらい炭鉱仕事に比べると、規律とかが気に入って、軍隊生活もいいもんだと礼賛していた。そして三井炭鉱に戻るや、今度は石炭運搬の船積み仕事に回された。

それから1年後には炭鉱の事務を執らされた。そういう経歴を経て、東京の三井本社にやっと呼び戻されて、正式の社員として事務を任されることになった。こうして、炭掘り1年、船積み1年、三池炭鉱の事務が1年、それから東京本社で正社員として2カ年事務を執らされた。朝早くから夜遅くまで一生懸命働いたが、それは会社のためではなく、自分のために働いたのだが、三井の重役に認められ、月給は他人の2倍もあがっていった。坑夫のときは、人並みで炭鉱夫の月給は20円位だったと思う。5年後には課長クラスと同じ50円ほどだった。大正10年当時、私の年齢では、そのような給料は高給取りだった。

三井では坑夫も出来、事務も出来るということがよく辛抱したと感心してくれた。そし

てお世話になりましたと、辞めようとしたら、重役が「下地さんあんたちょっと考えてみないか。君の勤務ぶりが非常に気に入った。必ず三井の重役になれると保証するから森のところに戻らないで三井に留まれ」といわれた。だいぶ褒められ、三井の重役にもなれると言われたので私も随分悩んだ。森さんの下に帰って苦勞することも無いと思う反面、いやここが大事な所だと思って、未練を断ち切って、中国上海の森さんの事務所に戻った。

### 百万円（現在の実勢レートで100億円に相当）の大事業を計画

ところで森格さんの所に戻った時期、沖縄のラサ島とかで燐鉱石が採れるということを知り、森さんに頼んで、三井に百万円出資させて、それを持って沖縄の燐鉱石を掘ってくるということになった。その大金を持って、八重山に行ったり宮古へ行ったりした。それは、大正10（1921）年のことで2か年ほどそれに費やした。尖閣列島にもいき土地の買収にかかったが、各地の目星をつけた箇所を何度もボーリングしたが、掘っても掘っても出てこなかった。まったく出ないわけではなく、ちょびつとは出るけど後は出なくなった。

それで、水産業を興そうと今帰仁村の運天港に大きな船を購入して一大漁場をつくろうとしたが、珊瑚礁に漁網が引っかかったり、台風で船もやられてしまい、大失敗に終わった。それでうまく行きませんでしたと森さんにお詫びした。しかたがないということだった。当時、百万円といえば巨額の大金だったが、惜しげもなく私に出してくれたし、太っ腹の大人物と思った。これは本当に郷里の人達もびっくりしていた。宮古の人で石原昌和君が燐鉱石の事業を通してだいぶ友人になった。彼にも大分カネを出したが、全部失敗したわけで、いま省みると、私のやってきたこ

とは普通の人がやることではなかった。

とにか、カネをこれだけ注いでも物にならないので、早く引き上げてこいと言われた。沖縄では、2年ほどいて妻も同行していたので、鉾山のことでも沖縄でも苦労している。巨額の大金を銀行に預けず、両親が住んでいた家を根拠地にして、押入れに隠して出し入れしていた。泥棒に入られたら大変だった。それで、下地さんが大金持ちになって戻ってきたという評判になっていた。会社名は三井と森さんの合弁という形で名称は付けてなかったので、記録としてはない。試掘は失敗したことになるが、沖縄にはそれだけの大金が落ちたわけだから、石原君など大変喜んでいて。

大金は、那覇にも落ちた訳だが、大半は宮古に落ちた。それほど、技師が来て出るという太鼓判を押したわけだから、私だけの責任ではなかった。私は事務を預かったわけだから、三井の技師の方が責任は重かった。

#### 関東大震災で方向変換

大正12（1923）年には、関東大震災を受けて、東京の私の住まいは駄目になるし、森さんのすべての仕事も駄目になった。身の振り方を森さんに相談したら「リヤカーを引いて日比谷公園でうどんでも売きなさい」と言われた。食べるためには、今夜から夜店でも開きなさいといわれた。泣かされることばかりだったが、それももっともだと思った。ところが、それは耐えられないことで、他の道はないかと相談したら、その時にその後の私の人生の方向を決定づけた公認会計士の仕事を森さんが教えてくれた。というのは、森さんは三井のニューヨーク支店長を長年やっていて公認会計士というのがあるのを知っていた。「君みたいな商売の下手な人には向いている高級な仕事だ」と言われた。それで、金儲けは私にはできないもんだからこれなら私

には持ってこいだとおもった。その話を聞いた後、東京にはもうおれないもんだから大阪に都落ちしてきた。すると、慶応大学の武内恒吉教授が定年退職して、会計士を自称して仕事をしているというので、すぐにそこへ行き、見習いで使ってくれと頼み込んで、オーケーを取り付けた。ところが、その会計事務所仕事をして1年後の大正13年、選挙運動に関わってしまい、選挙違反で捕まってしまうという失敗もして、その事務所もクビになってしまった。それで翌大正14年に同僚と会計事務所を開設しながら、大同生命保険外交員の仕事もやるという厳しい生活を送ることになった。

#### 会計士と大アジア協会の理事として

こうして大阪で会計士の仕事に従事してまもない、昭和6（1931）年に満州事変が勃発して、アジアの中で日本はどうすべきかということが大きな課題になってきた。

ところが、家にも掛け軸があるように陸軍大将松井岩根という人が、中日は同文、同志だから仲良くして、アジアを振興させるために中日がどうしても提携しないとイケないと、後の首相になった近衛文麿さんを始めこの松井大将が率先してアジア協会を結成したので、私もそれにすぐに飛び込んだ。すると、大阪支部長に命じられ、会計士のかたわら、大アジア協会の理事なんかをさせられた。それで近衛文麿元首相や松井大将とも知り合いになった。

大アジア協会の支部長というのは、松井岩根大将だったが、今の中日友好協会みたいなものと同じ思想で出発した。もともと日中は仲良くしようという運動だったが、軍部の圧力で歪められていった。

また、2・26事件の時は、近衛文麿元首相に頼まれ、説得のために私も行かされて、

止めるように話ししようとしたら、お前も国賊だと、抜刀されてもうちょっとで私もやられるところだった。その後、昭和15（1940）年に大政翼賛会が結成されるや大アジア協会は、それに発展的に解消させていき、近衛文麿元首相がその総裁となり、大アジア協会はその興亜部となり、松井大将が部長に就き、私は理事に専念して、戦時関係の仕事を仰せつかり、ちょっと有名になった。それで、徳川慶喜の孫にあたる17代将軍ともいべき徳川家正とも懇意になった。当時、女中さんがその人を殿様と崇めているほどだった。そういうことで当時の名士とも随分知り合いになった。そして各軍需工場の社長などが、「下地さん、大将クラスの人達を呼んで会社で講演させてくれないか」と依頼されたりした。そうすると、こちらでスケジュールを作って松井大将や海軍大将に来てもらったりして、各軍需工場でも時局講演をしてもらった。それで、戦後は公認会計士になったら、大会社の社長なんかは戦前の誼で随分仕事を持ってきてくれた。だから、私の会計事務所は、いまでも繁盛しているが、終戦直後から軍国時代に世話した会社の大幹部などが仕事を依頼するようになったからであり、会計士法ができたらずぐにこちらへ仕事を回してくれた。だから、何が幸いするのかさっぱりわからんものである。

私が昭和12年大阪中之島中央公会堂で時局演説したのは、もともと日中と仲良くやらんといかんという趣旨に基づくものだった。末次信正、下中弥三郎さんとも一緒に並んで演説した。

私には、特筆すべきエピソードがいくつかある。

その一つは、ドイツ政府から鉄十字章を貰ったことである。それは、明治6（1873）年にドイツの商船が宮古島で遭難した際、宮古島

住民が遭難者を救出して無事本国に帰国させたので、明治9年ドイツ皇帝ウィルヘルム一世がそれに感謝して記念の石碑を宮古島に贈ったことがあった。そこで私は、ドイツと日本の親善のために遭難60周年にあたる昭和11（1936）年11月に博愛記念祭を盛大に催すことを計画した。それで、ドイツ大使館、外務省、陸海軍の関係者らに働きかけ、さらに大阪在住の沖縄県人とも連絡をとって、綿密な下準備をしてドイツ政府から公式代表まで宮古島へ派遣して貰って、大成功をおさめた。おまけに記念碑に刻んだ「博愛」という文字を近衛文麿元首相の直筆を頂くこともできた。それで、私はドイツ政府から鉄十字章という勲章まで戴いたのである。昭和11年11月に日独防共協定が調印されるという時期でもあったので、タイミングはよかった。しかし、ドイツ大使館に打合せのために足しげく通ったので、憲兵に目をつけられて、「ドイツ大使館とあまり親しくしたら困ります。今は同盟国同志で良い関係であっても、あとあと日本とドイツが戦争することになるかもしれないので、日本の情報を流さないように」と言われたことがあり、びっくりしたことがある。

さらに、昭和17年9月、「満州国」建国10周年記念式典に、日本から200名ほどの高官が首都新京に国賓として招待された。

その時、私も松井石根大将らとともに満州国の皇帝に拝謁を賜って、さらに、ソ満国境視察のために戦闘機で大将らに同行した。また、その帰国の途中、近衛文麿元首相から預かってきた中華民国国民政府の汪兆銘主席宛の親書を手渡すという重責も兼ねていた。

その汪主席と二人で飲み明かして、主席自ら日本軍から主席にまつりあげられ、なにかと不自由で、おまけに日本の憲兵から監視されて籠の鳥同然であるとぼやかれたことがあるという秘話もある。

## 財界人との付き合い

私は昭和5（1930）年、関西財界人の社交クラブとして有名な有恒倶楽部に入会したが、何十万という沖縄県人が関西にいるのに一人もその会に入会していなかった。実業家が主な一流の社交場で、いま（1980年）1700人の会員がいる。私は50周年記念に表彰された。

私は沖縄県出身の会社の社長さんたちを入会させたが、周囲みんなが偉そうにしているので面白くないといってさっさと辞めてしまった。あんな連中と話しても面白くないというのが沖縄出身者の弁だった。それを我慢するのが、地位を向上させていくのと思った。いま（1980年当時）の大丸百貨店の社長から会計の仕事のある人の紹介で依頼されて、仕事をしたらいつも有恒倶楽部に食事を誘われたので、そこに沖縄の人が一人位はいるかと調べてみたら一人もいなかった。それで、森さんになんとか私をメンバーに推薦してくださいませんかと頼んだ。すると、森さんが洋服全部新調しなさい、そうしないと駄目ですよと言われた。恥ずかしくて推薦できないという意味だったんでしょ。それで友人を歩き回って、借金して洋服全部を新調して、森さんに「洋服全部新調しました」と報告すると、「ヨシ、それでは入れてやろう」とその倶楽部に入れて貰えた。

それは、中学時代に田舎者と軽蔑された経緯があるので、沖縄県人が何十万人といるのに社交クラブに入会できないのは恥だと思って、入会しようと決意した。その気持ちが湧いたもんだから借金してでも、と思った。だが、省みるともう50年もたってしまった。その倶楽部は当初5年ほどは、大阪市立大学の前身の同窓生の倶楽部だった。それで同窓生だけでは維持できないということでオープンになって間もない時で、私が入会したころは会員は300名ほどだった。

ところが、また野心を起こして、今度は大阪ロータリークラブに入会させてもらった。そっちの方が格が上だった。沖縄人としてはそれで相当の恰好をつけた。大阪ロータリーだけでも10個所余ある。例えば豊中ロータリーとか寝屋川ロータリークラブとかがあがるが、私が入会したのは、中央の方で、トップ中のトップが入会している。会員は300人ほどである。

いま、私は87歳（1980年現在）だが、有恒倶楽部には、いろいろな趣味の会など、20余りのサークルがあり、それに入っていまでも勉強している。

例えば、政治経済の研究会というのがあり、講師を招いて、週に1～2回講義を受けている。新聞記者を招いて話して貰うこともある。常に時世に乗り遅れないようにしている。しかし、囲碁・将棋だとかの趣味が大部分である。一国一城の主ばかりだから、勉強だけでもなかりと趣味も楽しんでいる。私は倶楽部の趣味の会で謡曲もやってきた。それは、昭和25年頃からやりだしてもう30年になる。

倶楽部の会費は、大したことはなく、月1万円だが、毎日そこで昼食はとっており、私からいわすれば財界の首脳部の連中が来るので、食事しながら勉強できるのが私の主たる目的で、毎日食事に行っている。銀行や会社の偉い人の誰かが来ているので、その連中と一緒に食事しながら、馬鹿話したりするのが楽しみでまた勉強にもなる。だからロータリーに行くか、倶楽部に行くかのどちらかで、そして暇があったら囲碁を打って帰る。ロータリーはロイヤルホテルに有り、300人ほどよって食事している。大阪のトップクラスが一同に集まってくるので、これはとても勉強になる。歌を歌ったり（これは必ずやる）、馬鹿話したり、講演聞いたりして、この前も無欠席の表彰を受けたところで、私は15年無欠席

で通っている。会費としては、月2万円だが、ただ、寄附集めがおおいがみな金持ちなので何十万単位で出している。

ロータリーは、奉仕の精神であり、私はロータリーの熱心なファンなもんだから、その精神を沖縄にいかして、沖縄の育英会にも2千万円、宮古の育英会にも2千万円寄付している。その他に下地玄信文庫というのも作って、首里高校、琉球大学に一校百万円あたりの本を寄付しており、下地文庫の贈呈式、奨学資金の贈呈式に何度か郷里には足を運んでいる。

こうして、13歳頃の少年時代に田舎者と首里那覇の人に苛められたのが、一生涯こびりついて、私の一生を支配しているが、反発して、争っても仕方がないので、成績で争おうと思ったもんだから、それが今日の私の原動力になってきた。ロータリーに入ったのも、クラブに入ったのも全部それが原動力だから、子供の時の出来事は（一生つきまとい）恐ろしいものである。いまでは、自分の一生を決定づけてくれたので、ありがたいと感謝している。あれがなかったら、反発心でこれまでやってこれなかったと思う。

### 大阪沖縄県人会との関係

私が住んでいた大阪でも沖縄県人とは接触がなかったし、県人はその日その日の金稼ぎに追われていたので、私の活動については分からなかったのではないだろうか。

当時の大物との付き合いだったので、そのことを話したら、県人を馬鹿にしているとか、威張っていると怒られるので、そのことは言わないようにしている。

大正時代に臨時で大阪沖縄県人会長をしたこともある。それで、いまでもその時のことが話題にのぼることもある。会員数が多いだけが脳ではない、「トップクラスの人間にならないと沖縄県人はいつまでも馬鹿にされる

よ」と言っている。「一流クラブのメンバーになれんような君らが一番悪いではないか、馬鹿にしたくなくても馬鹿にするよ」と、自分が苦勞して今の地位を築いてきたもんだから、偉そうに沖縄県人にいつも言っている。

各種選挙のときなんか沖縄県人は、数十万人もいるもんだから票になる、ということで政党からあてにされて、可愛がられる。だが、しかし、トップクラスが集まっているロータリーなんかには沖縄人はいないもんだから馬鹿にされることになる。だから、県人間ではいくら威張ってみても、財界のトップクラス間には県人はいないし、社交クラブにはメンバーとして入会してないわけだから、ヤマトウンチュは沖縄県人を馬鹿にしていると怒る沖縄県人の方も悪い。

本土で沖縄県人の実業家が、ある段階以上は伸びないというその原因は、沖縄人は物の考え方が小さい、つまり小成に安んじるという面がある。それがいけない。どうしてもっと日本全体として、日本人としての立場で物事を考えないのか。沖縄県人は、ちょっと小成したら、金持ちになった、成功したということで、甘んじる。逆にそれは、悪くいうと大きな失敗もなくドングリの背比べしているのが沖縄人である。しかし良く言うとそれで大過なく過ごしているわけだが、物の考えかたが沖縄人はあまりにも小さい。これは島国だから仕方がない面があるのかもしれない。

沖縄人とだけ交際しては、大きな物がみえない。物を大きくみるというのが私の第一の目標だったから他府県人との付き合いをしないといけないと思った。私は日本のトップ連中がなにを考えているのか、知ろうとした。

いま、なんで苦勞して、あんなトップの連中と付き合わないといけないかと考えるのが、沖縄県人であると私はみている。それを覚醒



しないと大きくはならないと私は一部の人には言っているが、大部分のひとは、そういう苦勞をするのは馬鹿らしいと考えている面がある。これからは、他府県人と同等にやっていくうえで大きく目を見開かないといけない。

ところが、実際には口では簡単にいうが、相当苦勞はする。

### 公認会計士と転がり込んできた財産

昭和24（1949）年に公認会計士法ができたので、すぐに公認会計士になった。そして翌年日本公認会計士協会を発足させると同時に私はその副会長に選出され、近畿支部の支部長を15年もの長きにわたって兼ねてきた。また、昭和26（1951）年から5年間も公認会計士の試験委員をやってきたが、その間、昭和27年には戦後初の国際会計士会議がロンドンで開催されたとき、日本代表として出席して英語力を発揮してきた。

社交クラブでいろいろな人と交わっているうちに、朝日新聞で相続税問題が起きて、社長から依頼され、それが幸いにもうまく解決できた。すると、普通の報酬のほかに千何百坪の土地と一軒の新築家、新型の高級車まで購入して贈呈してくれた。非常に喜んで、規定の報酬だけでは気持ちが済まないということで、家屋敷を寄付してくれた。それは、朝日新聞の名声が高いものだから、税務署が村山社主が亡くなったとき、相続の時にべらぼうに高い相続税をふっかけてきた。そんな金額は払えないので、下地さん、税務署の課税が適正かどうかみてくれとってきた。私が調べたら、適正でないという判断ができた。そこで、税務署はそんなに詳しく調べられたらお手上げですわと冗談をいうほどだった。それで、こっちの言うとおりになり、何億円という金額が助かった。村山家としては、税務署のいうとおりでたら破産すると思って

いたので、助けてくれたということで感謝された。それが、昭和45（1970）年の大阪国際万国博覧会で絶好の場所ということになったので、非常に高値で買い取りたいという会社 came。そこへ売却して、その一部で150坪の現在地へ引っ越してきた。こじんまりとした家屋敷がいいだろうとここに定住することになった。いま、現在は家内と女中との生活で、息子もこの近くに住んでいる。

子供は三人で長男が会計士の仕事をしていて、娘二人は東京に嫁に行っている。私の生涯は、財産作りまで、波瀾万丈で、普通の常識では、考えられないほどの、努力をしてきた結果の賜物と思っている。

### 事例18.

友利仁三郎氏（明治34年生・粟国島出身・1980年大阪府枚方市で聴取）

### 師範学校を中退

私は、粟国村（離島）の浜部落で出生した。粟国島での家族構成は、父が鹿児島島の奄美大島へ出稼ぎに出ていて、兄も那覇で仕事していたので、妹と母の三人で生活していた。

兄は、那覇から沖縄の泡盛を仕入れてきて、母がそれを販売していた。畑は3千4～5百坪あり、芋で生活していたようなものである。

私の小学校時代までは、粟国島では尋常小学校止まりで、高等科は設置されていなかった。諸見里校長が学校を卒業したら、役場に勤めるように勧めてくれた。粟国村は当時、島尻郡の管轄下におかれていて、その郡役所に木原という書記がいた。その人が私と接していて、時の村長の上原さんに私を進学させるように計らってくれた。それで、大正4（1915）年粟国村から5円の育英資金として補助金をだしてもらい、沖縄師範学校の首里

付属小学校高等科1年に進学することになった。村費による奨学金は初めてだった。村の人材育成という意味だったので大きな荷を負わされた案配だった。給仕としては、なんでも如才なくこなしていた。小学校時代記憶力がよく、神童とうたわれ、大抵のものは1回のみで覚え、書いたら、もう忘れることがなかった。

師範学校は高等科2年をおえてからしか受験資格がなかったが、1年終了後に年齢などや学年を操作して、受験させてもらうことになった。当時は、2年終了後に浪人して受験するものもいるほど難関だったので、合格する見通しは持っていなかったが、腕試しのつもりで受験したら見事に合格した。すると、予科は高等2年の復習からはじまったので、私はその学習内容を知らなかったから、大変なことになったと思った。クラス定員は42名だったので、成績は38、9番だった。予科をおえたら、本科1部、2部というのが設置されていた。本科に進級したら、みな同じ学科からスタートするので、そこでは成績が平均で2〜3番になった。後に英文学で大学教授になった平良文太郎さんらも同級生だった。安里源秀沖繩国際大学学長（故人）も学校時代に知っている人である。

しかし、私が本科4年の時、大きなストライキがあり、師範学校を中退してしまった。大正デモクラシーの流れのなかで沖繩師範に野球部ができたが、寄宿舎の舎監もしていた地歴の笹マサシという先生が野球部を廃止せよと主張した。それで、その先生をやめさせよと、3年生を中心にストライキをやったが、首里警察署に7人が逮捕され、放校処分された。それに私も参画したのである。

私は学校ではエスペラント研究会に入っていたので、ストライキに参加した時、鈴木検事が、思想的背景はどんなものかと調べたり

した。その調査されるような男が、後にもっとも右翼になり、特別高等警察つまり特高になったのである。

### 初の上京と徴兵検査

沖繩師範本科4年の時にストライキに参加して、具合悪くなったので東京へボンと飛び出した。

那覇に疋田という京都の砂糖商がいて、兄や父を良く知っていたようで、その人が私に東京に出たら良いと勧めてくれた。それで、大正9（1920）年に上京して、日本大学に入学したので、疋田さんの弟の所へ行き、そこから通学した。また、学資も疋田さんが出てくれた。ところが、大正10年に徴兵検査を受けることになったのである。その時近衛三連隊に行くように指示された。疋田さんのもとから兵隊にも行ったが、その時240円という大金を餞別にくれた。現在東京タワーのある赤坂に入隊したのは、大正10年12月10日だった。

エスペラント語を研究してきたから軍国主義は嫌いだったし、それに沖繩師範の軍隊教育で三八式銃を持って走り回った経験もあったので、入隊するのは嫌だった。それで醤油を飲んで徴兵忌避しようとした。徴兵検査の日に醤油飲んで、心臓をドキドキさせたが、軍医は良く心得ていて、君の身体は大丈夫だといった。というのは、師範学校時代に柔道、空手をやっていた身体は鍛えていた。ところが、醤油を2合飲んだら目がくらくらして、心臓は締めつけられる思いをした。どれくらい飲んだら良いというのも聴いてなかったが、それを飲んだらよいということは風評として知っていた。だから、近衛兵でなかったらどこかに逃げていたかもしれない。近衛兵だったら、天皇陛下のお屋敷があるし、二重橋にも立てるし、普通の人には行けないというので

あれば行ってもよいなと思い、躊躇しながら入隊した。

入隊後、富士登山の訓練のとき、8号目あたりで転落して銃を離さずに人事不省に陥った。入院するとき、1等症で入院した。1等症というのは、軍隊での負傷ということで、持病が悪化した場合の入院は、2等症である。約10か月入院した。その時に精密検査を受け、1等症で除隊するのは駄目だということで、1週間原隊復帰して、それからまた再入院したら、1ヵ月もたないうちに現役免除の通知が届いた。それで大正12(1923)年7月22日に除隊になった。軍隊手帳は今でも持っている。それから沖縄に8月に帰省したが、1ヵ月静養して、それからまた東京へ戻って籍の無くなった日大を再受験しようかと思っ、て、上京したら関東大震災にあってしまった。震災後、米が1升で1円もした。震災で行き場を失って、宿泊所を求めて、古巣の近衛三連隊の兵舎に行った。私はその一中隊だった。そこに曹長やら軍曹やらがいて、「まあ、居れ」といわれ、そこでしばらく寝泊まりしていた。

関東大震災で沖縄人が朝鮮人と間違われて殺されたという事はありえたことである。私は上目黒にすんでいたが、いまの荏原区にあたる場所で、そこはそれほど危険でなかった。揺れたなと思ったらあっちこっち火の手があがり、その後朝鮮人がどさくさに紛れて物を盗むとかいろいろデマが飛んで、それで先手を打って殺したということではなかったかと思っている。目黒方面も勿論被害はあった。品川の高輪などは、大きな屋敷があるので危険がすくなかった。

大正13年1月13日頃また近衛三連隊から呼び出しを受けた。その時、イギリスの皇太子がきて、天皇の御下賜金2円50銭を慰労金として支給していたのを、私には未支給という

のが分かったようで、呼び出されて支給された。

## 大阪での警察稼業

大震災後は混乱状態だったから、とても大学に戻る状況ではなかったので、本土行きをすすめた疋田さんが京都出身だったから大阪へ行くことになった。それは、疋田さんに、火事場泥棒的に品物を持ち出した人が大阪にいるということで、品物代金を取り立てて欲しいと依頼されたからである。それで大阪に着いた時、市電の四ツ橋駅方面で警棒を持って、厳めしそうに立っている警察官がいた。それがなんと日大で一緒だったが、後に明治大学を出た友人だった。当時は余程の障害者でない限りは採用されるという状況だった。そして、「大阪の警察はよいぞ」といわれ、その人の紹介で大阪市港区の市岡で警察官採用試験を受験したら、一回で合格した。私は、本気ではなく、軽い気持ちで受験したが、口頭試問で彼は引っ掛かって私だけが合格してしまった。大正13年5月に警察官を拝命して、8月に警察学校を出るや、現在の旭橋で此花警察署を振出しにして、警察稼業が始まった。近くの此花区四貫島の通称軍艦町には、沖縄県人が沢山いて、博徒打ちやらいろんな人が花札なんかで博打をやっていた。

また、沖縄県人は安治川で石炭担ぎ屋をやっているのが、殆どだった。四貫島と九条との間に橋があり、石炭船が乗り付けて来るので、その荷下ろし作業をやっていた。その梅が辻交番に配置され、3日間交番に勤務した。すると、その側には東洋紡績工場があり、そこはウチナンチュが密集していることもわかった。それで、ウチナンチュの私が何かと便利だろうとそこに配置されたと思った。

四貫島は西原村の出稼者が多かった。大正区は東風平や羽地、それから那覇の人も多かつ

た。3日後に視察係防犯刑事に回され、非常警戒の時に関西大学の学生を取り調べ中、署長が見回りにきたので、その学生がいきなり署長の胸ぐらをつかまえて乱暴したが、私がそれをうまく対応した。すると、署長がすぐに翌日から私を釈放された受刑者、犯罪のおそれのあるものを防犯予防する担当部署に回したのである。大阪では、数ある警察署の中で私はいつも犯罪検挙数が一番だった。それで刑務所の中ではいつも私を受刑者が噂していたようである。非常に恐い刑事だが、情け深いので、本当のことを言ったら刑を軽くして貰えるよという噂が飛んでいたようである。それで、私の所が火事になったとき、元受刑者達が手伝いに来てくれたし、道であっても手を挙げていつでも挨拶するような関係になっていた。これは、ウチナンチュ、ヤマトウンチュの区別はなかった。博打で逮捕されて、本人が白状しても、私の方で、「嘉手納君に似ているが、私は嘉手納君を知っている。彼がこんなことはしない。君は今後嘉手納君の名前を使ったらいかんよ」と、不起訴処分にしたこともあった。その点ウチナンチュは私がいたおかげで助かったので、私が旭橋から転勤になったら、ウチナンチュは「惜しい人が転勤になった。惜しいな惜しいな」と残念がっていたという。

### 沖縄への出向

その後、沖縄に出向していったのが、昭和3（1928）年のことで、沖縄県が私をすぐ警部に採用したいということであった。

その年は、田中義一内閣時代で、全国各都道府県に特別高等警察課（特高課）というのを設置した。そして当時、井之口政雄とか徳田球一とか沖縄出身の共産主義者がたくさんいて、彼らを尾行するのが私の任務だった。私が沖縄へ行くときに、船で偶然にも尾行す

ることになっていた井之口政雄や浦崎ムセイ、後の康華さんらが一緒だった。その時は総選挙（第16回）があったときで、井之口政雄が立候補していた。それで昭和3年2月1日付けで出向を命じられ、6日に沖縄へ着いて、10日には沖縄県庁で保安課勤務ということになった。最初の約束とは違っていたが、もう仕方がないということになった。それで、私服で那覇署勤務になった。井之口政雄から徳田球一の情報をとるように命じられた。それで島袋チョウホウ署長以下4～5人で尾行することになった。その年から全国に思想上要人物のカード（ブラックリスト）を配付していた。私の同窓関係のハマモトチョウコウ君、喜屋武保昌さん、安里源秀さんも思想上要人物になっていた。安里さんは宮崎農林の教諭をしておったが、私はそれらのカードを抜き取り、彼らは転向したものとして抹消した。私がそういうことをしたとは、あれから彼らに会っていないので、彼らには知らない事実である。

選挙が済んで（2月20日）、井之口政雄が落選したので、そのまま那覇署の刑事を命じられ、渡名喜、粟国、渡嘉敷村などの離島、各市町村の収入役などが横領した事件の捜査を命じられた。那覇署に特別高等課という政治警察部門があり、それは思想・情報収集がその任務だった。

その仕事を全うするためにそれぞれをやり玉にあげていった。自分は粟国出身だが、仕事だからやりにくいという事はなかった。粟国に札付きの人間がいたので、それでとうとう刑の執行をおこなった。村長らは起訴猶予にした。

それで総選挙がすむや、各離島の事件を摘発していった。そして5月頃に保安課に戻った。それから、同年、試験を受け警部主計になった。

保安課にいたとき、九州で銃剣道の各県対抗試合があり、私は柔道2段で出場したが2等賞になったということで、朝日新聞に大きくでたことがある。それで、150円という大金も賞金として貰った。それから沖縄へ帰ったらすぐに警部補候補試験に合格した。1号合格証書だったが、これらの証書は全部、空襲で焼けてしまった。8月31日には、部長を拜命して、思想・視察係を命じられ、9月1日付けで特高課に行かされ、それで沖縄県における特高網の分類をすることになった。そこではじめて、思想要注意者をそれぞれ尾行もやりながら、分類していくのである。それで湧川聾人、小田栄・俊夫、山田有幹（大工組合）なども思想要注意人物として分類されていた。それから、私と同級生で東大にいった豊見城村出の喜屋武保昌君が、引っ掛かっていたので、彼が沖縄に来たとき、一度辻（遊廓・社交場）に連れていき、そこで「僕が共産党に入っても君が入るとは思いませんでしたが、どうしたんだね」と笑ったことがあった。「あんまり派手に動くなよ」と話して帰したことがあった。

昭和3年に御大典記念式典が京都で行われたが、そのとき大阪から出向して沖縄へ行ってなかったら、多分私も警備のために出席していたと思う。当時護得久朝章（戦後「琉球政府」時代の立法院議長）さんが警察にいたので、沖縄からの総責任者として、20名～30名を引率して警備のために派遣された。

祝宴の招待者は、判任官一等から町村長だったら税金85円以上の納入者とか、県会議員、中等学校の85円以上給料の先生などに限定されていた。私は沖縄の特高にいたので、私はその資格があるのか否かのチェックをする仕事を仰せつかり、後に御大典記念賞を授与された。沖縄では課長クラス以上がそれを貰って、平では私位だったのでは無いかと思う。

その時、師範学校の先生がたにもお会いして、私が警察勤務になっていることが初めて知られた。

#### 栗国村村長に

それからまもなく、栗国村では村会議員が一致して私を村長に推挙した。

それで警務課長、警察部長や地方課長やりに相談したら、「栗国村は税金の滞納が多いので君、是非行ってくれ」と言ってくれた。しかし、私は2月に沖縄に来たばかりで栗国島には公民権もないので困ってしまい、承諾するか否かの意志を決定するのにちょっと手間取った。保安課長は反対していたが、野村という地方課長は行くことを勧めていた。それで、村会が、満場一致で私を12月12日付で村長にすることを、12月10日に決定したのは、違法だから取り消すようにさせた。私が警察界を去ったのちに14日付で再度決定させて、私は村長を引き受けることになった。それで、12月20日に村会を招集して、昔の市町村条例の第6条に制限特免というのがあり、公民権を付与するという決議をさせた。

こうして栗国村長を勤めることになった。その時村有船をめぐって島を二分する難題を抱えていたが、それをうまく解決したので、村民には喜ばれた。それで、私はそれだけやればもういいだろうと思って村長をやめることにした。私は村民の支持がどの程度あるのか知るために昭和5（1930）年4月に県会議員選挙があり、私は立候補して、村長を辞めた。当時は、村長を辞職しなくても、立候補は可能だった。ただし、管轄下の票は無効ということだったので、例えば栗国村で私に投じた票は無効になる選挙法があった。そこで、終戦直後弁護士をやっていた中本亀五郎と相談して、離島連盟というのを結成した。当時の県会議員は、中頭から8人、島尻から8人、

国頭6人、宮古、八重山各2名で、那覇区が4人で30人が定員だった。伊平屋、伊是名、粟国、南大東島、渡嘉敷、渡名喜、具志川、仲里村でもって連盟を結成した。それで、離島から2名当選させた。私は立候補したが、落選した。それで私は、これを機会に元の古巣に戻ろうとしたのに、粟国村の私の支持者がまた、村長に復帰させようとした。もう1回引き受けてくれと、午前3時頃辻遊廓で寝ているところを起こされた。昭和5（1930）年4月中旬、結局再選されてしまった。しかし、再選されると間もなく私はまた大阪に戻ってきた。というのは、大阪にも那覇にも粟国島出身が大勢いるので、どんな生活状況かと視察にきたが、それは再選の就任挨拶でもあった。そのとき、大阪の警察にも挨拶に寄ったら、和歌山出身の森田という人が、警察に戻らないかと誘ってくれた。その頃には、信頼していた議員までが、村議会を招集しても出席してこなかったのだから、これではやってられないと思って、予算の原案執行したりしていた。それが尾を引いて、ゴタゴタしてさらに反対派が後で税金不納の運動をしていたので、そのあおりで、学校教員の給料不払いにまで発展してしまい、それは村長のやりかたが不味いからそういうことになるのだと話が広がっていき、教員も反村長になっていた。それで、学校の予算権は村長の方にあつたので、教員の昇給をストップさせた。すると、彼らは学務部長に嘆願に行ったので、私は新聞に投稿した。恒産なくても恒心あるのが、教員だと反論した。そこで、島のみんを仲良くさせるために、村民大運動会を開催してそれを土産に辞職することにした。しかし、村会議員には、君らは議会に出席しなかったのだから、責任をとって辞職しろ、私も辞職するといっみんなをやめさせたが、私の辞表は承認されないままになっていた。助役は、私の親戚

の自家筋だった。すると、また、私の派が多くて、さらに、村長になってくれと嘆願してきた。それで、これでは粟国に戻ったら身体を壊してしまうから、とっている内に、昭和7年になった。村会で議決して村長になったので、村会の承認を得ないと辞表は承認されない。こうして、議員がいないままにズルズルになって、2カ年もゴタゴタが続いたのち辞任した。

### 再度大阪へ

そして昭和7年10月頃再度上京した。最初の上京のきっかけを作った疋田さんの元へ寄った帰りに、松野頼三自民党代議士の父で、松野鶴平という政友会の大物の所へ寄った。すると私に1500円という大金を提供してくれた。私は政友会系で、村長時代にも大阪の政友会の吉津ワタルという医者選挙運動をしたこともあった。粟国の村長もしていたので、党勢拡大の意味合いもあったと思う。というのは、私とつながりの深かった金城三郎さんは自分一人で沖縄の政友会を担っていたひとで、その金城三郎と松野さんはオイコラの間柄だったようだ。

1500円を貰ったので、沖縄へ帰ろうと大阪の四貫島へ寄ったら、以前沖縄那覇市の辻遊廓で料理屋をしていた阿波連という知人がそこでも料理屋を営んでいた。しかし、その時料理屋を売って、沖縄へ引き揚げるということになっていた。それで私がそれを買うということにした。急遽予定を変更して、240円で店舗を購入したので、宮城島出身の岸和田紡績にいた娘を料理屋に勤めさせ、その経営を始めた。

240円で料理屋「うるま」を買った残りのカネは、選挙の時に毎晩20円ずつばらまいてきた。当時は、2円50銭では相当酒が飲め、どんちゃん騒ぎができる時代だった。しかし、

良いことづくめではなく、選挙違反で家族に心配をかけたこともある。

私の結婚は大正12（1923）年8月のことで、昭和7年に四貫島に来たとき、妻は粟国島に残こしてあった。しかし間もなく、兵役除隊後の義務だった簡閲点呼を沖縄で受けねばならないという通知を受け取ったのを機会に、「うるま」料理屋をたたんで四貫島を後にした。

しかし、昭和8（1933）年に三たび大阪に出てきた。そして大阪市西区九条で大阪府社会課民政関係の宿泊所の書記として勤めることになった。政党政治が軍部の圧力で次第にその力を発揮できなくなってきた時代だったので、そこを約4か月ほど勤めた後、私は警察のほうへ受験した。斉藤実内閣時代だったので、今だったら大丈夫だと言われたので奉職することにした。それまでも何度か連絡は取っていたので、その都度進言してくれる人がいた。政党政治が強い時は、選挙のたびにどこに移動されるかわからんよといわれてきた。いまは安全地帯にいたほうがよいと進言してくれた。それで、いざ奉職しようとしたら、政党運動したことがあるだろうと聞かれた。強いて言えば、国家主義的な気持ちはあったかもしれないが、これといった運動はしていないと答えて、警察に入れて貰えた。それで、昭和8年5月1日に拝命して8月に船場警察、今の東警察に赴任した。以後昭和15年5月14日までそこで勤務していた。

## 転職

昭和15（1940）年粟国郵便局長が急死したので、その後釜として郵便局長になるように勧誘され、自分も恩給もついているし、警察はもう辞めたかったので、それで辞職して粟国島の様子も知る意味で故郷に戻った。

しかしながら、もうすっかり大阪に馴染ん

でいたので、それでまた大阪に戻ることにした。

そこで、昭和15年、沖縄県人の山城という経営者の屋宜鉄工所、改名して昭和工機という会社にまず勤めることにした。その当時、沖縄出身で日本共産党幹部になった松本三益さんにも労働者に思想の変更とかストライキなどさせないように接触するようにしていた。松本三益さんは大正13（1924）年に此花区の警察署、旭橋にいた時、私の借家裏に兼島という人がいて、そこに下宿していた。松本さんに来る手紙が、私の家に間違えて配達されることがあり、その手紙をよく持っていったりしていたし、同郷の者だということもあって「従業員を騒がさないで」と言ったりしたものである。

ところが昭和16年11月頃、兵器本部に仕事先をかえた。また、古巣の警察に就こうかと思っていたら、十三警察の知人が兵器本部を紹介してくれた。そこへ就職したら、光精機という秘密工場があり、その大阪出張所に回された。そこは、銃剣、曲射砲、97ロケット砲、99式山砲などの兵器工場で、そこへの出張所長を命じられた。私の勤務先は大阪造兵廠だった。それから名古屋の熱田、千種、佐世保、小倉の5箇所の工場を扱うことになった。名古屋以西が私の担任地区だったが、それは村木中将という人の任命だった。十三の警察署で部長に拝命するかという所だったのでその点は信頼があったといえる。これまでの生活体験が、一般の大阪出稼ぎの生活者とまったく異なるのは、いわば沖縄師範出身のインテリということになり、付き合いの範囲が異なっているからである。いつも沖縄県人に会ったときに言っていることは、「一つの牙城を作ってはいけないよ。団結のためならそれは良いが、物はひろく浅く広げて、個人的に中心を持つのであって、一つのグループ

で中心を作るのはいけない。そうすると悪を生み出す傾向がある」ということだった。私が沖縄県人との付き合いがなかったということは、かれらを馬鹿にしてきたというわけではなく、沖縄民族の誇りをもって異境の地で大地にうんと足を踏みしめてきたからである。

### 終戦直後に立候補

光精機の工場は、昭和20（1945）年3月13日の大阪大空襲で全部やられたが、その出張所長は引き続き引き受け、8月15日に戦争がすんだ後は職場の残務整理があり、それを片づけたので翌年昭和21年4月1日付けで辞表を出して辞めた。その間、責任者の元中將は進駐軍がきたら逃げてしまったので、私が進駐軍に2回も応対してきたし、また米軍憲兵隊を2回訪ねていった。残務整理は、昭和21年8月頃まで続いた。

終戦直後から、大阪市北区や大淀区でも市会議員に立候補して、後進のために道を開こうとしてきた。自分が犠牲になってでも思ったが、どちらでも成功した。第1回目の選挙の時には、戦時中兵器本部にいたということで、この戦争の加担者としてレッドパーズ（公職追放）にあって、当選したが無効にされて、次点の者がくりあげ当選した。定員2名に対して、7名が立候補したが、戦前の政友会関係の票や琉球大学で国際法を教えているS君がまだ関西大学時代だったので、応援弁士として私と二人で自動車で演説して回り、当選したのである。その時の演説は、マッカーサー連合軍司令官を批判する内容で各地を回った。それで、警察から呼ばれて進駐軍批判したら困ると言われた。S君は、自由の大切さを訴えた。市会議員に立候補したのは、昭和22年のことで、3850票ほどは獲得したはずだ。疎開して大阪に戻って来ていない人たちもいたので、沖縄県人の数はそう多くはなかった

がそれでも当選できたのは、援護団体連合会として、宮城県の石巻から貨車一台分の蒲鉾などを入手して配給したり、いろいろな形でみんなに恩恵を与えていたからでもある。

先輩や後輩のために人がやらないことをやって、気炎を吐いてきたということは自慢できる。

### 南島会の結成と南島会自警団

大阪における沖縄県人会の一種といってよい南島会の結成は、昭和21（1946）年4月頃で、その結成にあたって私が音頭とりした。南島会を結成したのは、沖縄県人のみんなが路頭に迷っていて、住む家もなく掘っ建て小屋や防空壕に住んでいたりしているという状態だったので、なんとかしようというのがきっかけだった。

南島島の発会式は、大阪市北区の天満劇場で行った。沖縄県人だけでなく、大島の人や沖縄に縁のある他府県人も全部招待した。1400人ほどが来て、会場一杯だった。盛大に催したので友利の名が知られた。

沖縄人連盟の腕章をつけて、闇市で朝鮮人などに「おまえら馬鹿なことをしてはいかんじゃないか」と言ったりして、因縁つけているのを静めたり、他府県人が彼らにショバ代をとられるのを助けてやったりしていた。だから、北区の区長や、学校の校医、市会議員などを来賓客として、招待したら来てくれた。沖縄の空手を演し物として、瓦を13枚ほど割らしたり、沖縄の三味線や踊りも披露させた。その発会式の時に、宮城遙拝をさせ、戦没者への追悼もさせた。みんなが進駐軍が怖いという時代にそんな超右翼的なことをさせていると反対するものもいた。そのまえに、私は、東京で全国右翼団体30数団体が会合を開いたとき、飛び入りで演説したこともあった。当時の国際新聞という記事に、「徳田球——派



の征伐に友利仁三郎氏ら大阪を発つ」という大見出し記事が掲載されていた。

そういうこともあって、私も参加した沖縄人連盟の東京大会には、沖縄県人同士左右の対立があるということで愛宕警察署からも警察官が動員されていた。私は、徳田球一氏の揺るぎない信念そのものには敬意を払うが、沖縄は徳田氏のものではないのだということを強調した。民主主義は、少数意見も大切するのが大事だといった。敗戦直後の警察は、闇屋には頭があがらんし、右翼の方が力があり、本当の力を発揮していなかった。朝鮮人は天下をとったような勢いで、闇市でも暴力団のようにショバ代をとるし、このままでは駄目だと思った。

#### アメリカ軍政下の沖縄を利用

「第三人」との間で次のような悶着もあった。大阪市北区天六に「シナ人」が不法占拠していた329坪の土地があった。その地主が東という奈良の医者だった。その友人に3名の医者が出て、彼らは私が進駐軍の二世などと交際しているということを知っていた。それで、この3名の医者が、「シナ人の呉というひとがあちの土地を不法占拠しているので、なんとかならないか」と相談にきた。彼らは、その土地に家を建てて、新築祝い用の花輪などを飾ったりしていた

南島会では、自警団を組織して、その見回り用に腕章もこしらえてあった。（それも保存してある）。会員に柔道五段の金城さんがいたので、彼に自警団の団長を依頼して、闇市での沖縄県人の防衛をしていた。それで彼を中心に角力選手みたいな屈強の若者を約40名ほど集めて、「シナ人」の不法占拠地帯で上半身裸にして、デモストレーションのつもりで角力をとらしたりして、力を誇示した。

「僕等は沖縄人だ。日本はアメリカに負け

たのであって、きみらに負けたのではない。沖縄はアメリカのものになったのだから、僕等はアメリカ人だ。だから、君らは弟分だ」と言って、とうとう彼らをその土地から追い出した。

そこで友人に大工がいたので、その土地に掘って建て小屋を30軒ほど早急にたててくれと頼んだ。資金は私が工面して、国津橋富士銀行支店から17万円引出してきて、掘って建て小屋を建てさせた。そこに沖縄県人と土地の人半々を入居させて、建物の裏の方では食べ物商売をさせた。私は地代と家賃は取ることにした。不法占拠地帯の取戻を私に依頼した3名の医者が保証人になって、坪5円で借りることになった。結局、「シナ人」が不法占拠したらいつまでも土地が戻ってこないが、私の場合は医者が保証人になっているので、地主としては安心だった。その上、空き地が沢山あったので、坪20円でまた貸した。

沖縄県人の泡盛屋で一部の朝鮮人がただのみして、暴力団みたいに暴れたりしたので、そこで県人が投げ飛ばしたら、実際傷を負ったかどうかはわからないが、南島会会長の私の自宅に約300人ほどの朝鮮人が押しかけてきたことがあった。昭和21年11月頃で、ケシヅミの原料を能勢（大阪府豊能郡）に仕入れに行ったりして、闇商売に夢中のころである。巡査が7～8人ほど来ているのに、なんの役も立たなかった。それで私と伊良嶺という人と警部3人で朝鮮人連盟幹部のトップと話し合って、決着を付けた。夜中2時頃、酒5升と1500円でかたをつけたが、ハウテンボというのが、朝鮮人連盟の責任者だということだった。彼は、私の所でチョイチョイ囲碁をうったりして、心安かったので、俺の顔を立ててくれと頼んで、彼にその場をおさめるようにさせた。沖縄の連中も金を払わんということをやったのではないかと思う。300人ほどが

押しかけてきても私はちっとも怖くなかった。というのは、戦争の末期から戦後23年頃までは、命は何時飛ぶかわからんと覚悟していたからである。

当時、因縁をつけるやりかたとしては、金を持っていそうな通行人にわざと空の財布をポーンと投げて拾わせて、持ってきたら、俺の金をとったなといいがかりをつけたりしていた。警察がどうにもこうにもならん時期があり、南島会の自警団がそのような連中と渡り合ってきた。私がそういう朝鮮人を張り飛ばして、交番所に連れて行ったこともあった。それほど警察の方は、私が闇市をやっているとはみなさないで、私に治安を任せていたら大丈夫という考えがあった。

しかし、警部の中には「飲食店の多い場所は闇市とみなす」という者がいたので、「そんな定義どこにあるねん、そんな馬鹿なことはないだろう」と反撃した。南島会の自警団に対して、犯人検挙などで警察の方が随分助かった。

#### 「OKINAWA USA」バッジの威力

私は、「第三人」との悶着を沖縄がアメリカに占領されているのを逆にとり、アメリカの権威が利用できたのに味をしめ、さっそく「OKINAWA USA」のバッジを作らすことを思いついた。そのバッジは、OKINAWAもローマ字でその下にUSAを刻んだハート形のもので、国鉄に依頼して昭和21年5月頃に作った。最初は、制服まで考えていた。しかし、それは金がかかるというので止めた。

さらにそのバッジの所持者は汽車に無料乗車できるよう、進駐軍に公文書を発行させて、許可を得てあったのである。（そのための公文書も全部もっていたので、探しているがいまのところ見つからない。それなどいい

歴史資料だとおもう。必ず探し出すつもりである）。

南島会は、名称を変更して引揚者援護団体連合会に加入しており、その団体は鉄道省も認めていたので、私の作成したバッジを持っていたら、沖縄県人は無料で乗車できるように取り計らえてもらった。私は、そのバッジで全国を無料で乗車できるよう連合軍の極東委員会と交渉したが、「大阪府下では可能だが、全国の無料乗車は難しい」と言われた。司令官のサインがあるその書類を持っていたので、私は国鉄の駅長を納得させることができた。そのバッジは約1500個ほど準備したので、少なくとも沖縄県人1500人はそのバッジを付けて買い出しにでかけたはずだ。（そのバッジが一個でも残っているのか否か、探しているところである。）

#### 南島会の引揚者援護連合会への加入と援助物資のトラブル

その後大阪府の引揚者援護連合会という団体が結成された。沖縄の場合は、外地からの引き揚げだけでなく、本土からさらに米軍占領下に引き揚げていかねばならないので、他府県人よりも大変困っているから、私は沖縄もそれに加入すべきだと考えた。それで沖縄の南島会を沖縄相互扶助援助協会という名称にして、その名で特別に加入させてもらった。この大阪府引揚者援護連合会の初代会長は大阪人の堀成夫という計理士だったが、その後私も会長を引き受けた。その引揚者援護団体連合会の事務所は、梅田駅前の第一生命ビル前の大きな広場に構えていた。いまでもその団体はあるが、現在、沖縄は加入していない。

その加入によるメリットは、官庁における民間の許可事項を優先させるとか、旧日本軍の払い下げ品である毛布、靴などを援助物資

として、優先的に払い下げてもらえることだった。

終戦直後、沖縄が米軍占領下におかれているということで、日本政府は、日本に滞在している沖縄人になにかと優遇して物資を与えてきた。それを沖縄県人の一部特権階級が換金して着服していた。それで私はそのような不公平を無くそうと脅迫も受けながらいろいろ試みてきた。しかし、それでも埒があかんものだから、進駐軍までのりこんでいって事の次第を告げ、沖縄へ逃げた物資横流しの張本人のひとりを引っ張ってきて、実情を明らかにした。それで、友利はうっかりできないカミソリみたいだという評判になった。もう悪いことはできないよということになった。

私の考え方は、占領下の沖縄なるがゆえに大きな犠牲になって本土を救ったではないかという誇りを持っての行動だったら良いが、火事場泥棒でもない、第三人でもないのに、犠牲となった沖縄県民の代償のかわりに物をくれろというのは、浅ましい考え方だということであった。東京で沖縄人連盟の大会が開催された時、ねじ込んでいった時に演壇でそのように述べた。我々は、物欲しそうにしてはいけない、後々沖縄人が大道を闊歩できないような汚名を残してはいけない。官庁を騙したとか、他府県人を騙したということをおわられたらいかん、と演説したものである。郷土史家で有名な、仲原善忠なども参列している時だった。

私が摘発しようとした相手側も暴力団みたいになり、裸になった屈強な男達が構えているし、それに対抗して、こっちも一升瓶を持たして、相手がピストルなどを持っていないかぎり、その瓶を割って向かっていくように指示していた。島榮君なんか私と同じ考えで、沖縄人連盟の中の悪い連中を成敗しようという考えだった。八幡一郎君も私と仲間で上江洲久

君も兵庫県の本部から出てきていた。だから、友利という名前は戦後大阪で沖縄県人の組織作りの創始者として、第一声を出した者だということはいえる。

#### 事例19.

嘉陽勤氏（昭和18年生・父宗介は今帰仁村湧川出身、母ツルは本部町瀬底島出身で堺市海山町生まれの沖縄二世・1980年大阪府堺市海山町で聴取）

#### 沖縄二世の困窮生活

私は、男・女・男・女・男・女と産み分けられたキョウダイの五番目の三男として、大阪府堺市海山町二丁目の「五十軒長屋」で生まれた。小学校は、三宝小学校、中学校は月州中学校、高校は大阪電気通信高校へ進学した。

終戦間もない昭和22（1947）年頃堺市の新日本機械という軍需工場跡地を父が買収した。信号機から次の信号機まで全部うちの土地だった。なんで儲かったかということ、終戦後朝鮮人や沖縄県人を雇って密造酒や闇タバコなどの闇商売をして儲かった。大がかりなことをしていたらしい。そこで現在地にいまは200坪しかないが、数万坪の土地を購入して、なにに不自由もしない生活を送っていた。それは、私が小学校3年昭和27（1952）年のことで、それ以来現在地に居住するようになった。ところが、父はまもなく、故郷に錦を飾りたかったのか、土地をほとんど売り払って沖縄へ戻ってしまった。しかし、沖縄ではやることなすこと全部ことごとく失敗してしまった。母の反対を押し切って帰郷したので、引き揚げてこれない状況があるうちに、沖縄人の情け深さで、彼女が出来てしまい、子供が3人もできたので余計引き揚げて来れなくなった。そ

の前にも沖縄と商売で行き来しているうちに異母キョウダイが2人出来ていたようで、結局私の異母キョウダイは11人もいた。それで母ツルは、物心両面で非常に苦労したうえ、父の沖縄での気侷な生活を耳にして、何度自殺したいと思ったか分からないと語っていた。私は、小学校4年から皆と遠足にも行けない程貧しかった。それで小学校6年の頃から家の手伝いとして、豚・鶏・ウサギ・山羊を飼育していたから、それらの飼料を毎日集める仕事を任された。堺の南のマーケットに残飯を貰いに行ったり、豆腐屋ではオカラ、魚屋ではアラ、八百屋では大根、キャベツの葉っぱなどを貰ってきた。さらに、大和川べりで野草を摘んで、それらをもとに家畜の飼料作りをしていた。それは雨降りでも欠かせない私の作業日課だった。

私の小学校時代からの特長は、喧嘩好きでいつも喧嘩して回っており、その辺では有名だった。喧嘩好きがこうじて、将来はヤクザか自衛隊員か政治家になろうと思った。

父が沖縄へ引き揚げた時、一番上の兄貴が大学の2年、末っ子の妹が小学校1年生だった。全部が学校へ就学していたので、当座の金は置いてあったが、長男は大学を中退して働きに出て、長女はちょうど高校を出たところだったので良かった。次男・次女は中学までしか出れなかった。私は、大阪電気通信高校に入学をしたものの授業になじめず、結局煙草吸ったり、喧嘩したりして停学処分を受けたりしたので、とうとう3学期には退学してしまった。そして、ゼネラル電気をはじめいくつかの仕事を転々としはじめた。当時、給料はどれも安かった。妹は、兄姉にならって定時制高校に通った。母は、リヤカーを引いて、廃品回収業をしていた。この辺の沖縄の人は全部手っとり早いその仕事をしていた。だから、子供たちは母親の苦労を見かねて学

校へ行けなかった。さらに母は、この辺の大和人の百姓仕事の手伝いをしたり、内職したり、パートに出たり6人の子供を育てるのに相当苦労してきた。

父親が沖縄へ行ったきりだから、姉妹はオヤジをオヤジと思わないほど反発している。死んでも線香もあげたくないという気持ちである。しかし、沖縄を否定しようという気持ちまでは持っていないと思う。6人きょうだいの中でも父親は、とくに私を可愛がっていた。だから父親のことは大事にしており、沖縄に行くたびに小遣いを置いてくる。人間だれしも人生の道を誤ることはある。それを許してあげる気持ちがこちにあるかないかという問題であり、私は許している。小さい時から元々反発していなかった。

#### 堺市内の擬似沖縄ムラ（沖縄県人密集居住地域）と二世の沖縄初体験

私は大阪府堺市海山町2丁目の「五十軒長屋」で生まれたが、この2丁目の住民は、貧しい沖縄県人が大半を占めていた。長屋の後ろに養豚小屋を作り、そこで近所の人達と豚3〜4頭を共同飼育していた。戦後物心がついた頃の記憶としては、ガスもなく使用済みのコークスなどを拾ってきてカンテキ（七輪）で食事作りをしていた。また、水道は道路脇の共同水道を皆が使用していた。このウチナーンチュの町内では夕方になるとお母さん達が一斉に七輪を持ち出して、団扇であおいでサンマなどを焼いていたし、いろんなオカズの匂いをさせて、味噌汁作りなども戸外でやっており、夕飯の匂いがただよってくるので、子供たちは長屋から離れた場所で遊んでいても、帰宅したものである。終戦当時のことだが、他の町内ではあまり見かけない風景だったので、それでここは「カンテキ長屋」といわれていた。

また、この町では年がら年中、沖縄の踊り唄三線などに囲まれていた。近くに「沖縄人連盟会館」（戦後の沖縄県人会の前身の会館）があり、そこでは琉球民謡や琉球舞踊の催しも行われていた。だから、沖縄のムラがこの大阪に移ってきたと思ったら良い。

それで、私が初めて東京や北海道に遊びに行った時とは違って、沖縄に初めて遊びに行った時は、自分の大阪の地元の町を大きくしたような町みたいで、大阪の地元の町と沖縄が同じだという感覚をもった。

沖縄でタクシー乗っても、ラジオから沖縄民謡が流れてきたらホッとした。それでいま大阪で自分の車には年がら年中、沖縄民謡のテープを流して聞いている。

ここに住んでいる私の若い衆でもある27歳の青年が結婚するとき、相手は大和人だが、ウチナー方式で、家で三線を弾いて踊りなどをやっていた。私は、結婚式場から帰ってきたら、嫁さんとお前は家で座って近所のウチナーンチュを集めて、沖縄料理をだして結婚最初の日から沖縄の方法で慣らしていけとアドバイスした。

私の方は同年代でも特に沖縄人意識が強いほうだと思う。高校一年の16歳の時に母親に連れられて沖縄へ初めて行き、沖縄が好きになり、最近では年に2～3回沖縄へ行っている。親戚が一杯いるので、沖縄本島をほとんど回った。母のおばあさんの法事のために母と一緒に沖縄へ行き、その時は母も私も父に会った。一週間ほど沖縄を従兄弟だとかに案内させてもらった。父とは、私の年齢が感受性の強いときだから打ち解けることはなかったが、親戚の同年齢の子と一緒に今帰仁村、瀬底島から各地を回った。当時、どちらも水道もなく、電気も夕方から夜10時頃には消えるという状態だった。「エライとこやな」と思った。「水道はどこや」と聞いたら天水を

溜めたものを示された。

沖縄ではまず、青い海、青い空が気に入った。だから、19歳の年から沖縄県人会の役員をさせて貰っている。その年から一世の方々と県人会活動してきた者はここにはいない。この海山町一帯は沖縄の人が多く、この辺だけでも約200軒もある。湊地区に約50軒、浅香山町に約40軒、それに泉北ニュータウンにも各地域から集まってきている。丹念に調べたらもっと沖縄出身者が住んでいるはずだが、今のところ約200軒という数字をつかんでいる。

## 二世の沖縄差別体験と沖縄人意識

いまでこそ東京人、大阪人という呼び方が通用するけど、日本復帰前まで、大和人は、沖縄人を何か悪いことをしたら、すぐ沖縄人がやったという見方をしており、沖縄人を朝鮮人的扱いをしていた。当時の沖縄人という呼び方には侮蔑的なものが込められていた。だから、小学校時代から物心がつく二十歳前後まで随分心を傷つけられた。それで沖縄人ひとりが悪いことしたら、沖縄人全部が悪い言い方はやめろと言っていた。私は、戦争のいい悪いは別として、沖縄決戦が無かったら、本土決戦だったんだぞ、沖縄があれだけ犠牲になっているのではないか、沖縄を馬鹿にしたらアカンと言っている。小学校でのエピソードとしては、当時人権擁護的な教育は進められていなかったのだから、先生でも平気で沖縄人と馬鹿にした言い方をしていた。友達も、何か気に入らなかつたら、「なんだ、こら沖縄人！」という言い方で罵られることはしょっちゅうだった。嘉陽という姓は独特だったし、沖縄出身であることは隠しようもないものだった。

ぼくも朝鮮人を馬鹿にしていたので、そのような扱いを受けているなど、感じていた。

そういう事があっても学校の先生は注意しなかったし、嫌な思いをしていた。

ここでは、沖縄から来た人たちは、私の母を含めてみんなウチナーグチ（沖縄方言）を使っているの、小さい時分から沖縄人を意識していた。だから、私はウチナーグチをみんな聞けるし、また、県人会の集まりで二世の私でもウチナーグチを使っている。この辺のひとみんながウチナーグチを使用している。だから、小さい時から、自分は大阪人ではないという意識があった。また、自分の子供は6年の男子、2年の女子の2人いるが、2人とも甲子園野球では、興南高校（沖縄）しか応援しない。大阪のPLなど応援しない。

## 二世のウーマク（腕白）歴とボランティア活動

高校中退後、ゼネラル電気に入社したが、上司と合わなかったの、まもなく辞めた。私はよく働くからそこを辞めたらあっちこちの会社から誘われた。私は他人には絶対に負けないほど働いているので、気に入らんことがあるとこんなに働いているのにと自信過剰すぎて、こんな所で働けるかと、すぐに辞めていったので、あっちこちで働いている。

小学校から天下きってのウーマクだった。友達をよく泣かしたので、先生に「学校を移れ」とか言われた。中学時代でも喧嘩が一番強かったがグループ引き連れて喧嘩するという事はなかった。小学入学前から風呂の薪を割ったりして、腕力が強かった。

（嘉陽勤著『地獄極楽わかれ道』1992年2月15日発行の自伝によると、嘉陽氏は、暴力事件で8回、傷害事件で6回、計14回警察に捕まって調書をとられ、昭和37〔1962〕年3月7日には、浪速中等少年院に入院することになった。昭和36年17歳ですでに山口組系暴力団の代紋〔組員バッジ〕を貰っていた。

そして、昭和38年4月15日に奈良少年院を退院出所した。退院後、組事務所へ赴き足を洗う意思表示して、19歳で堅気の世界に戻った。そして少年院でたての頃は、近所の人たちは怖がって話しかけてくれなかったが、同年生や年下の仲間達は慕ってきた。それで、少年院の体験が、五体満足で自由に生活できることがどれだけありがたいことかがわかり、社会的弱者に対するいたわりや思いやりについて考えて、自分で出来ることは何かということで、身近な所でできるボランティア活動を思いついた。）

そこで、すぐに仲間を集めて「青年開発」というボランティア組織を発足させた。まず手始めに夜歩きが怖い町内に防犯灯を設置し、近所の公園にごみ箱を購入したり、老人ホームの慰問、献血運動への参加、盆踊り大会を催してその収益金で身体障害者センターへ車椅子を贈呈したりした。

この「青年開発」グループでは、野球チームを結成して昭和46年には堺北軟式野球大会では優勝したり、キャンプやスキーなどにでかけたりして、人とのつながりも広げ、さらに他人からの信頼も深まった。また、海山町青年会を結成して若い者を集めたりしていたので、こころで目立った存在になった。青年会の9割がウチナーンチュだった。野球やったり親睦活動をしていた。相撲とかマラソンとかでも強かった。

このボランティアグループの活動は、新聞でも何回かとりあげられている。昭和49（1974）年9月18日読売新聞にもその紹介記事が掲載されている。

「弱者救済に励む青年グループ社会奉仕グループ青年開発代表世話人嘉陽勤 私たちは昭和45年4月に同土78人が集まって結成した全国でも数少ない内容を持つ社会奉仕グループです。18歳から35歳位までの青年。口先だ

けではなし若さと情熱、責任感と実行力で助け合い、学び合い、有意義な青年時代をすごそうではありませんか、会員一人一人の問題提起により運動を展開して、外部から要請があればそれにも応じます。会員募集、主な活動内容－交通遺児救済運動、身体障害者支援活動、献血運動、老人ホーム慰問、町の美化運動、…その他。会費による会員内レクリエーション、野球、スケート、スキー、ハイキング、キャンプを行っています。昭和48年3月には大阪街づくり賞優良団体賞を授与されています。堺市、泉市、松原市、泉佐野市より感謝状を貰っています。」

また、昭和53（1978）年6月3日付朝日新聞には、「青年開発」が車椅子二台を朝日中学という身体障害者28人が学んでいる学校へ寄付したことが報じられている。28台しかないので予備が必要だった。昭和51年5月6日付産経新聞でも堺市の青年開発が施設の子ら京見物へ、映画村へ招待したと報道している。この「青年開発」の若い者の比率は、6割が沖縄人で、4割は大和人である。

### 結婚と政界とのつながり

私は22歳で結婚してアパート住まいをしていた。1歳年下の妻とはスポーツを通じて中学2年（彼女が1年）の時から付き合いだった。私は、何事も一生懸命やるほうだから、器械体操の近畿大会で優勝したこともあり、妻は陸上選手だったのでクラブ活動で知り合った。妻は大和女性で、両親は、PTA役員などもやっていて、物分かりの良い人だったので、沖縄人だから交際に反対するということではなかった。ヒンスムン（貧乏人）が二人一緒になった。私に10万円の貯金があったので、それを結納金として持っていき、それを相手が持参金という形で持ってきて、それで所帯道具を買い求め、新婚生活が出発した。

兄弟や友達から貰った祝儀で、沖縄へ新婚旅行に出かけた。1966年のことだったので、パスポートが必要だった当時、船旅が普通だった。妻は、最初の沖縄の感想をあまり漏らさなかった。金がないから親戚の家を泊まり歩くという、顔見せ程度の旅行だった。結婚した当初は無職だったので、ハネムーンから帰ってきたらすぐに、仕事探しをはじめて西日鋼運輸に就職した。月収は約20万円で当時の大卒初任給の7倍ほどの高給だった。

給料袋は、必ず仏壇に供えて手を合わせた。

私は政治の世界には21歳の時から飛び込んでいる。この堺市から衆議院議長までやった松田竹千代という代議士がでており、それは沖縄県人も多く応援している。私の妻の親戚筋にあたり、妻の親戚の者が代議士の秘書もやっていた。その縁で私は自民党に入党して、選挙があると有給休暇をとって選挙運動に加わっていた。昭和46年の参議院議員選挙の時、一龍齊貞鳳の選挙運動を頼まれ、当選するやそれまで勤めていた西日鋼運輸は退社してそのままこの代議士の秘書になった。

しかし、短気者のこの代議士とソリが合わず、1年半ほど秘書を勤め、29歳でそれを辞めた。選挙の時とか、行事の時などに私が若い者をたくさん引き連れて頑張るので目立ってきて、自民党の中で一定の評価をうけるようになり、秘書を辞めたら堺市の自民党本部事務所で職員として働くように誘われた。

### 沖縄とのつながり

自民党の事務所関係では、沖縄ということで嫌な思いをする事はなかった。沖縄問題に触れることがあるときは、私に相談に来るようになった。今現在でも、2件沖縄関係の相談事を抱えている。例えば海洋博当時、沖縄の不動産屋を通じて沖縄の土地を購入した。しかし、値段が動かないので、買値で売った

いから売却して欲しいと頼まれた。また、女子高校生が、5人で家出したが、沖縄にいるらしいということで父母から嘉陽さん沖縄の人らしいねと相談がきた。座喜味副知事、比嘉副知事宛の紹介状を書くから、NHKテレビで放映してもらえば、行く先がわかるのではないかといった。すると、その通りに実行してもらいTVのニュースに出たら、スナックで働いていたようで、雇い主がびっくりして早速連絡して、翌日にはすぐに消息が掴めた。また、ここの大学生のアベックが沖縄のムーンビーチで米兵と知り合って大麻をもらい、それを吸ったら良い気分になるということがわかり、缶に入れて持ちかえろうとしたら、那覇空港で発見され留置されたということで、父母がやはり駆け込んできたので、西田健次郎県議員に連絡して、釈放してもらった。逆に、沖縄から家出した子供を見つけた場合もある。

義弟が沖縄から尋ねてきたので、弟は2階にあげて、下宿代もとらんから一生懸命働けよといった。義弟の関係の友人たちが随分ここにやってきた。居候したり、駆け落ちして逃げ込んできたり、高校中退してやってきたり、うちの家で居候して帰っていったのは数えきれないほどいた。駆け落ちしてきた子は、妊娠していないかとチェックしたり、一から十まで面倒みてやった。17、8歳で親が結婚を承諾するはずがないと説教していった。その連中は生活が苦しく逃げてきたのではなく、ヤンチャな連中で、いわば不良グループだった。ある女の子は、看護婦になりたいということで、病院を世話して看護婦寮に入れた。その子も、寮で着物を月賦で買って、金も払わずに沖縄へいつの間にか逃げていった。これも、沖縄で捕まえた。沖縄中に親戚はいるし、警察も良く知っているし、県庁やらにも知り合いが多いから、逃げたらすぐ捕まえると言っ

てあった。捕まえて月賦は払わした。沖縄帰ってヤクザしている若い衆もいる。

40歳位のおっさんも世話したことがある。沖縄の宜野湾市に妻子を残してきて、落ち着いたら呼び寄せるということだった。建築関係の仕事をしたいというので、友人の建築屋に紹介した。だが、3～4か月働いたら、前借りしてトズラしてしまった。こんな現状をみたら悲しくなる。

しかし、久米島出身でしっかりしている子供もいた。那覇の蒲鉾屋の娘で駆け落ちしてきたが、家に2年ほどおいて、ちゃんと仕込んでいた。そして家にも連絡させて、沖縄でもその両親にあって、もうこうなったら仕方がないよとあきらめさせた。そしていまでは、子供も作って一生懸命働いている。それでも電話や手紙などでお礼のひとつも言ったことがない。私から電話かけてちゃんとやっているかと尋ねるほどである。親の仕込みが悪いということがいえる。議員になってから、ここ4～5年の間に年齢18～40歳の人達約30人ほどの沖縄県人を世話してきたけど、まともな者は一人しかいなかった。全部裏切られてきた。飲み食いして食い倒し、買い物しては掛け倒し、というのが多い。本土ではナイチャー（他府県人）に負けないように一生懸命がんばっているのに、沖縄から来たものがその信用をいっぺんになくすようなことをしていく。だから、沖縄県内で、社会教育、学校教育、家庭教育を三者一体として考え、取り組んでほしいと、西銘知事にも話したことがある。

堺市でも雇用対策促進協議会というのができ、求人のために各企業が沖縄県に行っていたが、いまでは沖縄県人の評判が悪くまったく行かなくなった。以前、沖縄県人は、よく働くとともに評判だった。集団就職の採用のために、各企業が沖縄へは全部行くほどだっ



た。

とにかく沖縄からいろんな人間が我が家を駆け抜けていった。

### 沖縄二世の沖縄的生活様式

妻は学校時代から世話好きだったので、いろんな人が出入りすることを特に気にしていない。夜来たらわかるけど、若い衆がテレビみたりごろごろしている。私はいまでこそ家にはやく帰ってくるようになったが、以前は遅かったので帰宅したら、若い衆が私の飯を食べてしまって、自分の分がないということがたびたびあった。私はこの自分の家を自分の家と思っていない。若い衆が勝手に入ってきて、勝手に飯食べて、勝手に帰っていく。ひとが寄るといいことである。ウチナンチュやヤマトウンチュも分け隔てがない。寝る寸前にしか鍵も掛けない。夫婦2人いなくても鍵をかけないし、若い衆が勝手に自由に入出入りしている。人の世話をやることによって、自分の人格を形成していけるから、何か直接的にひとに役に立つことをするようにと話している。貧乏人ほど本当の心の豊かさを持っている。金持ちは、年中どうすれば金儲けができるかということを考えているから、心の貧しい人が多い。

### 政界への進出

秘書などの給料は薄給だったので、昭和47(1972)年4月、28歳の時から中華料理店を営むようになった。それでかなりあっちこちと繋がりが生まれた。一龍齋議員の秘書を辞めた時、子供がすでに2人もいるのに仕事のあてはなかった。それで、ヤクザ時代の兄貴分が中華料理店を開いていたので、そのノウハウを教えて貰って、同じように中華料理店を開こうと考えた。それで、私を兄貴分と慕っている大和人、沖縄人の青年5人に仕事

を辞めて、中華料理屋の見習いに行ってくれと頼んだら、その通りに実行してくれて、超スピードでそのノウハウを学んできてくれた。それで、28歳で友人12~13名から無担保、無利息で450万円ほど借りて店をやりだした。従業員には、借金を返済するまでは、無給で働けという無茶なことをいって、店の2階の6畳、4畳半の部屋で6人一緒に雑魚寝して、睡眠時間毎日3時間ほどで猛烈に働いた。20歳頃から付き合いがどんどん広がって、交際費もかかり、乳飲み子2人も抱えて1日500円で過ごすほど、経済的に大変だった。

ところが、「喜楽亭」という店名の新装開店した中華料理店は、大当たりしてもものすごく儲けて、1年2ヶ月で借金は返済した。従業員5名の若い連中と雑魚寝していた。しかし、ずっとそういう訳にもいかないので、従業員に家を建てさせてくれとあってこの家を建てた。昭和49(1974)年8月、「青年開発」の仲間40数人と淡路島へキャンプに行ったとき、県人の友人たちの中から、「堺市議会には沖縄県人の議員がいないから昭和50年の市議会議員選挙に立候補してみ」、という話が持ち上がった。自民党の職員だったし、政治に興味はあるが、まさか自分が立候補するなんて思いも寄らないことだったので最初は断った。なにしろ、選挙の条件といわれている地盤(支持母体)、看板(知名度)、かばん(選挙資金)が皆無だったし、年齢も若干31歳で学歴も高校中退、おまけに少年院とヤクザの経験もあるので、とても無茶な話しだと思った。そのうえ前年に現在住んでいる家をローンで建てたばかりだし、とても選挙資金を自力で工面することは出来なかった。ところが、仲間たちがどんどん話しを進めていき、しかも選挙資金もかき集めてきて、「かよう勤後援会事務所」まで旗揚げしてしまった。

当時ロッキード事件が発覚して、田中角栄元首相が逮捕されるというショッキングな事件もあり、自民党に対する風当たりが強かった。それで無所属で立候補するよという声も多かった。しかし、所詮私は自民党の事務職員までやっている自民党员なのだから、自分の姿を隠すことは良くないと考えた。若いのに、よう自民党を名乗って立候補したなと自民党の強い支持者からは、高く評価されるよという声もあった。それで政治を張るのなら、露骨に自分の信条を明らかにしないとダメなと考え、無所属からでは立候補しないと断言した。沖縄県人会のウチナーンチュの票だけでは当選にはおぼつかなかった。県人会といっても、共産党、公明党などの支持者がいるので、最初は県人会長が立候補するということに対して反対も多かった。

立候補するにあたって、ウチナーンチュという面は意識させられた。というのは、私が実際に立候補したら、大和人の中には、「彼は沖縄人だから応援しにくいな」と言われたことがある。そんなことも私の耳に入ってきた。「そういうひとの応援はいらん」と私は言った。

### ボランティアグループの選挙運動

その市議会議員選挙で、自民党は10人ほど公認したが、選挙戦に入ると3人しか自民党公認を名乗ることはできなかった。ボランティアグループがいろいろな手作りの選挙応援をしていき、カネのかからない選挙運動のなかで、選挙戦の最中郵政・文部大臣を歴任した松田竹千代先生が東京から応援に駆けつけてくれるなど、一気に選挙運動は盛り上がった。カネのかからない選挙の実態として、私は人件費を一銭も払ってないし、看板も手作り、選挙事務所もタダで提供してくれた。

最初、新聞の予想では、当選には程遠いと

×がついていた。私は「みんなが僕と同じ気持ちだったら、やると思ったら寝なくて、めしくわんでも、必ず当選してみせるよ」、とみんなには断言していた。今でも自動車ブン飛ばす若い連中に集まってくれといえば、中心的な人物は30名ほどだが、100人ほども直ぐに集まる。みんなが手弁当で選挙運動をやった。自民党で私のような選挙運動をして当選したものは聞いたことがない。「聞くところの自民党とはまったく違うね。選挙事務所も嘉陽のような貧乏たれからカネなんかとれんタダで使ってくれ」といわれた。

私はうちの若い衆を絶対に国会議員選挙の選挙事務所には派遣しない方針である。なぜなら、悪いのが染まるからである。物のやりとり、カネのやりとりを味わったら、「あっちの選挙事務所ではカネもらったぞ、嘉陽の選挙事務所ではカネもらえない」という風潮が生まれてくるのが怖い。だから、1回目も2回目もカネのかからない選挙をした。しかし、カンパはあるわけだからそのカネは事務長に全部渡している。そのかわり、「カネの出し入れは必ず自分に報告して下さい」と頼んである。そうでないと、私は議員失格するからと。だから、あっちこっちから、私に選挙のやりかたを教えてくださいと来るが、私の選挙は情熱、人徳だから教えてわかるという問題ではない。

### 第一回目立候補の時の公約

私の選挙公約は、赤字財政の建て直し、同和行政の是正、下水道・道路の完備をメインにした堺の街作りを三本柱にたてた。当時、大阪府下をはじめ各地で同和問題が自治体の悩みの種だったので、堺市もその例に洩れず同和問題で深刻に悩んでいたもので、それを真っ向からとりあげた。それは、多くの選挙民に強烈な印象を与え、期待感を抱かせた。また、

この一帯の喧嘩には自分が必ずかんでおり、少年院にも入れられ、極道の道にも入っていたと前歴を包み隠さずに演説のなかでも話していき、それはやんちゃな性格がそうさせたことを率直に述べることによって、逆に好感を持って迎えられることになった。

現役の暴力団員が立候補しているという私に対する攻撃があったりしたが、そういう時は、その候補者の宣伝カーを追っかけて、自分は中学卒業で、相手は京都大学卒業でも事実を認識する力は、自分が優れているという自信があり、心の広さでも絶対に負けないと反撃した。

選挙結果は、立候補者76名中4255票獲得して、初陣ながら33位で当選を果たすことができた。（その後、2期、3期、4期連続当選を果たしてきた）。

## 二世の県人会活動と投票行動

堺市には、沖縄人連盟時代の会館があった。関西本部とか近畿本部といって思想的な対立の時代があったようである。それで、会館はあるのに県人会の催しはそうなかった。県人会に入ったころは、沖縄返還運動という大義名分があったので面白かった。返還運動のために「沖縄を返せ」というプラカードを持って、御堂筋あたりをデモ行進したりするのが楽しかった。仕事の都合であまり参加はしていないが、この辺の10人そここの沖縄青年達を引き連れて参加したものである。

また、私は、大阪沖縄県人会連合会の青年部長もやっている。堺市沖縄県人会会長と昭和49年頃から、プロボクシング世界フライ級チャンピオン具志堅用高の後援会会長などもやっている。

現在、堺の県人会は、運営方法にまずい面があったのか加入者が少ない。それでこれまで年間3千円をとっていたが、会費を2千

円にして、1千円は支部活動用、1千円は県人会本部用に分けて、支部活動を活発化するために権限委譲するアイデアをだした。堺市沖縄県人会本部という本部方式をとり、10の支部を結成した。山本、三宝、海山、錦西、神南辺（かんなべ）、石津、湊、上野芝、泉北など10の支部をおき支部長がいる。私から3人の副会長に連絡すると、各支部長と顧問に3名が手分けして連絡する。支部には副支部長もいて会計、会計監査、幹事がいる。

私の選挙の時、県人会員の社会党員は応援してくれるが、公明党・共産党員は一步も動いてくれない。両方合わすと3分の1～3分の2ほどが私に投票してくれる。堺市の沖縄県人は、約1200所帯ほどある。それ×3が有権者とみている。そのうちの3～4割は私に投票してくれない。昭和50年の新人のとき、4255票獲得したが、そのうち1500票が県人票と分析している。2期目は5300票だった。1期目は、定員は52名で、立候補者76名中33位、2期目は立候補者69名中23位にあがっていった。初回から良い成績だった。1回目は3000票、2回目は3800票が最低当選票であり、県人が中心になってナイチャー（内地人＝大和人＝他府県人）からも支持票も集めてくるのが大きい。選挙とはそんなもんであり、運動員4000人いてもその票数の計算だけだったら落選する。選挙は単純計算できない。政治は掛けても割ってもうまく行かない、妥協の産物である。議会活動では、沖縄問題も取り上げている。例えば、尖閣列島問題も我慢できずに取り上げた。ウチナンチュとしてとても許すことができず、はらわたが煮えくり返り、すぐに意見書を作成した。議会開催中だったので自分で決議案を作り、議会に議員提案して、直に本会議で議決された。提案説明している時に沖縄地元両紙が取材にきて、両新聞でも大きく報道された。政府自民党にもの

申すという形だったが、その時他の野党は、賛成したが社会党だけが反対した。日中友好のムードがあるなかでそんなことをするのは得策ではないと反対したが、私は自分の領土が余所へ持っていかれようとしているのを黙って見ておれないと大分議論した。ここでは、沖縄問題と同和問題が一緒くたにされる可能性があったので、そうならないように議会でだいぶ発言してきた。

### 沖縄二世と同和問題

同和問題の私の基本姿勢は、各行政機関が主体性を持って人間差別のない社会をつくっていくのが、真の同和行政ではないかということだった。我々一般人は、部落のひとをこっちから避けて通ってきたんではない。元々その歴史の始まりは、部落の人が一般人を避けてきたんではないか。差別を無くす行政の努力は必要だが、解放運動に取り組むかたが、なんでもかんでも金を出せ、銭を取れという主義をなくすよう行政指導すべきで、かって沖縄県民は国家的差別を受けてきたうえに、本土決戦をくい止めるために沖縄決戦して、戦争に負けたあげく、大和（日本本土）がアメリカさんに沖縄をどうぞと基地に提供されてきた。それでも沖縄県民は自力更生してきた。ただ、復帰特別措置法があるが、それは大したことはない。こっちの同和行政の特別措置法に比べれば天と地の差がある。同和のひとは生まれたときから行政の補助金で手厚い補助がある。

私は将来できたら天が機会を与えてくれるなら、アメリカの黒人差別撤廃の運動だってやりに行きたい。それほど気持ちは持っている、どんなことがあっても人間差別は許されないことだ、だからあんたたちだって本当に自分たちの地域が解放されたい、日本人一般と一緒にあって取り組みたいという気持ち

があるのなら、もっと謙虚になりさいといった。わしはあんたがたの悪口を言っているのではない。もっとはい上がってくる根性が必要だといった。だから、堺市議会では、自他ともに認めている同和問題の権威者だと思っている。私ほど厳しい発言したものはいない。それに対しては、反発する人達が議会に押しかけてくるし、家に電話を匿名でかけてくるし、脅迫電話だってあった。

社会党も事の本質をわかっているから文句はいわない。抱えた荷物の重さに喘いでいる。それで解放同盟の堺支部長と書記長が私に面会に来たことがある。ただし私がどう話したかということ覚えておいて欲しいために証人を一人おいて欲しいと提案して、私の先輩議員を一人話しに加えた。あんたがたは本当に解放運動に取り組む第一人者であるなら、それは利権を探るものではない、自分は麦飯をたべていても周囲・部下には銀飯をあげるといのが真の解放者の姿勢ではないか。それが運動の先頭に立つものの姿勢だ、先頭に立つものが銀飯たべて、後のものが麦飯たべろというそんな理屈は通らない、他人にはそういうことを認められない、金儲けの話があったらそれに走る、そのような金儲けの話があったらそれに走っても良いけど、それは周囲の人にさせるものであって、自分が金儲けに走るようでは必ず滅びるよと忠告した。その人は、行政の利権ばかり追い求めたのでクビになり、裁判問題まで起きた。それで、私は、心改めるならあんたがたの証人にたって証言してもよい。どんな観点からでも証言はできるからといった。後で、堺市議会議員でわしにあんだけ物言ったのは嘉陽ひとりだとエライ気に入ったみたい。

やっぱり政治はいやらしい問題がいっぱいあり、経済・文化問題などでも政治を避けて通れない。財界の親分連中にもよく噛みつく

ことがある。自民党は黙っていても財界の見方と思っているようだが、わしは気に入らんかったらあんたら会社潰してしまう位の運動をしてみせるぜ、といった。財界という所は汚く、公害発生会社は革新野党に献金する。自民党は、献金しなくてもついてくると思っているの、卑怯だといった。公害を発生させている会社は、堺市の条例を作れば、一発で会社潰れるぜと、だから金さえあれば世の中罷り通るといふ主義は変えてもらわんといかんよといっている。物が言えるということは面白い。そのために議員になったんだから大いに物を言うようにしている。元々はヒンスムン（貧乏人）の出だから、失うものはない。

同年代の自民党議員の中でも異端児である。しかし、私はいま堺市自民党員6千人の幹事長をしている。この若さで幹事長というのは、全国でそういない。第2期目を悠々当選したので、世間は評価してくれている。

中山太郎代議士は私の最も親しい人物である。どっちかといくとこの人の門下生みたいなものである。両親が政治家ただけに、政治一家である。私は、貧乏人がいつまでも貧乏して、東大出や京大出だけが政治家になっていたら、いつまでたっても同じではないか。貧乏な庶民で、下からはい上がってきた人間がたまには必要ではないかと、それが民主主義でないかと私は話しを持っていった。私に持っていない物を身につけるためには、違うタイプの人間のところで勉強しようということで、そこへ出入りしている。自分は突っ走るほうだが、常に冷静に物を考えるようにしている。

しかし、たまには中山代議士は、私らとは次元が全然ちがう人だな、サラブレッドだなと自分が悲しくなることがある。私らは、じゃじゃ馬で意地で通してきた面があるが、彼ら

は爽やかにスムーズに事を運んでいく。大阪府会議員に立候補するように言われているが、自分は今のところ一步上の力はないと思っているので、そのうち力ついたら相談に行きますので見ていてくださいと頼んでいる。若い議員も多いが二世議員が多く、私のタイプは少ない。

### 沖縄二世の議会活動

1978年5月30日付の琉球新報は、私が堺市議会で尖閣列島問題を取り上げたことを報じている。それに関する議会議事録もある。

私は、およそ共産党がやるタイプで、共産党も好意的だった。また、昭和51年6月3日、朝日新聞では、警官が酔って屋台で客三名を殴るという暴力事件が発生して、近く書類送検されるということが報じられた。それも、新聞では、この事件について3日の堺市議会本会議で嘉陽勤（自民）議員は、市民を守る警官がいきなり市民に暴力を振るうとはと警察の責任を追及したということで、朝日新聞、テレビでも報じられた。

地下鉄を堺市に引っ張ってくることに尽力してきた。1977年9月14日付の読売新聞・朝日新聞両紙に、工場地帯への住宅が進出し、先住民の企業追い出しはごめんだと、中小企業主が団結してその動きに対応しようとしているが、堺市議会でこの問題を取り上げたのは嘉陽勤自民党議員であると報じている。また、大阪民主新報の1977年9月17日（土）付は、同和問題で次のように報じている。「同和行政転換、マンモス校の解消を、堺市議会丸井共産党議員が追及、…これに先立って自民党の嘉陽勤議員は暴力事件の背景について窓口一本化の要請が背景と指摘、部落内差別を改めることが重要として解同（部落解放同盟）へ全解連（全国部落解放運動連合会）と同和会（全日本同和会）の三団体を入れた堺

市同和関係団体連絡協議会の設置を要求して、それは設置されることになった。」

共産党の新聞記事で私の同和問題との関連を次のように取り上げている。

「1977年9月16日嘉陽自民議員は、とかくスキャンダルと黒い噂の多い同和事業に対し、昨年の市長選挙立候補者であった市長に同和对策審議会の設置を提案、同感であるとの回答を得た。市長は今こそ過去の反省にたち、決断すべきであると述べ、部落解放同盟、全国部落解放運動連合会、全日本同和会による堺市部落解放三団体連絡協議会を設置することとあわせ、市長の諮問機関として議会代表、行政代表、学識経験者による堺市同和对策審議会を設置することである。マスコミの禁句作りとか行政の一本化の市長の弊害は除去すべきであると、磯村英一内閣同和对策協議会長は述べており、嘉陽議員も堺市の窓口一本化行政こそ今回の同和問題の暴力事件の遠因であると、考えている。この暴力事件とは、解放同盟が市役所の職員を殴ったり蹴ったりした事件で、同対協の早期設置こそ急務であると強調した。翌年その対策協議会は設置された。」

こういう記事があるように、自民党議員の私が、共産党ともたまには共闘している。

「貧乏人の市営住宅に金持ちが入り込んで、出ていかないとはどういうことや」と怒ったこともある。議会活動に当たって、私はなんでも専門家に相談しに行く。着眼点はどこにおくべきかということを探索していくのである。どう展開していくかを考えてから、専門家に聞きに行く。その場合も自分の党内に固執する人が多いが、幅広く聞かないと偏ってしまう。私は府会議員に立候補しようと思う時点では、自叙伝を書こうかと思っている。

（嘉陽氏は府議会議員立候補を間近に控え、前述の自伝『地獄極楽わかれ道』を発刊した。

だが5ヵ月後の1992年7月19日肝臓ガンと壮絶な戦いの末、志半ばにして、48歳の若さで急逝した。）

## 事例20.

当間勇氏（昭和29年生・父は那覇市・母は豊見城村出身で尼崎市南武庫之荘（旧守部）生まれの沖縄二世・1981年兵庫県尼崎市で聴取）

〔当間氏は、兵庫県尼崎解放同盟の教宣部長と沖縄県人会兵庫県本部の青年部長を同時に兼ねている希有な経歴の持ち主である。〕

## 沖縄二世の苦悩の沖縄意識

現在、父（大正9年生・戦時中沖縄県那覇市から出稼ぎにきて、関西に定住）は、失業対策事業の日雇い労働者として、尼崎市のグラウンドの清掃とか植木の手入れなどを行っている。

母（大正7年生・名古屋の紡績女工として豊見城村から出稼ぎにきて、関西に定住）も同じく、失業対策事業の日雇い労働者として尼崎競艇場で負け券が散乱しているのを清掃する仕事に就いていた。

沖縄を意識するようになったのは、進学やら就職の時期に差ししかかったときの中学3年生からで、初めは沖縄に対して良い印象をもっていなかった。進学問題が持ち上がってきた時、家庭の事情、経済的問題で支障があり、自分もあまり勉強が好きでなかったので働こうかということになり、定時制高校に進学しようということになった。その際、沖縄を意識することになったというのは、親父の甲斐性というのを見ていくことになったからである。家のなかで沖縄の唄を歌ったり、沖縄の友人を呼んでドンチャン騒ぎをしているので、「酒ばっかりくらいやがって」、と思った。

そういう親父をみていると、それが沖縄というものかと、二重写しになっていった。それで、沖縄とは嫌な存在だと、意識するようになった。その点、特別に「一旗あげれた」（いわゆる成功者）という一世の家族以外は、たいてい、そのような家庭環境から沖縄を意識するようになったといえる。

父が友達を呼んで酒を酌み交わす、それが夜遅くまでドンチャン騒ぎする。そういうことは再三あった。4畳半と6畳の家に6人家族で住んでいるのに、他家の小父さん（沖縄一世）がサンシン（三線・沖縄三味線）持ち込んできて、ベンベンと近所迷惑も考えないで騒ぐので、嫌やというのが沖縄の最初の印象だった。それで、沖縄の唄や踊りも嫌やと印象づけられた。

しかし、親に対する反発の気分があったが、高校時代、甲子園野球では沖縄代表を応援していた。身近なところの沖縄には反発していたが、例えば、甲子園で地元の尼崎市の高校と対戦しても、沖縄を応援していたはずだ。その理由はわからない。自転車に乗って中学時代から応援にでかけた。会社勤めになると、日曜日だったら応援にでかけた。テレビはほとんどみる時間がなかったが、夜遅い時間に、沖縄関係のドキュメント番組など両親がよくみていたので、そういう場合は、狭い家なので見るとはなしに、沖縄ものを見ていた。

### 進学と部落解放同盟との関わり

尼崎城内高校の定時制過程の商業科に進学して、部落解放同盟との関わりがそこで生まれた。昼の仕事は、市内の日東アルミという鉄工所で旋盤工として勤めた。15歳から19歳までを対象にした求人情報を新聞で調べて、学校も行けそうな会社を給料や待遇面から自分で選んでいった。給料は、昭和44（1979）年2万1千円からスタートして4カ年勤務し

て辞める時には7万2千円ほどにあがっていた。組合もしっかりしており、待遇も良かったのでどんどんベースアップしていった。給料のおおかたは家に入れてあった。住まいは、アパートでいわゆる文化住宅だったから水道もちゃんとあり、トイレも屋内だった。

ところが、高校入学間もないころは、仕事もさぼりがちになり、学校も休んだりするようになった。仕事にでかけるのだが、下車すべき駅を通り越して、そのまま大阪の梅田まで乗っていき、大阪でブラブラ過ごし、しかも定時制高校が終わる時間まで金も持っていないのに盛り場をうろついて、ゲームセンターやらパチンコ屋に入り浸っていた。そこに行くと、似たような連中がうろついていた。家も学校も面白くないし、仕事はきついし、投げやり、半分捨てっぱちになり、盛り場は面白いもんだから、ついついそこへ足が向いて行った。同期に入社した同じ年頃の子がいたが、それも一緒に誘って遊んだりしていた。すると、学校も休んだりしているのをみかねた同じ高校で2年先輩のひとが、私にへっついてきて、家まで尋ねてきたりした。さらに会社にまで尋ねてきたりして、「甲斐性なしと思っている親をもう一度見直せ」と言うようになった。

最初は取り合わなかったが、あんまりしつこいし、先輩に逆らうのも怖いので、義理で親と話し合うようになったら、次第に父親と打ち解けていくようになった。

その先輩というのは、学校内に部落研究会（略称部落研）があり、自分も同じ未解放部落で生まれ育った人間だし、その出身だということで関心を持ったようである。もともと小さい頃から少年野球などで一緒だった先輩が、部落研に入って賢くなったので、私がフラフラしているのをみてなんとかしたいと思ったようである。先輩に引っ張られて、親の体

験をじっくり聞ける状態が生まれてきた。

神戸製鋼の社外工のアンコウとして働いていた父は英語の読み書きが出来たので、輸出関係の仕事も担当していた。アンコウというのはきつい仕事で、身体も丈夫ではないほうだったが、15年も勤務したが本雇いにはなれず、会社に利用された形だった。書道が上手だったので、会社の看板書きなんかもやりながら、アンコウというきつい仕事もしてきた。

父は、上司とのいざこざがあったのでどうにも腹の虫がおさまらないということで今から7年前（1974年）、私が高校4年のとき辞職したが、退職金は7万円しかなかった。それで夜中、気分が滅入っていたのか酒飲んで暴れたりした。しかし、これまでだったらそういう時に親の話を書くということもなかったが、その時、父から話を聞くことになった。口惜しい父の話をきいた。あがいてもあがいてもどうにもならない父の体験を一晩中きいて、それをきっかけにして私はコロッと変わった。高校卒業直前だったが、私自身父を見る目が変わり、無茶苦茶いわなくなったし、弟らが父に反抗したらそれをたしなめるようになった。

大なり小なり、25歳位になると親と話が出来ようになるものだが、私はそういうきっかけで、20歳前で父と話すことができた。

高校を卒業する前の3学期に「部落研」に入会したが、以前からそれに入っている同級生がホームルームの時間でいろいろ発表する時、それは私にとって耳の痛い話だったので、「そんなホームルーム潰してまえ」と、外に仲間をひっぱりだしてソフトボールやったりサッカーをやったりしたものである。父から体験談を聞くまでは、同級生の話を受け付けなかった。状況がよくわかるから反発したものと思う。しかし、それから邪魔しないようにしていき、おとなしく、下向いてじっと聞

いていた。

私が急に学校も仕事もさぼらんようになり、わりかしちゃんとやるようになり、変身したので、同級生は不思議がっていた。盛り場の連中は、最初家に電話をかけてきて誘っていたが、それに応じないのでそのうち縁が切れていった。

高校卒業後は、市役所の事務職試験を受けたが落ちた。鉄工所を退職して受験したので明日から飯食っていけないからどうにかしてほしいと頼み込んで、ゴミ清掃の現業にいらしてもらった。1年その仕事をして2年目も再度市役所に受験した。2度目には合格したので、税金の差押えの仕事を4年もやったうえで、現在の仕事をしている。差押えの仕事は嫌だった。零細企業の倒産が多かったので、会社のロッカーや机を横付けにしたトラックで持ち運んでいった。

#### 沖縄県人二世の県人会への参加過程

周辺の一世代たちと自分の親の姿は、二重写しになるので嫌だった。17、8歳の頃家で酒飲んで騒ぐ近所の沖縄県人のおっちゃんたちの首を捕まえて外に放り出したりしていた。高校2年位になり体格も大きくなり、力もついてきたので弟達が試験の最中で必死に勉強しなければいけないとき、酒飲んで騒ぐ相手は酔っぱらってもいるので、「いい加減にせんかい、二度と来るな」とおっぼりだしたりもしていた。なにしろ、自転車で帰宅したら、自分が座る場所もないくらい部屋いっぱい広がって酒飲んでサンシン弾いて騒いでいたものである。そういうことをしていたので、無茶苦茶したなと反省して罪滅ぼしもせんといけなかったのが、県人会活動に参加した動機と言える。「おっちゃんすまへんな」という気持ちで参加するようになった。つまり、自分の行為は正当ではあったが、親父ら



の生活史をきくことによって、皆がくだを巻かないとやりきれなかった思いを知ることになった。そして、なんとなく自分の行為に後ろめたさを感じるようになり、県人会へ参加するようになった。

今、友人の仲間君の親父も私がそのようにおっぼりだした口だと思う。その父親は、いまではそのことを忘れてくれているのか私と話してくれる。なにしろ、私の弟らは、私がスポーツ刈りするとそうするし、パーマをあてるとそのようにするし、私の真似をするので、弟らも私同様に父の友人を手荒く扱うようになったかも知れないが、ちょうど私が変身したのでよかった。高松、戸の内、長洲あたりの県人はだいたいそのような状況だったはずだ。というのは、最近の各支部の青年部長というのは、私と大体同年代なので、話してみると同じような体験をしているのが話の端々から伝わってくる。

#### 県人会活動とウチナンチュ意識

沖縄との関係は、親がだんだん年取ってきたので、県人会の寄り合いに親の代わりに私が出席するようになった。それで大人の付き合いをやるようになり、いつのまにか県人会全体の会合にも出席するようになった。そして青年部長をいつの間にか引き受けさせられた。最初の県人会の寄り合いの印象は、年寄りばかりで陰気臭いなと思っていた。たんに親睦団体で今の世の中はどうやこうやというような話はやりにくかった。ただの年寄りの寄り合いという感じだった。今の県会でも年寄りのためのものだという印象ではあるが、しかし、それもしかたがないと思う。なにしろ一世の人達がここでずっと生活してきたわけだから、年寄りが集まってワイワイする場を潰してはいけないと思っている。県人会は、年寄りには久しぶりに知り合いにあっ

て、心から喜びあえる貴重な場所である。

しかし、県人会活動の中で、何かやりたいと思っていた。だから、同級生が家の周りにたくさん住んでいたの、みんなを集めて野球チームを作ったりしていた。大武支部の青年部も潰れていたが、それを再建しようとした。弟の友達を集めたり、同じ年格好の青年を集めて、野球やったりみんなで酒飲みに行ったりした。

年寄りには、昔の苦勞話を披露するのが嫌がる。父も私が父のことは、書いたり話したりしたら最初は嫌がっていた。おまえまたどこで話しただろう、お前にはなにも話ができないという。しかし、そんなことも最近では言わなくなるほど信用されてきた。なにも悪いことはしていないし、県人会のことなどもやっているの信用されている。

私は沖縄一世の女性と結婚したいという気持ちを持っている。大和女性とは、成り行き次第という気持ちである。このことは、高松（「よんこうば」）の沖縄二世の青年たちも、同じことを言っていた。

沖縄からの集団就職青年男女の組織の「がじまるの会」の中心に、沖縄二世の仲間ヨシアキさんがいて、彼が、この地域に住んでいたから、レクレーションをやるときでも、声を掛けてもらったり、またこちらがやるときはここから声をかけたりして、その組織との関わりも持っている。今後も双方の組織が定期的に顔合わせしようと話しをしている。

また、沖縄一世の尼崎市市議員の宇栄原議員は、選挙の時は若手がポスター張ったり、宣伝カーに乗ったりして応援している。県出身ということで気軽に話しかけやすいひとでもある。年寄りも随分お世話になっている。そういう意味では心強いし、ずっと応援している。沖縄関係者が就職の世話を受けていたりしている。

## 沖縄県人と部落解放同盟との関わり

昭和48年部落解放同盟兵庫県連合会南武庫之荘支部が結成された。坂口先輩との付き合いの中で、自然に私と坂口先輩とが組んで、ここで部落解放同盟の青年部を結成しようと計画した。その結成に向けて2人が動きだして、高校1～2年生を集めて、頭数を揃えようと頑張っているうちにいつの間にか、その青年部の中心的な位置にはまりこんでいた。県人会の大武青年部を結成したときも、私が呼びかけてそれを結成していったので、いつの間にか私が中心にいた。本来、私がそのようなことをやるはずはなかったのだが、そうになっていた。昔からの青年団というのは存在していたが、こういう問題意識を持った組織作りをやるのは、私と坂口先輩の二人しかいなかった。それで、これまでの青年団の活動家は次第にしり込みしていった。部落解放を先頭に青年部を作ろうと組織していった。

ここでは、被差別部落（未解放部落）のことを「同和地区」とか「ムラの出や」という言い方をする。

部落解放同盟の活動は、住宅問題、厚生施設、水道関係など、いままで見慣れていて気がつかなかったことが、余所と比べてみるといろんな面での立ち遅れが分かってきたので、市役所に陳情をやった。おっちゃんらがリーダーシップを取って運動を進めていたが、青年部は、ムラの出としてどういう気持ちを持つべきかという話ばかりしていた。要するにオルグをしていた。初めは、高校生・大学生らが20名位入っていたが、抜けたり、入ったり、抜けても話していくと繋がったり、と言う具合で常時20名位が青年部員として活動していた。新顔が入ったり、入れかわり立ちかわりだった。おっちゃんたちというのは、45歳位だった。日本全体で昭和45（1970）年に特別措置法（同和対策）ができたので、昭

和48年位から各地に支部がどんどん結成されていき、同じ時期にここも結成された。

組合活動などをした経験者何名かが集まって、ここの支部を結成した。そしてこれまで福祉協議会がやっていた「ムラのこと」を解放同盟がやるということになった。同和予算の執行は市当局がやるわけだが、いろんな要求を同盟でやる。何らかの問題が持ち上がってきたとき、不定期で市との話し合いの場もたれる。

同和対策事業の一環として南武庫之荘改良住宅を建設してあるが、バラック建てがゴチャゴチャして、消防自動車も入ってこれないし、衛生状態も悪いという劣悪な状態だったので、昭和60年までの間でこの一帯を整備していくことになった。仲間さん、大山さんもそれに入っている。私も昭和48年から改良住宅団地に入居しているが、それも同和対策事業で建設されたものである。この地域では、その運動がない時期でも余所では改良住宅建設運動があり、それに対処していたが、それを一定地域だけ対応したら具合悪いということで、万遍なく市営住宅をちょっと建てた時期があり、その住宅に入居している。一番古いのが昭和46年に建設された。それは、特定目的住宅という名称である。4畳半などに大家族が住んでいるというような状態の家庭を優先して入居させていった。在日朝鮮人もその地域に住んでいたのだから、彼らを立ち退きさせて、改良住宅を建設していったので、解放運動を理解し、また協力もして、さらに学習もするという暗黙の条件のもとで改良住宅団地に入居させている。沖縄の人は、何年以上ここに住んでいて、解放運動に賛同しかつ協力することだったら解放同盟への入会申込み印鑑を押して、改良住宅団地に入居させている。初めは何年以上の居住者という条件をつけていたが、ケースバイケースで決まって

くる。ただし、利権が生じてくるので入居は慎重に検討していく。改良地域に引っ掛かっている場合は、入会をすすめることになるが、仮に支部に入会しなくても改良住宅団地に入居は可能である。この地域だけでなく、大阪市住吉や西成など沖縄県人がたくさん住んでいる地域では、県人も部落解放同盟の支部員として関わっている。未解放部落のひとたちと、沖縄出身とムラの出という分け隔てもない位、一緒に仕事をしてきた。

部落解放の拠点といわれている所に26年間住んできたし、沖縄のこともやるけど、地元のことにも精一杯やってきたし、部落解放運動のことも一生懸命やっている。昭和54(1979)年4月から教育委員会社会教育の中央公民館南武庫之荘総合文化センターができ、公民館には係長と私の二人が常駐して、同和問題の啓蒙・啓発の仕事をしている。また、同和对策室というのが別にあり、そこには7名もいて、周辺の幼稚園、学校に行って、育友会(PTA)のお母さんたちと話しをしたり、同和問題の学習会をやろうと話をもちかけ、講師を依頼したりしている。その仕事に携わっているものは、ムラ(未解放部落)の出と一般の人との比率は半々である。

前号(第18巻第2号)の訂正表

頁	行	誤	正
71	右22	かられら	かれら
81	左23	夫	私
86	右86	大正区	此花区